

近代雄弁学

イヴォ・ラペンナー博士著
小島輝久訳

下

RETORIKO

**KUN APARTA KONSIDERO AL ESPERANTLINGVA
PAROLARTO**

**Verkita en la Internacia Lingvo
de
D-ro Ivo Lapenna**



FOTO KEHLET
Kopenhago

Lefopemul Z

Kopirajto

**Reprodukto, ekstrakto aŭ traduko en kiun ajn lingvon nur
kun la permeso de la aŭtoro**

© Ivo Lapenna 1974

著者：イヴォ・ラベンナー

1909年ユーゴスラビアのスプリットに生まれる。

ザグレブ大学法学博士、米国フォート・ローダーデール大学国際法学博士。

ザグレブ大学で以前、国際法と国際関係の教授であったが、現在はロンドン大学でソビエトと東ヨーロッパについての比較法学に関する教授である。

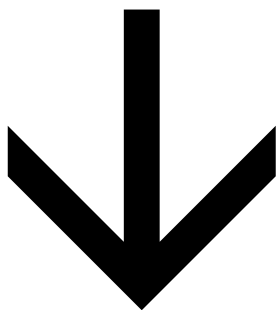
1946年、彼は国際法学者として、ユーゴスラビアの政府代表団に選出され、パリの平和会議に参加した。1947年から1948年の間、彼はハーグにある国際司法裁判所である世界の最高法廷で、国家のために弁護の弁論をなしている。この功績により、1948年にユーゴスラビア科学アカデミーの名誉会員に選出された。

1938年より国際エスペラント連盟の幹部役員であり、1947年よりUEA（世界エスペランド協会）に統合されてからもその役員、1955年～1964年、UEAの書記長、1964年～1974年、UEAの会長であり、1974年までCEDの監査役であると先に創始者でもある。

彼の著書で代表的なものを挙げると

- フランス語：Conceptions sovietiques de droit international public
- 英語：State and Law ; Soviet and Yugoslav Theory
- 英語：Soviet Penal Policy
- 国際語：Retoriko
- ：Aktualaj problemoj de la nuntempa internacia vivo (1952)
- ：La internacia vivo (1954)
- ：Elektitaj paroladoj kaj prelegoj (1966)
- ：Por la pli efika informado (1974)
- ：Esperanto en Perspektivo; faktoj kaj analizoj pri la internacia lingvo. (1974)

といった書があるが、その他にもドイツ語、イタリア語、クロアチア語で書かれた多くの書がある。



目次

目次

この書によせて……………	一三
イントロダクション……………	一七

第二部 雄弁学

第八章

雄弁と雄弁学……………	二三
-------------	----

第九章

雄弁家の物理的要素……………	五五
1、外觀……………	55
2、音声……………	57

第十章

(a)、音声の高さ	62
(b)、演説の速度	66
(c)、音声の強度	83
(d)、音声の音色	91
(e)、句読法	93
(3)、身振り	97
4、服装	104
雄弁家の知的要素……………	一一〇
1、一般教養と専門知識	110
2、言語知識	114
(a)、言語比喩	115

(b) 思考比喩 125

3、三つの知的活動 134

第十一章

雄弁家の倫理的要素……………一四二

1、実直 145

2、勇氣 151

第十二章

聴衆……………一五八

1、物理的条件 162

2、知的水準 169

3、倫理的資質 183

4、三つの主たるカテゴリー 186

第十三章

演 說

1、演說の種類	194
(a)、専門演說	200
(I)、科学、教訓、教育的演說	201
(II)、教会演說	182
(III)、政治演說	204
(IV)、法廷演說	207
(V)、軍事演說	209
(b)、非専門演說	210
(I)、講演	211
(II)、式辞挨拶	212

第十四章

2、演説構成 214

導入 (I) 219

本論 (II) 225

帰結 (III) 229

3、プレパレーションとエロキューション 240

結論……………二四六

付録……………二五二

I、ブルータスの演説 253

II、アントニオの演説 257

III、著者の演説 270

—この書によせて—

雄弁法や韻文は美しいものを愛好する世代が民族や民衆の驚くべき可能性を有する言葉より開花させた2つの芸術である。

両者共長年の間結合し合い、混合し合っていた。偉人ホメロスの豊かな川の流れを想わせる明文、ヘブライ預言者達の熱情をかきたてて止まない激しい言葉、何が我々の心をとらえて離さないであろうか、言葉のもつ魔力なのか、それとも論証が有する説得力なのであるうか。我々の世紀よりも五世紀もの以前に於いて、ヘレナ思想家達はこれ等の2つの現象の考察や分析に自己の非凡な才能を駆使していった。彼等はそれ等の原則を定義し、それ等の法則を公式化して行つた。このようにして、雄弁法や韻文が生れ育つて来たのである。韻文は合理的な韻律をもつて、精神の中にある非合理的な力を呼び起そうと努め、我々の深奥にある自我といった潜在意識の内在を満そうとするものであった。雄弁法の方は、もう一つの同じような格調を有した道を、より社会的役割を担いながら進んで来た。

「ソフィスト」と呼ばれる雄弁学や哲学のこれ等の古代の教師達に、我々はどれ程の思恵を受けているか測り知れない程である。

彼等は言語問題を研究した最初の人達であり、彼等はまた理路整然とした論証の美しさや、

力強さを明らかにした最初の人達でもあり、彼等はあらゆる人間同士の鬭争は平和的に話し合えるものであり、武力によつて解決するのではなく、話し合いのテーブルの上で解決し得るものである事を思考し、声を大にして言明した最初の人達であつた。文章の中に言葉の調和ある並びをもたらした努力、演説の中に思考の調和ある秩序を作り出していった努力、社会の中で人間の利害關係に調和をもたらした努力、これ等の総てを我々に伝え、佳麗に話すという芸術をヘンナの教師達は我々に残してくれたのである。こうして精神文明社会が、彼等の足下に根をおろしていった。

雄弁学は破廉恥な術策の集合体とか奸智にたけた技術のよせ集めでもなく、扇動政治家とか独裁者がその威力をかりて大衆の嫌悪すべき激情をかきたてたり、彼等の心の中に憎みや狂気の炎をたぎらせるといったものではない。眞実の雄弁学は、自由の中に於いてのみ開花するものであり、それこそが生来の民主主義なのである。ラベンナ博士は雄弁学の倫理上の問題にこの本の相当のページをさいている。

雄弁学は教師の側に於ける単なる倫理や精神の高潔さを説いているだけではない。それは音や音色、子音や母音が奏でる物理的満足から、頭韻法やカデンツアによつて創られ、正しく凍結された論証や堅固に組立てられた論理の軽快な感情の吐露が生み出す知性の歎びまで、人間

の言葉がおりなす愛情を説いている。ラペンナー博士の演説を聞く幾かに恵まれた総ての人達は、彼がどれ程雄弁家の典型であるのか確認する事が出来るであらう。無比の度胸、はりのある音声、すばらしい音色をもった声、こういった自己の生来の天性に加えて、彼は大学の教師として豊富な個人的経験や理論から学び取ったばかりではなく、ハーグにある国際司法裁判所である世界最高の法廷で弁護の弁舌をふるう現実の国際法弁護士活動より生れる豊かな個人的経験より学びとった疲れを知らない不断の研究の成果が総てつけ加えられ、彼の血となり肉となつてゐるのである。彼の熱血ほとばしる説得力をもった弁舌の背後に、我々は常に緻密な資料と潤沢な教養を感じとるのである。

ラペンナー博士はエスペ란antoの事業に自分の才能をおもいきつて捧げた人である。ヘレナの最初の「ソフィスト」と同様、彼が好気心を抱き、エスペ란antoについて深く掘り下げて研究したとしても、別に驚きに値することでも何でもない。それがどこから来たのか。何故それが言語発展の最終段階を示すのか、どのようにしてそれは国家の支えもなしに存在し得るのか、総ての真面目な人達が抱いてゐる重な問題点を、彼が説明したいと考える重な問題点を、明らかにしている。彼は言語学者の道を選ばなかったけれども、フランス語、英語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語、クロアチア語を完璧なまでに自分のものとしており、これ等の言語で書を著しており、この他にも6ヶ国語を身につけてゐるといった彼の博識は、自分の考えに逆行

するかのものであるが、言語の規則とかしくみの有する無秩序の中に正しい方向を見い出す力を彼に与えたのである。

更に彼は法律の研究論文を作成する時と同様に、細心の注意力をもって、豊富で貴重な資料を集め、それを詳細に渡って調べあげる事により、言語の起源と発展についての解決すべき論題に対する最新の論理を発表する事が出来たのである。彼は歴史上の重要資料を詳しく調べあげ、それ等の適切な意味を思考し、どういった通説にも左右される事なく、真実にのみ留意して記述している所から、自己の説をより明確に不偏不動のものとなしている。

この書のように、系統的に編集され、適切で役に立つ、思索に富んだこの種の書は多くの国語で書かれた文献にも見当たらない。世界のあらゆる人達にこういった貢献をなすために、国際語でこの本を書いた著者に私は深甚の敬意を表したい。

G・バランギャン

イントロダクション

言語は意志の伝達と思索の主要な媒体である。それは揺りかごから墓場まで、人間と行動をともにする。母親の愛撫から幼児のわるさ、青年の情熱、成年時代の労働、死への忍従——これ等の総ては言語を介し、言語によって態度を示し、自己を表現し、休みなくこだまして行く。大自然の征服において、人間の形成、世界の建設において、重要な武器ともなり、人生の戦いの中で鋭い攻撃用武器ともなり、相手に協力を得る仲介者であり、相手を説き伏せたり納得させたりする手段である言語は、人間の息子であり、同時に父親でもある。それは日常絶対不可欠な手足として、あるいは相手を傷つけ時には殺傷しかねない両刃の剣として、あるいは和合や平安、平和や愛の種をまく媒介として、日常生活の中で重要な役割を演じている。人間によって創造され、それは人間自身を養ひ、人間によって進化発展させられ、人間自身と共に進化発展して来ている。

言語の役割は思考や感情の単なる技術的表現に限定されることなく、それは数々の芸術を生み出す素材でもある。彫刻家は石や金属を活用して芸術を創り出し、版画家は木材や銅塊を用

いて芸術を創り出す。建築家はコンクリートや鋼鉄を用いて建築美術を創造している。画家は色彩でもって自己の意志を表現し、作曲家は音を微妙に織りなすことにより音楽芸術を創り出している。一方、詩人や作家、芸術家は言語を用いて、自己の考えや感情といった自己の深底から噴き出す魂の発露を理解させようと意を尽している。

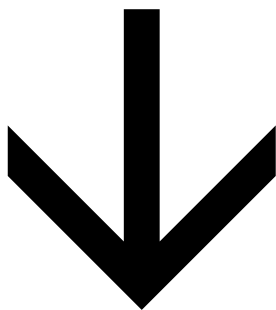
彼等にとつての言語は、思想を述べたり、互いに情報を交換し合うといった月並みの手段としてよりは意義深い。意味慎重で、深奥なものである。彼等の手の中で、それは、芸術を創り出す道具となるものである。詩人や作家、雄弁家は通常の生活で用いられているより、もっと異つた目的のために、そしてもっと違つた方法により言語を活用している。彼等にとつての言語は芸術の表現手段である。

人間の活動の総ての分野に於いて、それに附随する行動を可能ならしめ、助勢し、前進させる手段を知らなければならぬ。職人は自分の作業道具を使いこなせなかつたとすれば、上手に自分の仕事をやり遂げる事は出来ないだろうし、医者や技術者、兵士、運転手に於いても同様の事が言えるわけであり、技術関係者にはどのような例外も見出し得ないであろう。彼等は自己の表現手段としての道具の内部構造やあらゆるそのものつ性質や性能を研究しつくさなければならぬ。細心の注意力を傾注して、真剣に、徹底的に研究してゆけばゆく程、ますます上手に使いこなせるようになる。

才能なくして芸術家たる事は出来ない。これは疑う余地の無い所である。しかし単なる才能のみでは不十分である。芸術上の成功は——芸術ばかりというのではないが——単に才能と努力の積み重ねの上に成り立っている。学問と不断の研究が必要であり、学問と研究の大部分がそれを用いて仕事をするといった石とか色彩、音、語彙……等の対象物に向けられる事が絶対に不可欠である。

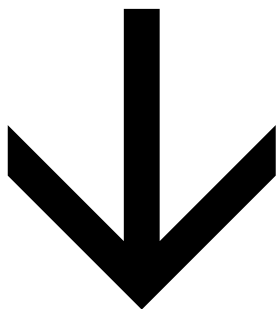
雄弁家は言語を活用する芸術家である。言語が素材であり、それを用いて芸術を創り出す。幾つかの、少くとも普遍的な言語の有する重要性に鑑みて、では雄弁学を研究しようとする場合、何が最も自然で、効果的な研究の成果を生み出すのであろうか。

ギリシャのソフィスト達は——雄弁法の最初の教師であつた——同時に、最初の文法学者でもあつたという事は、確かに偶然ではない。雄弁学を教えるために、彼等は言語のもつ構造を研究する必要があつたし、語彙の有する力量や広がり、豊かさ、範囲、限界そして文体や独自の表現手段を研究しないわけにはいかなかったのである。雄弁学のおかげで言語学の最初の基礎が芽ばえ始めたのである。



第 2 部

雄 弁 学



第八章

雄弁と雄弁学

説得力のある、的を得た話し方をして、人を魅了する天性の才能を有する人達がいる。彼等の言葉は明快であり、彼等の論証は力強い。彼等は相手をうまく説き伏せ、自分の意見に従わしめている。労働者の社会で、友人の集いや同僚の寄り合いで、彼等の思想は注目され、彼等の意見は心よく受け入れられている。彼等は雄弁である。

雄弁はこの事からも、鮮かで、的を得た、納得性のある話し方をする天性の才能であると言える。どのような場所で話しをするのか、どういった人達を相手にして話しをするのかといった事は、それ程重要ではない。路上でも、大工場でも、親しい家族的な集いでも、社交場でも雄弁であり得るし、法廷とか、国会、学上院、大学、教会、あるいは軍隊の前で………といった公けの席で雄弁に話しをする事が出来る。

雄弁はおしゃべり好きというのと何等共通性をもつものではない。必要でもない、無駄な事柄について、たくさんしゃべりまくる事が、雄弁である事を意味しているのではない。雄弁は

語彙の豊富さと同一のものではなく、雄弁な人が、おしゃべり好きであるわけでは決していない。だから、長広弁な人が、雄弁家に成り得る天性の前提条件を持ち合せているのだ、といった考え方を持つのは、誤りである。全く考え方を改めて、そうした人達は、自分の欠陥に気付き、それを改めようとしなければ、決して優れた雄弁家になる事は出来ない。彼が聴衆に向つて、話しをしようとして、多くの言葉を駆使して話しかけ、よどみなく話しをしようと努め、自分の力の限りをつくして、相手にうったえかけようとするが、その言葉は、ただ聴衆の耳を素通りするばかりで、聴衆の心をつかむ事等とうてい出来得ないであらう。

雄弁は雄弁法の基本である。雄弁が自然の中で、浪々と流れる川の流れに比較し得るとすれば、雄弁法は人意的に流れを規制し、整然とした流れを保つ力強い川である。時折、雄弁学と名づけられる事もある雄弁法は、人意的に法則化された雄弁である。雄弁法は私的な会話や思考の公的な表現、といったものに特に関係している。そして、この二つのカテゴリーの間には、非常に大きな相違がある。一方の規則が私的生活に於ける雄弁に関係しており、他の全く異なる規則が、公的な雄弁に関係している。私的な会話に於いては、的を得た、鮮やかな言葉使いをする事が可能であり、自己の表現法に、意識的に気を配る事が出来る。このようにして、より大きな効果をあげる事が出来る。この意識的に法則化された雄弁について、物事を簡略化するために、それを私的な雄弁と名付けてみよう。

私的な雄弁は、多くの書物に著されている。特に最近では、この事を言語学の観点から、あるいは心理学的観点から、かなり幅広く研究して来ている。この私的な雄弁が、実際に、意識的に法則化されたものであるとすれば、それを雄弁法と名付ける事が出来る。所が、一般にはこの種の雄弁を、雄弁法としてとらえていない。通常、人々が雄弁法としてとらえているのは、確固とした原理や法則によって支配されている公的な雄弁のみである。

雄弁法の法則を研究する科学が、雄弁学である。(III) 相手を説き伏せる天性の才能である雄弁と、的を得た説得力のある公的演説の法則を研究している科学である雄弁学との違いを、はっきりと識別しなければならない。

雄弁はどういった研究や勉強によっても、得られるものではなく、事実得られるはずがない。一方、雄弁学は雄弁を法則化し、更に高いレベル、即ち、雄弁法の域へと高めてくれる。雄弁は「ヴォルテール(Voltaire)」が述べているように「雄弁学の法則以前に生れたものである。最初に人々は雄弁に話しをする事を知り、その後、理論が雄弁な話し方の法則を、詳しく研究していった。これ等の法則は、偉大な雄弁家達の経験を基盤として、創り出されて来ただけでなく、抽象的な推論をも基盤となすことによつて、創り出されて来た。雄弁学は、この事から、雄弁法の理論である。

雄弁法や雄弁学は、古代ギリシャに於いて生れた。紀元前五世紀の中ごろまで、ギリシャでは実践的雄弁家と言われる人達だけが、幅をきかせていた。その当時までの説得技術は、生れながらにして雄弁であるといった事にかかっていた。彼等の演説は、高く真価を認められており、ギリシャの公的生活の中で、それ等の雄弁な才能を持った市民は、大きな影響力を持っていた。

紀元前五世紀の中ばに、シシリアに於いて、大衆向けの雄弁法を、理論的に研究する最初の試みが開始された。紀元前四七〇年から四六〇年の間に、シシリアの都市国家は、専制君主制を倒すことに成功し、民主政治を確立した。新しい政治状況は、雄弁法の発展に好影響をもたらした。この事に関連して、すばらしい演説の中には、或る体系が内在されており、その体系を研究すれば、説得力のある、人を魅了して離さない演説の原理や法則を見出す事が可能であるという考えが形成されていった。これ等を正しく、しっかりと体系づける事が出来れば、総ての天性の才能を有する人々が、それを学び取る事が出来る。こうして、大衆を相手とする雄弁法についての法則をうちたてる最初の学問が起った。即ち、雄弁学が誕生したのである。

シラクーザ生れのコラクレウスやその弟子ティジヌスは、雄弁法の最初の教師であり、最初の雄弁家であった。もう一人の偉大なシシリアの大家、レオンティニ生れのゴルギアス

(Gorgias)は、祖国に新しい理論を持ち帰った。紀元前四二七年、彼はシラクάζに對抗するための手助けを希うために、自分の都市の大使として、アテネにやって来た。自己の巧みな弁舌でもって、彼は有名な「シラクάζ撃滅遠征隊」を編成するよう、アテネ人を説き伏せる事に成功している。ゴルギアス自身は死ぬまで、ギリシャに残った。彼はそこで、自分の雄弁的才能を認められ、厚くもてなされると共に、彼は雄弁法を教授しながら、富貴な生活を営んだ。

一般に、ゴルギアスはソフィストとして考えられているが、彼自身は自分をそのように考えてはいなかった。プラトン(Platon)の言葉によれば、彼はいつも自分の事を、雄弁家(lector)といていたといっている。実際、雄弁法を雄弁学の一部とみなしていたソフィスト達とちがって、ゴルギアスは雄弁法にもっぱら専念し、その中心的存在となっていた。

アテネは雄弁法の単なる中心としてだけでなく、その理論の学府ともなっていた。偉大な雄弁家は、通常、雄弁法の教師でもあった。ゴルギアスの着任よりも以前に、そこにはすでに、古代アッチカの名高い十人の雄弁家の内の一人であるアンティホヌス(Antiphon 480-411 B.C.)が活躍していた。彼は演説原稿の著述を職業としており、聴衆を前にして演説をしたのはたった一度きりで、ゴルギアスの着任の前に裏切りのかどで死罪を宣告され死刑となっている。アンティホヌスは演説の原稿の著作活動に専念していただけでなく、彼自身、雄弁法の教師であ

り、雄弁法の技術についての書物を著している。アテネに於いて、大衆を相手に数学から神話学に到るまで、幅広く演説したり、講演したりしていたソフィスト達は、雄弁学の教師であった。彼等の中でも最も名を成していたのは、アブデラ生れのプロタゴラス (Protagoras) であり、ケオス島のユリス生れのプロデイコス (Prodikos) やエリソ生れのヒピアス (Hippias) であつた。雄弁法を教授しながら、ギリシャのソフィスト達は、言語を研究する必要にせまられ、そうした事から、彼等は同時に、最初の文法学者となつていった。彼等の主たる目的は、納得性のある論証や相手を説得する手法を教授する事であつた。語彙の有する多重の意味を細かく使いわけて、彼等は的を得た論証を展開しているかに見えるが、実際には、人を惑わす、不誠実な帰結にしか到つていない。彼等は哲学的な思考の発達や言語学の分野に、明らかに大きな功績をもたらしているにもかかわらず、人を惑わす結果を招くといった彼等の教えは、彼等にとつて悪い風説を創り出してしまった。その事は今日までも、「ソフィズム」といつた語彙でもつて、日常の言葉にさえ用いられているように、大切に保持されて来ている。自分の著書の中の幾つか、特に、「ゴルギアス」や「フェドロヌス」の中で、雄弁学を論じたプラトンは、彼等の誤つた言葉の使い方を指摘し、非難しながら、ソフィスト達を鋭く攻撃した。ソフィスト達は目的を遂げるためには手段を選ばず、真実に対してどのような考慮も払う事なく、どのような条件下にあつても、ただ勝つ事のみを目ざして雄弁学を説いていたと彼は述べている。

真に偉大で、高貴な雄弁法は、真理と切り離せない關係にあり、真理を勝ち取る事が、雄弁

法の基本であり、最終目的でなければならぬという事が、ソフィスト達には理解されていなかった。「ゴルギアス」の中では、ソフィストの雄弁学派に関する評論が主に論じられている。一方、「フェドロヌス」の中では、実証的な雄弁法の基本が説かれている。この書物によってプラトンは、真実の科学的雄弁学は、理論や人間の魂、特に情熱の研究を基盤として論ぜられなければならないという事を示そうとしている。だから、彼は雄弁学を、弁証法や心理学に基ずいた哲学的科学として定義づけている。

紀元前五世紀の高名な雄弁家には、すでに述べたアンティホヌスの他にも、ソクラテス (Sokrates) の友人、ペリクレス (Perikles) やエスキヌス (Eskinos) がいる。

紀元前五世紀の終りから、四世紀全般にかけての時代は、雄弁法や雄弁学の花開いた全盛期であった。アッチカの偉大な二〇人の雄弁家の中の九人までが、この時代の人達である。アンドシデス (Andocides) やリジシアス (Lykias) の書物は、簡潔な文章や明確で、デリケートな文体で知られている。二十一の演説を世に残したイゾクラテス (Isokrates) や十二の大演説を世にもたらしたイゼオス (Isaeos 420—350 BC) などの時代の人である。

ギリシャの雄弁法は、最も天才的で、最も高潔で、最も誠実であったからこそ、古代社会の中で、最も偉大な雄弁家と評され、全時代を通して最も輩出した雄弁家の一人であると評価さ

れているデモステネス (Demosthenes 384-322 BC) の光輝ある演説をもって、その頂点に達した。デモステネスは自分の演説の中に、アンティホヌスの犯すべからざる品位やリジニアスのこの上ない上品さ、イゾクラテスの魅惑して止まない文章の流れを取り入れ、発展させている。デモステネスによって六十九の大演説が世に残されており、今日まで伝えられている。それ等の中で、最も世に広く知られている演説に、マケドニアの王、フィリッポスに対してなした「フィリッポス王、攻撃演説」があり、彼の友軍に対して行なった「偽りの公使館論」や「王権論」がある。デモステネスの政敵であった同時代のエスキヌス (Eskinos 389-314 BC) は、三つの演説を世に残している。この時代の高名なもう一人の雄弁家に、エスキヌスの政敵であり、デモステネスの同志であったリュクルゴス (Lykurgos) やヒペレイデス (Hyperides) がいる。十人の中の最後の一人は、デモステネスの政敵、デイナルコス (Deinarkos) であった。

雄弁法の教師として特に名を挙げておきたい人物に、世に名声を博したカルセドニア生れの雄弁家、トラシマホス (Trasimachos) やビザンツエ生れのテオドロス・イゼオスそしてイゾクラテスがいる。

イゾクラテスは、その当時のソフィスト達が与える事の出来た最高の教育を受けた。青年時代に、彼はプロタゴラスやプロディコスから文法学を学び取っている。彼はまたゴルギアスカ

ら雄弁学を学んでいる。ゴルギアスとは最後まで私的な交遊関係を持ちつづけた。イゾクラテスはエリソ生れのソフィスト・ヒピアスの未亡人と結婚した。プラトンは彼を深く尊敬しており、次のような言葉を自分の書「フェドロス」の中に書き残している。今はまだ若いけれども、イゾクラテスは時と共に成長して行き、彼の先人の総てが、子供じみてみえる程、必ずやすばらしい偉大な雄弁家となるだろう。それは私の一番大切にしているフェドロス、確固とした哲学が彼の中に生れ育っているからである。”

イゾクラテスは他人の演説原稿の著述もしていたが、自分としてはこの仕事を好んでやっていたのではない。彼が自分の偉大な才能を捧げ、自分の全精力をつぎ込んでくいのない仕事は、雄弁法の教師であると考えていた。その当時、名を成していたアリストテレスの学校の近くには、イゾクラテスは紀元前三九二年自分の学校を創設した。彼はそこで、黒海からシシリアまで伸びたギリシャ世界のその当時の最も優れた知識や教養を教えていった。彼の学校を出たうちの四〇人以上の人達が、ギリシャ世界で名を挙げ、世に知られている。知名度の高いギリシャ人の中でも、特に雄弁家として名を知られたイゼオスやリクルゴス、ヒペレイドスは彼の門下生である。イゾクラテスは韻文の構成やリズムについての基本的法則を確立した。彼の法則は後にキケロヌスによって引き継がれ、発展させられていったが、数世紀の後、それはヨーロッパの文学の中に取り入れられ、受け継がれていった。

雄弁法理論の確立に、偉大な功績を残したのは、古代世界の中で、最も幅広い、最も深奥な知性の持ち主だとされているアリストテレス (Aristoteles 384-322B.C.) である。晩年に書いた自分の書、「雄弁学」の中で、この偉大な哲学者は、あらゆるソフィストの誤った語彙の活用や奸策から雄弁法を解放し、この分野に不動の原理を確立した。アリストテレスの雄弁法理論の説く所によれば、雄弁法は芸術作品のカテゴリーに属するとしている。優れた雄弁家が、聴衆を説得し得たとすれば、――アリストテレスは言っているが――その演説の中に、成功へと導いた原理を見いだせるという事を意味している。アリストテレスの時代までの雄弁学の教師達は、主に感情を刺激する方法や感動を呼び起す方法について取り組んでいた。その事は確かに大切なことであるかもしれないが、それは真の雄弁法と何ら共通性を持ち合せるものではない。雄弁法の基本的目標は、雄弁家の立脚点を証明するものでなければならぬとアリストテレスは言っている。雄弁学は弁証法的に、説得力をもって話す事を教える学門である。だから、その根底には理論的論証が見られる。理論の大家は、雄弁法の大家でもあるとアリストテレスは言っている。聴衆がどのような人達によって構成されているのかという事を考慮に入れて、理論的な面を強く打ち出すか、それとも感動を誘うような話し方をするのかといった事は、雄弁家自身の才能にのみかかわっている。

説得力を得る手法を模索しながら、アリストテレスは、最も優れたスタイルは最も有益な手段を用いて、最も多くの事柄を教える事にあると述べている。次に示す二つの要因は、この目

的の到達に寄与している。その一つはどのような論証や証明をもって立証していくのかといった、種々の外的な手法に属しており、その二つは、理論的で、理性的な証明、雄弁家の道徳的特質、そして權威等々といった内的要因にかかわる複数の手法から成り立っている。非常に教訓的な所は、特に論証のメカニズムや演説をなす会場の性格、雄弁家の倫理や情熱について、彼が論じている箇所である。「文章論」という小冊子の中で、アリストテレスは発声法 についての規則を幾つか書き残している。あらゆる種類の演説を、政治演説、示威演説、法廷演説の主たる三つのカテゴリーに彼は分割している。こうした彼の分割は、長年の間、演説分類のモデルとして用いられて来た。

アリストテレスによれば、次の四つの理由から、雄弁法はなくてはならぬものであるとしている。先づ第一に、それは虚偽や不正を正すことを目的としている。第二に、それは厳格な理論的論証をもつてしても、なし得ない事柄を説き明かし、説得を可能ならしめている。第三に、それはもう一つの面から見た論証や立脚点を正しく推測することを可能ならしめているという意味に於いて、示唆に富んだものである。そして、それは総ての疑問をはつきりと浮彫りにしてくれる。最後のそれは、物理的な攻撃に対して、物理的な抵抗をなすだけの価値があるとすれば、それだけ知的な理論武装をなす必要があるといった意味に於いて、防衛的性格を有している。

雄弁法の技術は、偽善のために役立つものであるかもしれないし、まやかしや不正な目的のために、誤ってもちいられるかもしれないという事を、アリストテネスは見落さなかった。この事に関連して、彼はあらゆる優れた有力な力を發揮する精神的迫力や権力、健全な肉体、富、指導的地位といったものが、——美德自身を除いて——同様に、誤って用いられるかもしれないと答えている。美德自身、誤って用いられる事はありませんという事を強調している裏には、真に偉大な雄弁家であれば、その他のあらゆる性質を除いたとしても、雄弁家としての第一条件として、それだけは必ず持っているものであるという事を、示しているに外ならない。

ヘレニズムの時代に——アクレサンドロス大王時代以後のギリシャ文化の特質——精神文化が衰退していくようなことはなかったけれども、それは新鮮さを欠き、力本説が姿を消し、独創性が失なわれていった。一方、雄弁学もすぐには衰退していかなかったけれども、もうデモステネス・クラスの雄弁家は現れなくなつたし、以前のタイプの雄弁家は、殆んど姿を消してしまつた。この時代の雄弁家として、最もよく名が知られているのは、リディアのフアレロス生れのデメトリオス (Demetrios 345-283 B.C.) とヘゲネシオス生れのヘゲジオス (Hegezius) である。デメトリオスはアリストテレスの伝統を引き継ぐ事を目的としていたアテネのペリパトス学派の門下生であつた。ヘゲジオスは雄弁学の「アジズム」と呼ばれる学派の創始者として知られている。彼は長い文章を嫌い、リジィアスの簡潔な文体を模倣するよう主張した。しかし、実

際には、彼の余りにも飽りたてすぎた文体、そして味気のないもったいぶった所のある誇張された文体は、以前の雄弁法の大家達の文体から、大きくかけ離れたものとなっていた。キケロヌスは彼を高く評価していない。

この時代にもまた、雄弁学を教授する数多くの学校が名を成している。これ等の学校では、雄弁法を教授するだけではなく、哲学や法律をも教授していた。これ等の学校で学門を修めた雄弁家達は、名声を享受している。その中で、最も栄誉ある、最も世に知られた雄弁学派の一つが、ロディアス学派であった。

多くのギリシヤ人やヘレニズムの雄弁家、雄弁法の教師達は、ローマに移住し、彼等はそこで言論の広場を設けた。まもなく彼等は雄弁法を教授する自分達の学校を創設してゆき、彼等はその分野に於ける熟達した専門家として世評を博していった。ローマの若者達は彼等の学校に入り、彼等の教えに熱心に耳を傾け、知識を得ていった。これ等の教師達の中に、特に優れた地位を占めていたロディアス学派の雄弁家であり、一世紀の前半に活躍したローマの雄弁法の教師でもあったテムノス生れのヘルマゴラス(Hermagoras)がいる。

彼はローマで自分の学説に対する同調者を増してゆき、アジ学派の誇張された文体に異議を唱えている。アジズムの特徴は、あらゆる種類の雄弁学上の比喩的表現やその他の装飾によって誇張された文体、リズムの単調さやリズム感を出したり、余分な情熱をかきたてるためにの

み用いられる語彙の挿入にある。ヘルマゴラスはアリストテレス以前の雄弁法実践の経験や偉大な思想家達の哲学的雄弁学から構成された新しい雄弁学体系を完成させている。スコラステイカと名付けられた彼の雄弁学は、イゾクラテスやアテネのために成した業績とほぼ同様の意義を、ローマの雄弁法にもたらしている。ヘルマゴラスは、雄弁家の能力は実践を通してのみ評価されるものであるというアジズムの概念にもまた異議を唱えており、まじめに雄弁学を研究する必要性について再度に渡って注意を促している。

このようにして、ギリシャの雄弁学はローマに移植され、全世紀を通して最も偉大な雄弁家の一人であるデモステネスと同様に、キケロヌスの作品の中で再び花開いていった。所がキケロヌスはデモステネスと違って、アテネの性格を特徴づけていた勇気や高潔さ、誠実さというものを欠いていた。

M. T. キケロヌス (M. T. Cicero 106-143 BC) は偉大な学識を得ている。青年時代、彼は文学に興味を抱き、弁証法や法律を学び、ギリシャ哲学を研究した。雄弁学を最初に教わったのは、ロディアス生れのモロネスからであった。自分の教養を高め、見聞を広めようと、後に諸国を漫遊したが、再びロディアスに戻って来て、モロネスの指導の下に、もう一度、雄弁学を研究していった。ローマで当時大流行していたアジズムから自分自身を解放してくれたのは、

モロネス(Molones)の教えに負う所が大きいとキケロヌス自身、述懐している。キケロヌスは自分が二十五才の時、始めて演説をしていらい、自分の生涯を通して、数多くの演説をしている。今日伝えられているように、それ等の中の幾つかは、原稿の形で残されただけで、一度も公的な場所で話されたことのないものである。キケロヌスは演説の前に、およその構想を練る事を習慣としていたが、演説が成功裡に終ると見るや、彼は演説の全文を完璧な形で書き残している。

キケロヌスは「弁論」「ブルータス」「雄弁家」といった三つの書物の中で、雄弁学を解析している。三つの書物の一つ「弁論」の中で、彼は雄弁家としての不可欠な学問や演説の目的に触れるとともに、演説原稿や弁論の様式について説いている。「ブルータス」の中には、ローマに於ける雄弁法の歴史が紹介されている。M・ブルータスに捧げられた「雄弁家」という書には、円熟した雄弁家の理想像が描かれている。この事からも、高度な倫理的要素をもった人物でなければ、けっして偉大な雄弁家にはなれないのだと彼も考えていたのである。雄弁学についてのキケロヌスの書物は、今日でさえ大變興味をもって読まれている。

雄弁家としての必要十分条件を説いた同様の思想が、クインティリアヌス(M. F. Quintilianus 35-95)に於いて見られるし、古代ローマに於ける雄弁法の教師達思想にみられる。

クインティリアヌスの偉大な書「De Institutione Oratoria」の中で述べられている中心的論理は、「雄弁家は弁舌に熟達していると同時に、人間的にも優れていなければならない」という所にある。彼は雄弁家に不可欠な二つの要素——善良さと熟達した弁論——を取りあげ説明しているが、立派な雄弁家を育てるためには、幼少のころから体系的に教育していかなければならないと言っている。この書は確かに優れた内容を有しており、今まで数多く引用されて来ているとはいえ、すでに彼の書は衰退の時期に来ている。

共和国の崩壊とともに、雄弁学や雄弁法もしだいに衰退し始めた。帝国の下で、雄弁学は利益を得るための職業となっていく一方、雄弁法は日常生活の水準の域へと下落していった。紀元一世紀になっても、偉大な雄弁法の大家達は健在であった。彼等の中でも、先ず第一に取りあげたい人物に、アウグストの統治下にあつて名を成した雄弁学の教師であると共に、ギリシヤの歴史家でもあつた。ハルカルナス生れのデイオニゾスがいる。彼の書に「アツチカの雄弁家評」や「デモステネス文体論」がある。デイオニゾスの書は他にも幾つかあるが、「天国の教階」という書も彼のものではないかと言われている。もう一人の雄弁家にギリシヤの雄弁家であり、哲学的評論家でもあつたロンギヌス（Longinus 213—273 BC）が居る。ロンギヌスは「生きた図書館、歩く博物館」と評されていた。それ程、彼の教養は偉大なものであつた。彼の書「崇高論」には、印象的で効果的な文体論が普遍的に述べられている。一世紀に於けるその他

の著名な人物には、セネカ神父や法廷雄弁家として名を成した彼の息子、*L. A. セネカ* (*Lucius Annaeus Seneca 4—65*) が居る。

一世紀に於けるヴェスパシアヌス皇帝 (*Vespasianus 70—79*) の統治下でなされた雄

弁学の講義は公的な性格を有していた。雄弁学を教える大学が各地に設けられた。一つにはソフィスト派の雄弁学、即ち芸術として雄弁学を説く学派、二つには政治上の雄弁学、即ち法廷での雄弁学を説く学派に分かれていた。公的な雄弁学の教師達は、「ソフィスト」と呼ばれており、その名は今日の教授とか博士といったアカデミックな称号の性格をもったものであった。これ等の「ソフィスト達」は古代ギリシャのソフィスト達ともちろん、何等共通性を持ち合せていなかった。

クインティリアヌスは雄弁家の理想像を教養あふれる、聡明で、名誉ある人物として描いている。雄弁学は確かに彼の描いていた人物を厳しく育てていく事を目ざしている。

政治が皇帝の王室に集中されていった一世紀の後半には、専制政治が古典デモクラシーの最後の息の根を止めてしまい、専制君主制へと変貌していくと同時に、雄弁法は大きな痛手をこうむり、雄弁学は教育上の重要な地位を失っていった。古典教育上の基盤であった雄弁学は、融通性のない演説についての単なる規則となっていた。人々の感心は、皇帝の前でなされる

演説の方へと向つていった。演説の始めに何を、中腹では何を、最後に何を言わなければならぬのかといった事が、細かく論じられていった。言葉の数さえ「皇帝を退屈させないために」規定したのである。

この事は、もちろん科学としての雄弁学の終焉を意味したと共に、芸術としての終焉をも意味するものであった。どのような芸術分野であっても、細かく取り決められた規則をただあてはめていけば出来上るといった理論は存在しない。理論は幅広い経験を積み重ねて来た芸術家の個性に委ねられているものである。基本的な原則や中心的要素は、単に探求することが出来るだけである。総ての芸術分野に対して有効であるとされるものは、雄弁法に対しても有効である。この事からも、雄弁学は普遍的な考慮を払うようにしなければならないが、それがあまりにも細かく規則化されたり、つまらぬ枝葉末節に至るまでも規定してしまうようなことにもなれば、それはもう雄弁学ではない。そして、そのような規則を盲目的に順守しようとする雄弁家はもう真の雄弁家とは言えないのである。

中世紀の学士院では、トリヴィアム(trivium)とクワドリヴィアム(quadrivium)といった2院制に分れて「自由主義芸術」を教えていた。四年制のトリヴィアムでは、文法(文学を含む)弁証法(実際には公式的な理論学)雄弁学を教えていた。三年制のクワドリヴィアムでは、幾可

学（実際には地理学、博物学、薬草学）、数学（日常生活に必要な単純な計算）、音楽（主に宗教音楽）、天文学（本来の言葉の意味からすれば、天文学というより占星術に近い）を教えていた。このころの人達は、雄弁学という言葉をも、詩歌や散文的作品の著作活動としてだけでなく、法律を研究する学問だと理解していた。このころの雄弁学の権威者として、あげておきたい人に、五世紀のカシオドルス（Cassiodorus）や七世紀のイシドルス（Isidorus）がいる。

四世紀から中世紀全般に渡って雄弁法の舞台はほとんど教会に移っていった。優れた神父であり、伝導師でもあったギリシャの神父バジレスやクリゾスタモス（Baziles, Krizostamos）ラテンの神父、アンブロシウス（Ambrosius 340—397）、アウグスティヌス（Augustinus）はこの時代の人達である。十一世紀には第一次十字軍の伝導師ペトロ・エルミタス（Petro la Ermitus）や第二次十字軍に呼びかけた偉大な伝導師、ベルナルドウス（Bernardus）が居る。十三世紀にはアクビノス生れのトーマソス（Tomasos）がいる。宗教改革は宗教問題に関する公けの討論を活発化していった。これ等の討論の中で、ルーザー（Luther）やカルビン（Calvin）といった雄弁家が名を成している。

十六世紀になると、再び雄弁学が蘇生し始めた。L・コックス（L. Cox）が、「雄弁学の技法と力」（一五四九年）という書を著している。もう一人の英国人、T・ウィルソンは、「アリスト

テレスやキケロヌス・クインティリアヌスの原理を取り入れて書いた「雄弁学技法」(一五五三年)を著している。ほぼそれと同時代に、フランスではトンクエリン(Tonguein 1555)やクオーセラス(P de Courcelles 1557)の雄弁学に関する論文が発表された。オランダではマティエ(Mathijs de Castelein)が一五四八年に雄弁学技法(Const van Rhetoriken)という書を著している。十六世紀にオランダでは、大衆向けの「雄弁学教室」と呼ばれる市民のための「雄弁学サークル」があった。そこでは、本来の意味で言う雄弁学を勉強したというより、文学を朗読したり、戯曲を演じたり、作詩を勉強したりしていた。十七世紀以後には、諸言語で、膨大な数の論文が発表されている。

数世紀の眠りから覚めて、政治上の雄弁学が、近代的な民主主義制度を確立することに成功した国々に蘇生して来た。英国では、議会制度の発展と相いまって、政治上の雄弁法が開花して来た。十八世紀から十九世紀にかけて、偉大な政治家が現れている。その中でも、最も偉大な政治家に、ウィリアム・ピット卿(William Pitt, Lordo Chatham)、彼の息子、ウィリアム・ピット(William Pitt-filo)、彼の政敵、C・J・フォックス(Charles James Fox)、E・バーク(Edmund Burke)、G・オ・コンネル(Daniel O'Connell)、ラッセル卿(Lordo Russell)、ダービー卿(Lordo Derby)、デイズレーリ卿(Disraeli, Lordo Beaconsfield)、彼の偉大な政敵、W・E・グラッドストーン(William Ewart Gladstone)、J・ブライイト(John Bright)

がいる。これ等の人達に代表される十九世紀の英国に於ける雄弁法の大家達は、同時に偉大な雄弁家でもあった。程度の高い彼等の弁論は、政治上の闘いや思想上の闘いで、彼等を有利に導いただけでなく、彼等の名を広く世界に知らしめている。

政治上の雄弁法は、フランスに於いても、フランス革命の後、大きく開花していった。ミラボー (Mirabeau) デムーラン (Camille Desmoulins)、ダントン (Danton)、ロベスピエール (Robespierre) 等は、彼等持ち前の力強い演説でもって、当時の世界を震撼させている。もう少し後になると、ラマルティエヌ (Lamartine)、ギゾー (Gizot)、モンレンバート (Montalembert)、ガンベッタ (Carnot) が、雄弁家として名を成している。フランスに於いて、軍事演説を発展させたのは、ナポレオンであった。軍隊への彼の演説は、力に満ちあふれ、まさに威風堂々としたものであり、数万の兵士を興奮のつばに落し入れる程のものであった。フランスでは学士院での雄弁法も盛んであった。優雅なフランス語で表現されるデリケートな思考ニアンスは、多くの人達にとって、この種の弁論の模範となるものであった。フランス・アカデミー会員は、自分達の演説内容に心をくだいただけでなく、その表現形式にも意を用いている。

米国の雄弁法は、主にダニエル・ウェブスター (Daniel Webster)、ジョン・ランドルフ (John

Randolf)、ヘンリー・クレー(Henry Clay)、ジョン・カルフーン(John. C. Calhoun)そして民主主義の立役者であり、必然的にその信奉者でもあったアブラハム・リンカーン(Abraham Lincoln)によって世界に知られている。リンカーンは世界的な雄弁家とはいかないまでも、幾つかの優れた演説を残している。

全世界的な民主主義の広まりに相呼応して、あらゆる国で雄弁法が開花し始め、蘇生して来た。才能ある雄弁な人達が、議會で、民衆の大集会で、大学で、講演会場で、演説をなすようになっていった。けれども、雄弁学は忘れ去られており、教えられていなかった。

第二次世界大戦の後、世界の幾つかの国で、この事についての新しい関心が湧き起って来た。連合軍の勝利は、多くの国々に民主主義を復活させていったと同時に、重要な国際的連帯や制度を創り出してゆき、民衆の生活はいたる所で活気を取りもととして来た。

これ等の環境の中で、以前にも増して、より多くの人達が、公的な場所で話しをする機会を持つようになっていった。議會に於ける政治家だけでなく、法廷に於ける弁護士だけでなく、教会に於ける神父だけでもなく、軍隊を前にして演説する将軍だけでなく、専門的分野で働いたり、専門的会合や専門家会議に出席する専門家達、労働者の組織や自分達の組合で活動している労働者達、サークル活動を行っている学生達、主婦、ありとあらゆる人達。世界的な広がりの中で、これ等の数万、いや数十万の人達が、数百万の人達を相手にして、公けの席で話し

をしている。

諸々の文化運動に携わっている人達は、人前で話しをする事が常識となつて來ている。これ等の運動の中にあつて、エスぺラントもまた、この中の主たる位置を占めている。国際語の普及活動に積極的に参加している人達は、どこの国の言葉で話すにせよ、諸々の機会を利用して、人前で話しをしなければならない。友人の集いや幅広い大衆を前にした講演会場で、時にはラジオやテレビを通して、生きた言語としてのエスぺラントの姿を紹介する機会をもっているし、自分達の所属する団体や地域社会で、世界大会や国際会議で、専門家会議や会合で、国際学校や国際夏季大学で、人前で話しをする機会を持つている。エスぺラントを話す若者達には、国際弁論大会で、自分の才能を示す機会が与えられている。人々は討論するためであつたり、自己の正当性を主張したり、お互いに論争し合うために話しをする。

あらゆる言語で、あらゆる無数の機会を捕えて、毎日、人前で話しをしている数十万の人達の中に、かなりの数の優れた雄弁家がいる事を考えてみる必要がある。實際、雄弁に話しをする人達の話しを聞く機会が多い。しかし、本当に優れた。真に偉大な雄弁家に出逢う事はめつたにない。彼等は聴衆に向つて話しをしながら、最も重要な思想や最も高貴な意見さえ台なしにしてしまふといった誤りや過失をしょっちゅう繰り返している。外見を意にも留めず、聴衆

に向つて話しをする代りに、ただ原稿を読み上げるといったことがしじゅうなされておゐり、音声駆使して自己の主張点を色づけしようとしなから、会場の雰囲気壊してしまつてゐる。最も恐るべき事は、言語を十分に知りつくしていない事である。この事が宿命的な誤りを犯す原因となつてゐる。こういった誤りを犯しているために、彼等は意図した効果をあげ得ないばかりか、自分の關つてゐる事業を台なしにしてしまつてゐると同時に、自分自身を笑ひものにさえしてゐる。

特に大切な事は、言語上の誤りである。これは總ての演説を根底からつき崩してしまふことさえある。

次にそういった失敗の实例を二つだけ紹介しよう。或る町の中央広場で、民衆の大衆会が催されてゐた。そこには十万人の人達が参加しており、数多くの旗が棚びき、音楽が鳴り響き、会場は整然と飾りたてられてゐた。聴衆に囲まれた壇上で、雄弁家が重要な地位にある労働運動の指導者——資本主義に於ける虐いたげられた労働者の生活について、話しをしてゐた。話しが社会主義に進んでいくに従つて、彼は語調を強めながら、声を大にして言つた。「社会主義制度の中で働く労働者は、資本家達の利益向上に奉仕してゐるのではなく、彼等は彼等の利益のために働らいてゐるのである。」ここで彼は悲劇的な誤りを犯してしまつた。「自分達の利

益のために」と言う代りに、「彼等の利益のために」と言ってしまったのである。聴衆は吹き出してしまった。だがすぐに側近から間違いを指摘され、当意即妙な言葉で、その場を切り抜けている。

もう一つの場合には、雄弁家が偉大な政治家の功績について話しをしていた。多少誇張した言葉でもって、戦中から戦後にかけての彼の功績を讃えながら、話しを進めていった。話しが政治家としての彼の人間性や大衆指向性を強調せねばならない話しの山場にさしかかった時、彼はそこで、重大な誤りを犯してしまっている。彼は次のように言ったのである。「我々の近ずき難い官邸の中で、機関銃に守られ、軍人や顧問達に囲まれながら、自由社会へと我々を導いてくれている彼を好ましいとは思わない。だが偉大な人間性を心に秘めた彼は、我々の父であり、兄弟でもある。だからこそ、我々は彼を尊敬の対象としているのである。」この短かい、たった一つの文章の中に、幾つかの重要な誤りがある。一つには「我々の近ずき難い官邸の中で、機関銃に守られ、軍人や顧問達に囲まれながら……」といった文章構成をなしているが彼はこの事を主張しようとしたのではなく、そのように振舞っている他の政治家達の事をそれとなくいっておきたかっただけに違いないのである。だから自分の欲していない事を、言ってしまったと同時に、自己の考えにびったり適合する表現を見い出すことに失敗している。もう一つの誤りは「自由社会へと我々を導いてくれている」といった表現を用いている所にあ

る。この文章からは、明らかに、そこへと導いてくれるものはあるにしても、未だ自由社会の中に我々が今現在あるのではないといった印象を与えてしまっている。この事も雄弁家の意図した事ではないはずである。

こういった実例を、数多く掲げてみる事は易しい事である。その事について一冊の本を書く事さえ難しくはない。しかし、そうした事を成した所で、たいした意味をなすものではない。今引用してみた二つの実例だけで、人々が人前で話しをする場合、どういった誤りをしているのか、又そういった誤りは、話し手の思考の意味をどのように変えてしまうものであるのかといった事を示すのに十分である。注意深い聴衆は、公けになされている演説の中に、かなりの量の言語上の誤りがあるという事を知っているだけでなく、その他のあらゆる誤りに気付いている。

この事は以前にも増して今日、当然ともいうべき注目を、雄弁法の学習に捧げる必要のある事を立証している。知っての通り、学校ではまだ雄弁学を正規の科目として教えていない。学校では話すことを教えるのではなく、書く事を教えている。だが幾つかの国では、大学の授業の一部に雄弁学を採り入れている所もある。例えば、弁護士の義務は、法律について話すことであるのに、大学の法学部では法律を教えてはいるが、法律について話しをすることは今まで

教えたことがなかったという事に人々はついに気付き始めた。その欠陥を人々は今、幾つかの国で払拭しようとする努力がなされ始めている。ソビエトでは夜間学校で雄弁学を教えている。英国の幾つかの大学教養学部では、それが研究の対象となっている。フランスでは雄弁法を教える私学がある。その他の国でも、この事に人々は大きな興味を抱き始めている。しかし、雄弁法をほんとに習得し得るのだろうかといった原則的な疑問が生れて来ている。

「詩人は詩人として生れ落ち、雄弁家は雄弁家となっていく」： *Poeta nascitur, orator fit* というラテンの古い諺がある。これは詩歌の才能は、詩人であるための必要条件であり、勉強は詩歌を創り出す才能に代り得るものではないということを意味している。そして、雄弁家になるには、例え才能を持ち合せなかったとしても、努力と学習によって、雄弁家となることが出来るのだといった言葉である。だがこの考えは間違っている。どのような芸術分野であれ、明らかに才能が必要である。才能なくして人々は詩人になることは出来ないし、画家にも、調刻家にもなることは出来ない。そして雄弁家にも才能なしにはなり得るものではない。芸術を志す人達が、己れの芸術分野を学び、研究しているように、雄弁な才能をもった人達が、単なる才能ある話し家の枠から出て、真の雄弁家となっていくためには、雄弁学を研究しなければならぬ。このことから「雄弁家は雄弁家として生れ落ち、雄弁家となっていく」
Orator et nascitur et fit と言わねばならぬ。

雄弁法は言語を活用する芸術分野の中でも、特異な存在である。形態や内容の観点からいって、それは人前で創り出される唯一の芸術である。詩人は家の中であつたり、野にあつて、孤立して仕事をしている。彼は自分の作詩したものをノートしておき、幾度も読み返していく事により、不要なものは除去し、訂正したり、削除したり、書き加えたりする。そして自分の仕事の成果が不満足なものであつたとすれば、総てを「破り捨ててしまふ」可能性を常に持っている。詩人が自分の詩集を編纂し本にする場合でも、大衆とのじかの触れ合いはない。大衆は印刷された詩集を手にとって読んだとしても、どれ程彼が汗し、どれ程苦悩し、どれ程歡喜し、感情を高ならせながら創作したものであるのか、殆んど知る事も出来ない。この事は作家や小説家、その他、あらゆる文筆家に対しても、同様に言える事である。

大衆芸術家である映画俳優は、スクリーンを介してのみ大衆との接触を持つ……、大衆の心をつかんで離さないすばらしいシーンでさえ、大衆の感動を誘つた劇場での上映以前に、おそらく数十回にも渡る演技の繰り返しが行なわれているのである。劇場俳優は、大衆の面前で、実際に芸術を創り出している。しかし、その内容を生み出しているのではなく、演技だけを創り出しているのである。内容を創作しているのはシナリオ作家であり、俳優を介して大衆に公開され、大衆との接触を得ているのである。

一方、雄弁家は大衆自身の前で、自己の作品を創り出している。雄弁家もまた、確かに公演に先だつて、演説の下準備をなす、その場合、もちろん、演説内容を分析し、細部に渡つて構想を練らなければならない。しかし、演説自身は聴衆とのじかの触れ合いをもつて、公然となされるものである。詩人や作家がなす事の出来るそれ程多くの時間的余裕を、雄弁家は持つていない。自分の意図した効果をあげる事が、例え出来なかつたとしても、口から出てしまつた言葉を「取り消す」可能性を持つていない。眞の雄弁家は、自分の役割を与えられた俳優が、台詞を暗記するように、自分の演説を宙に覚えてしまつておくといつた事は決してしない。眞の雄弁家は特異な物理的力や知的な緊張力を要求する大衆の前で、演説内容を考え出している。彼の創り出す芸術は、芸術創造に積極的に参加しようとする聴衆によつて、特異な評価を受けることになる。それは雄弁家が聴衆に深い感銘を与える程の演説をなした場合に、聴衆は、雄弁家を大きく盛りたてようと反応することからもうかがい知る事が出来る。

これ等の相互作用の中で、雄弁家と聴衆との生きた、共通作品としての偉大な演説が生れて来る。そしてこの事が、雄弁法に特別な魅力を与えている。

雄弁法は雄弁家、聴衆、演説自身といった三つの要素をもっているのだから、雄弁法の理論である雄弁学も、同じような分割をなすべきだという主張は、論理に叶つたものである。古い

時代の雄弁法の教師が、これと違った規準をもつて、雄弁学を分割していたという事に触れる事も価値のある事である。その一つは、新しい工夫（ラテン語で *inventio*）と呼ばれているものである。ここで、彼等は演説の論証や証明に関する事柄を細かく論じている。それは聴衆を引きつけ、その良識を獲得する手法を研究し、聴衆の情熱をかきたて、心の奥底に触れる手法の研究に、特別の注目を捧げたものであった。その一つは、配列（ラテン語で *dispositio*）と呼ばれるものである。ここでは、証明や論証の配列を考え、聴衆を勝ち取るために研究開発された手法の活用を論じている。それは、演説計画をなす場合、それに必要な原稿を準備し、それを整理し、演説の冒頭に当る出足しの部を決め、論証や証明の順序や流れについて決定していく。演説に当って、発生し得る諸々の状況を予測し、どのようにしてそれ等の状況に対応し、答えていくのかを決定していく。

最後の一つ、演説（ラテン語 *elocutio*）と呼ばれる部分では、演説自身を取り扱っている。キケロヌスやクインティリアヌスによれば、それは雄弁学の中で最も重要な部分であると同時に、最も難しい部分でもあると言っている。

こういった分割は、とても有意義であり、今日に於いても演説自身の分析研究に対し、有効であるとはいえ、この方法を順守することは、多少、古めかしい感じがする。それは完璧さに

欠けるからである。偉大な雄弁法の大家は、演説を球技に対比して考えている。球技には球自身その他にも、球を投げる人と球を受け取る人が参加している。これと同じく、優れた演説は、それを構成している語彙や文章だけが重要な役割を担っているのではなく、雄弁家の人間性と聴衆の特質が、重要な役割を担っている。

近代雄弁学は、雄弁家の諸要素を論じ、聴衆の特質を論ぜねばならないと同時に、演説自身をも論じなければならない。

(11)、ランダムハウス英和大辞典によれば、レトリック (rhetoric) は、一、修辞学、美辞学、言語の効果的な使用法を研究する学問、二、雄弁、弁舌の才、三、修辞法、美文法、散文、韻文において、詞姿を含む言語の文学的使用法、となつてゐる。更に、修辞学、修辞法を新村出編、広辞苑によつて調べると、修辞学は読者に感動を与えるように思想を最も有効的に表現する方法を研究する学問とある。修辞法は修辭に関する法則となつてゐる。著者はこの書でレトリックを、的を得た説得力のある話し方をする法則を研究する学問という意味で使つてゐるから、この書では修辞学という語彙を用いずに雄弁学とした。またここでは雄弁法を的を得た、説得力のある話し方をする法則という意味で用いてゐる。

第九章

雄弁家の物理的要素

一、外 観

雄弁家の物理的外観は、どういったものでなければいけないのかといった事が、問われることはない。雄弁家に、特殊な物理的要素といったものが、要求されることもない。背が高いとか背が低い、年が若いとか年老いている、肥っているとか瘦でいるといった、その事が、優れた雄弁家となるための前提条件となることはない。

自分の話し方、姿勢、服装そして特に自己の音声を話しの内容にうまく適応させることをよく知っているのであれば、雄弁家の物理的外観は、重要な意味をもつことはない。最も重要な事柄は、不均衡を避けることである。背の低い人が、ありったけの音声をはりあげて、叫ぶかのような声でもって、始めから終りまで演説をつづけたとすれば失笑を買うし、体の大きな人が、柔らかで、甘くささやくような音声でもって話しを続けたとすれば、同じように失笑を買うに決っている。背の低い人は、自分の背の高さに意を用い、それを矯正するように努めなければならぬ。彼の話す位置が、聴衆の高さより低い位置にあるとしたならば、自分の位置の

高さを矯正するために、小さな踏み台を用いるようにする。背の高い人は、高い踏み台や教壇の上から話しをすることを、努めて避けなければならない。

雄弁家の外観や物理的要素について、明確な要求をなすことは出来ない。だが、雄弁家にとって、必ず必要とされる要素を論じることが出来る。啞であつたり、どもり癖のある人、ひどい歯擦音の持主は、雄弁家としての資格を欠いている。その他の物理的欠陥も、人前で話しをしようとする人達の作業を、非常に困難ならしめるものである。盲目であつたり、耳が聞えなかつたり、部分的にはあつても聾であるといった物理的欠陥は、重大な障害となる。雄弁家は自分の聴衆をしつかりと見つめていなければならないと同時に、休みなく気を配り続けなければならない。そして、その反応を見届け、不意の出来事に耳を傾け、ぴつたりとその場に合った機転をきかせて、聴衆の求めに応じなければならない。大きな物理的欠陥を背おつた人達は、この事をなすことが出来なかつたり、完璧にはこの事をなせないがために、物理的欠陥のない正常な人達よりも、雄弁家として、多くの障害をもっている。

二、音 声

雄弁家の主要な物理的要素、それなしには雄弁家となることなどという想像もし得ない要素、それは音声である。

それは肺から押し出され、咽頭内の喉頭を通過し、口腔や鼻腔を通り抜けて、外に排出される空気圧によつて引き起される声帯の振動がかもし出す音の総てである。その発声器官はとも複雑であり、精巧に出来ている。喉頭腔は、声門の狭い通路を介して二つの部分に分岐されており、音声はその喉頭内で形成される。喉頭の中には、弾力性のある繊維組織から構成された声帯がある。無数の粘液線が、喉頭粘膜、特に喉頭蓋の中にある。喉頭の中には、声帯をすばめたり、開いたり、緊張さしたり、弛緩さしたりする役目をもったたくさん筋肉がある。肺から強く押し出された空気は、声門を通じて声帯を振動させる。その時、それ等はリズムカルに動作し始め、その長さや幅、あるいは緊張の度合いによつて――原理的には、音楽をかなでる楽器と全く同様に――諸々の音声をつくり出している。喉頭、咽頭、口腔、そして鼻腔の上部声門腔は、音響箱を形成し、サウンディング・ボックスとしての役目を果たしていると共に、声調を和らげる働きをしている。確かに、下部声門腔、即ち気管や胸といった声門腔も、声調の音質に、部分的には影響を及ぼしているに違いない。しかし未だ、今の所、細部に渡つてまで、

十分に研究しつくされてはいない。

音声は明確な音質をもっているが、それ等の音質は、異性によって、子供や大人によって異っているだけでなく、個人同士でも様々に変化しており、同一の個人でさえ、自己の音声の音質を、様々に変化させる事が出来る。

人々は特に、音声の強度や高さ、音色、しなやかさを識別している。

音声の強度は、吐き出す息の空気圧によって引き起される振動振幅の大きさにかかわっている。音声の高さは、一秒間の振動数（振動周波数）によって左右され、はつきりした限界をもっている。子供の声帯は、成人の声帯よりも短い。男性の声帯は、約十五ミリメートルの長さをもっており、女性の声帯の長さは、およそ十一ミリメートルである。従つて、子供は成人よりも高い音声を有しており、女性は男性の音声よりも高い音声をもっている。音声の音色は、異なる振動数の音声の組合せによって決つて来る。音声のしなやかさは、声帯の緊張度を変化させる事の出来る空気の速度に関係している。

音声の有するこれ等の音質を人間は、ある程度、意識的に調節する事が出来る。肺から吐き

出す空氣の量を、多少意識的に加減するようにすれば、言葉に強弱をつけて話しをすることが出来る。吐き出す空氣の速さを加減して、声帯を振動させるようにすれば、音声に高低をつけて話しをすることが出来る。これ等と同様に、様々な音色を音声に、ある程度もたせる事が出来る。音声は一語、一語強くうちつけるかのように発音することも出来るし、つんぎくように鋭くも、急流のように力強くも発音し得るものであり、ビロードのようになやかさをもった音色を、音声に与えることも出来る。このようにして、柔軟な発声器官に、非常にデリケートなニュアンスを与えることが出来るのである。

人間の音声は、男性の音声、女性の音声、といった大きな二つのカテゴリーに分割することが出来る。男性の音声は、低く深みがあり女性のそれは高く澄みきっている。女性の音声は、男性の音声より、およそ一オクターブ高いのが普通である。音声の領域によって、二つの主たるカテゴリーと三つのサブ・カテゴリーに分割されている。男性のテノール音声や女性のソプラノは、最も高い音声域にある。中間の音声領域は、男性のバリトンや女性のメゾソプラノである。最も低い音声域は、男性のバスや女性のコントラルトである。これ等の音声の内の総ては、十三あるいは十四音調の音の広がりを持っているのが普通である。しかし、多くの人達、特に歌手達は、それよりももっと広い音声領域を持っている。五オクターブにも広がりを有する音声領域をもった歌手が、例外的だとはいえないという事は、特筆すべき事でもある。

これ等の音声の中で、どの音声が最も雄弁家にとって最適なのであろうか。

男性や女性を含めた音声の中で、最も有益な音声は、バリトンである。女性の声は、一般に高すぎるとともに、か細く、響きが足りない、男性の声の中でもテノールは、叙情的な音楽には向いてもいようが、長い演説をなすには疲れを催し、不適當である。バスは重みのある重要な演説をなすためには大変役立つけれども、その他の演説にとつては不向きである。一方、テノールの領域に高めたり、バスの領域へと下げる事の出来る幅広い可能性をもったバリトンは、雄弁家に最も適した音声といえるであらう。

この事に関して、またもう一つの点が、かなり重要な意味をもっている。雄弁家は演説の間、自分の声を上げたり、下げたりする事が出来なければならない。速さや強度をうまく使いこなすと同時に、音声の高さを話しの内容にうまく合わせるようにしなければならない。音声を上げたり、下げたりするために、自分の中間領域の音声を用いるようにすれば、必要な時には、それをなすことが出来る。この観点からもまた、バリトン音声は最もふさわしい音声である。そして、それは正常で、中間的な人間の音声でもある。一方、バスの音声の持主は、自分の音声の最も高い所で話しをしなければならない。だから、話しの内容が、それを必要とする場合、音声を高めることが困難であらうし、自己の最も深みのある音調を、最大限に活用する事が出

来ない。またテノール音声の人達は、自己の最も低い音域を用いる必要がある。この事は、それより更に低い音声を用いることを困難ならしめるであろうし、自己の音調であるテノール音調を最大限に活用する事が出来ない。従つて、バスやテノールは、自己の音声領域の総ての広がりや完全に使いきる事の出来るバリトンの人達と比較して、不利な立場にある。この事は、バスやテノールの人達が、優れた雄弁家に成る事が出来ないという意味ではない。それはバリトンの人達が、自己の音声領域を的確に使い切る事が出来るという事を意味しているにすぎない。

これと同じ理由から、女性の音声の中のメゾソプラノは、最も適切な音声である。だが、女性の音声は、あまりにも高すぎるといった観点から、コントラルトを最適な音声だと考えることも出来る。美しく、響きのよいコントラルトは、例え低い音域が使えないといった事があつても、それ程問題ではない。

総ての雄弁家は——自己の音声の種類にかかわらず——自己の芸術を創り出す道具に細心の注意を払いつづけるなければならない。残念なことに話しをしている大部分の人達は、自己の音声にどのような注意力も払おうとはしない。彼等は言葉の意味を強めたり、柔らかげたりするために音声を活用しないし、句点、コンマ、コロンの、その他の句読点を表すために音声を払いよう

ともしない。彼等は音声を粗末に扱っており、演説の中でのそれ等の意義を考えようともしない。ここでは、齒擦音やどもり癖といった音声欠陥の矯正についてとりあげて考えてみようというのではない。どのような欠陥も有しないけれども、自己の音声に対して細かく心が配られていない正常な音声について考えていこうとしている。

演説の中での音声をあらゆる面からとらえて、それに細かな規則を与えていく事は不可能である。それが出来ない原因として一つには、それぞれの総ての演説が、そして個別のあらゆる文章が、あらゆる語彙が、それぞれ違ったニュアンスを持っている。二つには、幾つかの普遍的原則の枠内で、雄弁家が自己の音声を、自分自身で研究していかなければならないし、諸々の環境にあった自己の音声の可能性を追求していかなければならないといった事があげられる。

この場合、これ等の重要な側面に目を向ける事も可能ではあるが、特に音声の高さや速度、強度、音色に注目していくべきであろう。

そして、その事についての幾つかの助言を次に述べてみよう。

(a)、音声の高さは、我々が見て来たように、振動の数に左右されている。どのような音声の

持主であろうと、音声を上げたり、下げたりして話しをすることが出来る。

多くの雄弁家はこの事実を目を向けずに、同一の高さの音声でもって話しをしている。それは普通、中間の高さの音声である。中には興奮のためか、もっと他の原因があつてのことであろうが、最も高い音声をもつて話しをする傾向のある人達がいる。一時間以上に渡る演説の間、彼等は聴衆の耳をつんざき、物理的痛みさえ与えることもある。一番低い音声でもって話しを始め、最も高い音調でもって演説を終える人達もいる。それを彼等は熟慮の末やつていゝのもなく、意味があつてやつていゝのでもない。聴衆は単調な話し手の音声に耳にしているために、話しの経過とともに眠けをもようし、ついには話しの内容についていけなくなつてしまふ。低い音声でもって話しを始め、中腹まではだんだんと音声を高めていくが、終りに近づくにつれ音声を下げていく、従つて音声は美しい規則的な放物線を描くかのである。だが、この場合もまた、話しの内容にあわせて音声をを用いていゝのではなく、文章の意味を深く考えることもなく、ただ自己の音声を規則的に上げたり、下げたりしてゐるだけである。これ等の音声の「遊戯」は、話しの内容にまったく関係なくなされてゐる。多くの雄弁家達は、句点や句読点をつけることを知らずに、並べたてた語彙や文章の羅列を、単に述べたててゐるにすぎない。

優れた雄弁家は、中間の高さの音声でもって演説を始める。バリトンやメゾソプラノの音声

でなかったとしても、中間の音声で演説を始めるとよい。そうすれば、話しの内容がそれを必要とする場合、音声を上げたり、下げたりすることが可能となるからである。ほどよい高さで演説を始めることは、重要な考えを強調しようとする場合、音声を高くしたり、低くしたりすることが出来るから、とても有益であるばかりでなく、話しをする会場での自分の音声の反響を、うまくコントロールする事が可能となる。雄弁家が演説会場をよく知っており、幾度もすでにそこで話しをした経験があるとすれば、初めの音声の高さをはっきりとつかむ事が出来る。従って、会場に最も適した音声でもって話しをする事が出来る。雄弁家が演説会場をよく知らなかったとすれば、必ず中間の音声をもって始めなければならぬ。そして、音声を随時変化させてみて、どのような音声が「響きのよい音声」であるのかを見守っていかなければならない。

自己の音声の高さを、雄弁家は幅広く活用することが出来るし、活用しなければならぬ。演説の中で、最も力強い、最も重要な部分を話す時には、音声を高める。そして、音声の高さは、音声の強さや演説の速さを同時に併うのが普通である。だが、常にそうばかりとはいえない。音声を高めたり、強めたりすると同時に、演説の速さを落すこともある。文節をしめくく部分であるとか、話しが山場にさしかかった所では、最も力強い音声や高い音声でもってなされるが、その文章はゆっくりと、しかもはつきりと、一語一語明瞭に、それ等の総てが、聴

衆の頭の中に深く浸透していくように発音する。もう一方では、話しが論証の核心に触れていくに従って、音声を少しずつ高めていくとともに、段階的に強めていく。だが最終的な結論の項を述べる前に、短い休止を設け、その後すぐに、最も低い、最も弱い音声でもって、ゆつくりと中心的な考えを、しかも明瞭に述べていく。休止は聴衆の注目を喚起し、最も高い音声でなされ結論に至る前の文章と、その後の文章とのコントラストが、すばらしい効果を生み出すから、聴衆は話し手の思想をはっきりと記憶するに至る。

演説の中でも、特に感動的で、聴衆の胸をうつ部分話す際には、音声の最も低い領域を使って話しをする。最も低い領域の音色は、柔らかで、甘く、ささやくかのようで、ビロードのように優美である。だから低い音声は、心に感動を与え、感情をよびさます働きをする。友人や同僚の埋葬に際して、高い音声で話すことは先ずないし、そういった場合にはふさわしくない。一方、軍隊に対して、甘く、沈んだ音調で話しをする事は、無意味であるし、これ等の場合にはふさわしくないどころか、失笑さえ買うことになる。これ等の対照的な実例の間に、多くの異なるニュアンスをもった演説がある。例えば、政治家の追悼演説であるとか、或る人の死から政治的な業績を引き出したい―残念なことに、こうしたことがよくあるのだが―といった際の演説では、高い音調で話しをする事が出来る。聴衆の心に触れる部分をもたない演説というのは先ず殆んどないといってよい。判事達の前で弁護の弁論をしている弁護士、教会で説教す

る神父、国会で演説する政治家、学士院で自己の思想を展開する科学者、大衆の中にあつて指導的立場にある雄弁家……これ等総ての雄弁家は、聴衆の頭脳に向つて話しをするというより、心に向つて話しをするといった少くとも幾つかの部分を、自己の演説の中に持っているのが普通である。そして、これ等の部分を話す際の音調や音色は、内容にびつたりと適合したものでなければならぬ。もし、そうしなければ、不釣合が考えを殺してしまうことになるであろう。

その他の部分は――動的でもなく、心に感銘を与える所もない部分に對して――交互に多少音声を高めたり、低くしたりすると同時に、適当にリズムをつけて、中間の音声領域を用いなければならぬ。特に語りの部分や單調な証明を羅列している間は、中間の音声領域を用いる。平凡な演説内容と、語彙強調の間にある不釣合程、失笑に価するものはない。例えば、單調な人間の生涯について話す際、熱烈に總ての言葉を強調しながら、高く、力強い音声でもって話しをする事は、失笑をかうばかりでなく、愚鈍な印象さえ与えてしまう。そして、彼の才知は、とても慎み深いから、どういつたつまらぬささいな出来事でも、世界の大事事件と考へてしまうのではないかと考へるであらう。

(b)、演説の速度は、成功へと導く第一級の意味をもっている。日常生活の中で、かなり速く

しゃべる人達に出逢う一方、ゆっくりと話しをする人達がいる。北国の人達は、南の国の人達よりゆっくりと話す傾向にある。だが北国の人達にもかなりの速さで話す人達がたくさんいる。逆に南の国の人達の中にも、ゆっくりと話す人達がたくさんいる。

偉大な雄弁家の中にも、とても速くしゃべる人達（特にイタリアに於いて）がいる一方、とてもゆっくりと話す人達がいる。

演説の速度は、言語の知識の深さに、部分的に左右されている。言語をよく知っていればいる程、語彙の総てのニュアンスを深く、細かに知っていればいる程、思考に対してぴったりとした表現を見い出すから、それだけ速くしゃべる事が可能である。話し手が頭を使つて、語彙を捜さなければならなかったり、十分に語彙の意味をつかみきっていないために、二つかそれ以上の語彙の間で選択をためらっているとすれば、どうあつても速くしゃべる事など出来ないに決っている。この事からも、十分に知りつくしていない外国語を用いて話す場合、とても困難さを伴うのである。話し手は自分のよく知っている言葉だけを、用いなければならぬだけでなく、誤つて用いる危険を冒すことにもなる。その事が、彼を憶病にさせ、さらにゆっくりと、訥々と話しをするように仕向けてしまうであらう。この事は恐ろしい程、難解であるがために、他国の人には殆んど習得しかねるあらゆる外国語についても言えることである。(112)。だが、こ

の事は総ての人達が、自己の固有文学国語よりも、より短かい期間で、うまく習得してしまうことの出来る国際語には当てはまらない。

総ての場合に、深くて、きめ細かな言語の知識は、語彙と思想の間の即時的な結合を可能ならしめるから、話しの速さを完全に支配する前提条件でもある。

音声器管の偶発的な損傷や欠陥を例外として考えるならば、総ての人達は——長期間に渡る毎日の練習によつて——かなりの速さを自分のものとなすことが出来る。

良いテキストを声をあげて読み、出来るだけ早い速度を保つように努めながら、明瞭さを完全に保つように注意しながら、優れた雄弁家の演説を大きな声を出して読まなければならぬ。このようにすれば、言葉や文章を早くしゃべれるように確実に舌を慣れさせる事が出来るであろう。そうなつてしまえば、容易に速さを加減する事が出来るようになる。優れた走者は、自分の意図した通りに、ゆっくりと走る事も出来る。しかし、重くて動きの鈍い走者は、決して優れた走者となる事など無理である。

聴衆に向つて話しをしている多くの人は、演説の速さに特別な注意を払っていない。彼等

は演説の内容とか、部分的な内容に対しても、話しをする会場に対しても、聴衆の数やその構成に対しても……何等、考慮を払うことなく、ただ日常生活の自分の習慣によって、速くしゃべったり、ゆっくりしゃべったりしている。だが、これ等の総ての要因は、適切な速度の選択にとつて決定的な要素となっている。

音声にどのような抑揚もつけずに、一本調子でしゃべるだけでなく、全演説の間中、とてもゆっくりと話しをする人達がいる。この人達の言葉は一分間に四十語を超えることがないので、その演説はよく聴きとれるといえる。彼等はその速度を演説の一部分に対してなすのではなく、終始維持し続けている。話し手の退屈な、ゆっくりとした言葉は――表現しようとする思想に何等、考慮を払おうともしない。眠けや、あくびを誘い、注意力を失なわせる結果にもなる。これ等の場合、多くの聴衆は、話し手の言葉よりも早く、彼自身の言わんとする事を、心の中で終らせてしまっているのが普通である。

大衆演説家のもう一つのタイプは、一分間に一八〇語、時には二〇〇語以上にも及ぶといったたいへんな速度で話しをする人達がいる。これ等の人達も、この速さを常に維持しているとすれば、誤りを犯すことにもなる。第一に語彙をはつきり発音しないといった危険を冒すであろうから、最も注意深い聴衆でさえ理解し得ないといった事にもなる。第一に語彙を誤って発音

してしまうといった危険を冒すことにもなるであろうから、全く他の考えを聴衆に与えてしまふことにもなりかねない。最後の一つは、言葉の単調な羅列が、時間の経過とともに、聴衆の注意力を失なわしめていく事になる。初めは話し手についていこうと努力していた聴衆は、疲れをもようし、彼の考えについていけなくなり、時間と共に、ほんの少しの言葉や文章しかとらえられなくなってしまう。

優れた雄弁家は、自分の演説の速さを意識的にコントロールしている。言語や舌をうまく自分のものとしているという事を考えてみれば、どうした状況下にあつても、その場にびつたりとした速度でもつて、話しをすることが出来るはずである。彼は一分間に六〇語からおよそ一八〇語までの大きな幅をもつて、自由に話しをすることが出来る。

どのような速度で話しをするのが一番よいとされるのであろうか。速い方が良いのか、あるいは遅い方がよいのであろうか。

この質問に答えるよりも先に、ほどよい速さで話しをすれば、どういった印象を聴衆に与えるのであろうか。又適度にゆっくりとした話し方をすれば、どういった印象を聴衆に与えることになるのかといった事を知る必要があろう。

なるべくゆっくりと話しをする雄弁家は、聴衆に演説の総て、あるいはその一部を宙に覚えていて話しをしているのだという印象を与えてしまうし、書齋で書いた台本の内容を思い出すようにしているのだという印象を与える。時には考えがうまくまとまらずにどのように話してよいものかとまよっているのだという印象を与えてしまう。そして、話しが遅々として進まぬために、聴衆の思考の方が先ばしつてしまい、ついには聴衆の神経をいらだたせてしまうことになる。

速く話しをしようとする雄弁家は、聴衆の前で考えをまとめ、ふさわしい言葉の衣で思考を被おうとしているのだという印象を与える。だから聴衆にじかに触れる事が出来、聴衆に最も近い存在となれるのである。話しの内容にかかわる彼の知識や見識は、明らかにすばらしいものであると人々は思う。この事は心理学的観点より見てとても大事なことである。雄弁家は学識に豊み、自己の主張に対し信念を抱いていなければならない。そして、また堅実であり、確信に満ちており、教養があるといった印象を与える事が大切である。

ゆっくりとした演説の良い面は、聴衆が容易に理解しうるといった所にある。一方、速い演説は、理解がいきとどかぬといった危険を伴う。ゆっくりと話しをする雄弁家は、聴衆のうちの殆んどの人達が、話しを聞きもらす事はあり得ないから、同じ考えを繰り返さぬようにしな

ければならない。速く話す雄弁家は、自分の言つた言葉の意味が十分に理解されたかどうかという事に留意しなければならない。聴衆を觀て、自分の演説の重要な箇所が聴き洩らされていたり、理解されていないという事に気付けば、次の話しに移る前にもう一度同じ考えを、時には他の言葉でいいかえて繰り返さねばならない。そうせずに、話しを進めていくうちに話しの内容に聴衆がついてこないといった危険を冒してしまえば、彼の演説はもうすでに聴衆の中で途切れてしまっているのである。

速い演説にしろ、遅い演説にしろ、それ自身、良い面や悪い面をもっている。そして、熟達した雄弁家は、両方の良い面だけを活用している。

すでに触れたように、複数の外的要素は適切な速さの選択に影響を与えている。会場が室内の場合、野外やそれと類似の会場でなすより速く話すことが出来る。大きな会場では、小さな談話室や小部屋で話すよりもゆつくりと話しをすべきである。会場が広ければ広い程、それだけ強い音声で話さなければならぬと同時に、ゆつくりと話しをしなければならぬ。だが、大きな会場であっても出席者の数が少ない場合には速くしゃべる事が出来る。今日よくある野外での民衆の大集会であるとか、諸々の大会や会議にはマイクが使われている。拡声器を通しての音声は、音響を部分的に乱すだけでなく、語彙を不明瞭なものにさえしてしまう。明瞭さ

を維持するために――特に大切な発音の部分では――マイクを使わない場合よりも、ゆっくりと話す事が大切である。

演説の内容自身にかかわる内的なもう一つの要因も、速度を規定している。話しの内容がそれを要求している場合、雄弁家は自分の演説を速めたり、遅くしたりする可能性を常に持たなければならぬといったことから、中間の速度をもって話しを始めなければならぬ。これ等の外的要因を考慮してみれば、これ等の中間の速度は相対的なものである事が容易にわかって来る。会場、聴衆の数や構成、マイクロホンの有無といった外的要因に規定された中間の速度を考えてみれば、広い会場での中間の速度は、狭い会場での中間の速度よりも遅いはずである。同様に、専門家だけを対象にした場合の専門講演の中間の速度は、同じ数の非専門聴衆を相手にして、同一のテーマで話しをする場合の中間の速度よりは速いものとなる。

中間の速度は、聴衆の一般教養にかかわっているだけでなく、聴衆の言語知識にも左右されるものである。聴衆が演説を聴いた経験が豊富であったり、話しをしている雄弁家の話しを以前に聴いたことが幾度もあるというのであれば、雄弁家は早く話すことが可能である。聴衆の一般教養がとても低いものであり、言語上の知識も希薄なものであるとすれば、雄弁家は単純な表現を用いて話しをしなければならないし、時には優れた考えを述べることさえあきらめな

ければならないだけでなく、ゆっくりと話しをしなければならない。特に雄弁家の話す言語が、聴衆にとってなじみの薄い外国語であつた場合、聴衆の言語知識は、その一般教養よりも相当低いのが普通である。こういった場合には、聴衆の一般教養を基盤とした速さで話しをするのではなく、言語知識を考え合せた上で、話しのを速度を決めなければならない。

この事からも、エスペ란ートの演説の中間的速度は——エスペラン・チストの今日の言語水準から考え合せて、少くとも今日の段階では——同じ国の人を相手にその国の言語で話しをする演説よりも、多少ゆっくりと話さなければならない。しかし余り極端でもない。エスペ란ートは数多くの母音を持っており、後ろから二番目の音節にアクセントを持つ、母音で終る大量の語彙をもつ、すばらしく明瞭な言語であるという事を忘れてはならない。これ等の総てが、エスペ란ートを大衆演説に大變適した言語となさしめている。語彙にアクセントをつけ、合成語の弱い第二アクセントを忘れずに、最後の音節に「節をつける」ことをしなければ、完全に言語をマスターするには至っていない人達が聴衆の中にいたとしても、言語の並優れた明瞭さや音の響きが、かなりの速度で話すことを可能にさせている。雄弁家はこの事をよく理解できるであらう。

雄弁家が話しを中間の速度で始めたとすれば、どの速度が一番その場にぴつたりとした速度

であるのかといった事にすぐ気付くし、必要とあらば、すぐにもその速度に合せる事が出来る。自己の考えを展開してゆく中で、音声を高めなければならぬ箇所にはさしかかったとすれば、すぐにも速度を上げて話しを進めていけるであろう。力強くて動的な箇所には、高まって来た思考に必要な音色をつけるために、語彙を集中的に用い、より速度をあげて話しをすることが大切である。時には一つ一つの語彙が、本来の意味を失い、次から次へと速く並べたてられた複数のこれ等の語彙は、それ等が作り出す文章の意味と違った感覚や概念を呼び起すことがある。それは殆んど印象的な効果を生み出しているだけかのである。こういった場合には、一つ一つの語彙をはっきりと区別してゆっくりと話す事は、不必要なことであるばかりでなく、大きな誤りをなすことにもなりかねない。ここでは、総ての一つ一つの語彙の細かな意味が重要なのではなく、それ等が全体としてかもし出す普遍的な色合いであるとか、それ等の共通的印象といったものが重要なのである。だからこそ、それをほとぼしるように速くまくしたてる事が必要なのである。話しが調整の域にさしかかったり、話しが山場にさしかかって来たといった時には、すぐにも話しの速度を下げ、次に続く重要な事柄に注意を喚起し、ゆっくりと中心となるべき考えを述べなければならぬ。

口語体よりも重い文語体で書かれた文章を引用し、それを読み上げる時には、必ず速度を落さなければならぬ。学術講演で聴き取り難い事柄や、難解な事柄を説明する場合には、黒板

にそれ等を書く事が賢明である。演説の重要な箇所は、ゆっくりとしゃべるのが普通である。演説の感動的な部分は、ゆっくりと話すことによりすばらしい効果を生み出すし、興奮をかきたてる部分では速く話すことが大切である。

その他の部分は、中間の速度を保って演説を進めていく。

速さは決して明瞭さを犠牲にするような事があつてはならない。速くしゃべつたために、語彙の明瞭さが損なわれている事に気付いたとすれば、速度を犠牲にしても、明瞭さを前面に押し出す考えが必要となる。

総ての語彙や総ての文字を正確に発音して始めて、明瞭さを得る事が出来る。プラトンは自分の書「クラテュロス」の中で、響きのある文字、即ち 彼が言っているように――有声音と響きのない文字、無声音に文字を分割している。これ等の分割は、今日でも一般に受け入れられるものである。

最初の響きのある文字は、母音である。第二のカテゴリーには子音が属している。

a, e, i, o, u といった純然たる母音は、口を開けたままにしておき、開いた口の形を変化させな

がら一息で発音する事が出来る。エスペラントの母音は、軌範的な明瞭さをもっている。これ等を発音する時の口は、閉されているのでもなく、開いているのでもなく、イタリア語やセルビークロアチア語の母音のように適度に開いたままである。口の開き具合は、i を発音する時には最も小さく、e は少々大きめに、a の時は更に大きく、o を発音するには口を少々丸めて、u は更に大きく口を丸めて発音する。半母音 $\bar{u}$ は極めて短い u と同様に発音される。

空気の流れを完全に中断することなく形成される子音、 $h, \bar{h}, s, z, \bar{s}, \bar{i}, \bar{t}, v$ は摩擦音、あるいは摩擦子音と名付けられている。それ等は呼気の摩擦により形成される。h は喉頭の中で、 $\bar{h}$ は舌の根元を軽口蓋に近ずけることによってそこを呼気がかすれて出る時の摩擦音である。

s, z は舌尖を上歯に近ずけ、 $\bar{s}, \bar{z}$ は上歯を支えている歯茎に舌尖を近ずけ、そのすき間を呼気がすり抜ける時に発声する摩擦音である。j は舌尖をあげ、両唇間を狭く接近させて、 $\bar{t}, \bar{k}$ は唇を用いて発音する摩擦音である。障壁をもつて、完全に呼気をせき止め、それが取り除かれる時に発声する子音もある。呼気を妨害する障壁の形によって、それぞれの子音が創り出される。

破裂子音や破裂音の形成に於ける呼気の力は、あたかも爆発的に障壁を打ち破るかのようにして音を創り出す。 p, b, t, d, k, g とつた子音がそれである。 $p, \bar{p}$ は閉ざされた唇が障壁とな

る。*t, p*はその役割を上歯につけられた舌先が担っている。もう一つの子音、*k, g*は裏舌（*k*を発音する場合）か後舌（*g*を発音する場合）を口蓋の奥につけて発音する。

呼気を完全に塞ぎ、瞬間的破裂の際に呼気が洩れるようにすれば、*c, ç, s*といった破裂摩擦音、あるいは摩擦音が生れる。*c*は舌の先を上歯の歯茎に触れるようにして、*c, ç*の場合も殆んど同じであるが、歯茎につけられた舌の表面は、もっと幅広くなる。

鼻子音、あるいは鼻音も、呼気は完全に塞がれるが、呼気が鼻を抜けて出ていくようにすれば、これ等の音が形成される。これ等に、*ɸ, ɸɸ, ɸɪ*がある。*m*を発音するには、舌でもって呼気を中断させ、*n*は舌を上歯か、上歯の歯茎に舌をつけて呼気を中断する。*ɲ*を正確に発音するには、口蓋の上に舌裏の前部をいっばいにあてがわなければならない。

最後の *l, ɾ*は、舌先の振動をもって（*r*を発音する時）あるいは舌の先を口蓋に密着さすことによって（*l*を発音する時）発音する。これ等の子音は流子音、あるいは流音と呼ばれている。

子音の一部は喉頭の振動を併う良い響きをもった有声音と呼ばれるもので、*b, v, d, z, j, g, g*

がそれに当る。同じ子音の中でも特に、無声音、あるいは清音と呼ばれる *p, t, c, s, ʃ, ʧ, k* といった子音がある。エスペラントでは更に、これ等に *ĉ, ĥ, ħ* といった子音も含まれている。また国際語には *ʒ, m, n, r, l* といった子音が有声音、あるいは濁音としてある。正確な発音を乱す混乱の主因は、有声音と無声音をはっきりと区別して用いない所にある。

ここは音声学上の法則を述べる所ではないから、この事はこれ位にしておこう。(113)

あらゆる言語は自己特有の発音をもっており、国際語も同様である。エスペラントには純然たる母音の他に複数の半母音がある。音調要素が支配しているそれ等の音は、母音的性格をもっている。先ず第一に五つの軌範的母音について考えてみよう。節減要素が支配している（唇や舌、鼻によって引き起される節減）それ等の音は子音である。だがそれ等二つのカテゴリーの間には、絶对的な分岐線といったものは存在しない。音には二重の性格を有する限界領域がある。これ等に、エスペラントでは *m, n* といった鼻音や *l, r* といった流音、*j* といった摩擦音、*nk, ng* といった合成音がある。言語の美しい音色は、その明瞭さにある。

そして、その明瞭さは母音の量によって大部分決つて来る。母音は美しい響きを持っている。それ等は言語に音楽的響きを与え、同時に明瞭さを与えている。この事からも国際語は、明瞭であるばかりでなく、美しい音色をもっている。それは思考の手段としてだけでなく、雄弁法

のすぐれた道具でもある。人々は国際語をあらゆる観点から、特に音声学の観点から十分に自分のものとして身につけていかなければならない。

総ての雄弁家は、先ず第一に母音の正確な発音に留意しなければならない。すでに述べたようにエスペラントでは、適度に口をあけてそれを発音する。同様にアクセントにも意を用いなければならない。エスペラントでは御承知のように、後ろから二番目の音節にアクセントがある。合成語にはフランク・エレメントの上にも弱いアクセントがある。そしてそれは語彙を鮮明なものとし、文章にリズム感を与えている。更にチーフ・エレメントとフランク・エレメントの間に小休止を入れることにより混乱をさけ、誤解をさける事が出来る。pét-árdo (熱烈な願ひ) と petárdo (爆竹) の発音の間には違いがある。bár-roko (岩壁) baróko (建築鉄材) の間にも大きな違いがある。この事から、一つの文字の正しい発音に気を配らなければならない。

次によくある音声学上の誤りについて、幾つかを紹介してみよう。

最後の音節にアクセントをつけたがる人達がいる。彼等も後から二番目の音節にアクセントを正確につけてはいるのだが、最後の音節を引き伸しすぎている。だから、前の語彙の最後の

音節が後の語彙の最初の音節と融合してしまつて濁つた音と成り、誤解を招く結果を生んでゐる。例えば *morala naturo—mora/ana/turo bela ringo—be/laringo* となつてゐる。h の発音をしない人がいる。それは大きな混乱を引き起すことになる。例えば *'horo—oro, hajlo—ajlo, halo—alo, havo—avo hardi—ardi, …… etc.*

こうした誤りに対して、特にフランス人やイタリア人は氣をつけない。

母国語が英語である英国人や米国人は、エスペラントで話す場合、のどを使って話しをする傾向がある。だから彼等のことばは明瞭さを欠いてゐるのである。また o は ou ではなく、e は æ でもない事に注意しなければならない。ロシア人やポーランド人は、n と nj、l と ll をはつきり區別して発音しなければならない。ni は nji ではない。彼等は言葉を柔らかくしすぎないように注意せねばならない。Lia nepo estas sciencisto (彼の孫は科学者だ) は Ljia njeпо estas sciencisto ではない。

ドイツ人は有声子音と無声子音を混同する傾向がある。ドイツ人は b と p、v と f、d と f といった音声子音と無声子音をはつきり區別して発音出来ない傾向がある。こうした誤りは、話しをする時だけでなく、書く時にも同じ誤りをしてゐる。tendo (テン・ト) というべき所を

Ili pasigis la tempon en granda tento. (彼等は大きな誘惑の中で時を過した) と言つては

ならない。単に水を飲む (*trinki*) と言いたい時に、*Li drinkis* (彼は深酒した) と言つてはならない。

母国語がイタリア語である人達は、*z* の文字の発音に注意すべきである。それは *Nio* という語彙のイタリア語の *z* と同一のものではなく、*Asia* というイタリア語の *s* に最も近いものである。

北国の人々は *c, g, j, s, z* という文字をはっきり区別して発音することが出来ない。

maso, sia, kaço, agô 等の代りに *mašo, šia, kačô, ačô* と *Si promenas kun ia edzo.*

(彼女は自分の夫と散歩している) と *Si promenas kun šia edzo.* (彼女は友達の夫と散歩している) の間には人きな違いがある。

一般に西洋では、*sc* という合成文字を発音しないで、*sci* という代りに *cii* と発音する。だがこれ等二つの語彙の間には大きな違いがある。もう一つ *kv* が *gv* や *ku* にならないように気をつけねばならない。

今まで述べて来た幾つかの実例だけで、総ての文字を正確に発音したり、語彙に正確なアク

セントをつけることが、どれ程重要なことであるのかを示すのに十分である。

エスペラントを使って話す総ての雄弁家は、これ等の問題に大きな注意を払わなければならない。優れたエスペラントの発音は、演説にすばらしい明瞭さを与える。そして、正確に発音することの出来る雄弁家は、おもいきって自己の演説速度をあげる事が出来るとともに、聴衆ははつきりと彼の言葉を理解することが出来る。こうした雄弁家だけが、真の大家であり、自己の演説の速さを意識的に支配することが出来るのである。

(c)、音声の強度は、声帯の振動振幅によつて決つて来る。そして、それを人々は容易に変化させることが出来る。ささやくような音から、最も力強い雷鳴のような音まで、大量のニュアンスがある。

雄弁家は演説を中間の音声や中間の速度でもつて始めるが、これと同時に中間の強度で演説を始めるならば、更によい結果を生むであろう。この場合、中間の速さを保つために用いた総ての要素を、中間の強度を保つためにもまた用いなければならない。大きな会場で、多くの聴衆を前にして話す中間の強度は、小さな会場で小人数の人を前にして話す中間の強度とは同一ではない。そして、その会場の音響効果に留意しなければならない。

雄弁家が張りのある音声の持主でなかったり、会場が大きくて一番後ろの聴衆が話し手の声を聞きとれないといった場合には、拡声器を用いて話しをする。しかし、拡声器を用いずに、じかに話しをする方がよい結果を得ることが出来る。拡声器は音声を金属化してしまうし、身振り動作を不自由にさせ、その他のあらゆる雄弁法上の手法を妨げるからである。

拡声器は野外での民衆の大集会や大会場での演説にとって不可欠なものである。拡声器なしにこれ等の演説をなすことは出来ない。雄弁家が教壇で座って話しをしたり、朗読したり、身振り動作が小さくてもかまわなかったり、何の役割も担わないといった大学や学士院での厳粛な学術講演では、拡声器が格段の役割を持っている。これ等の場合にはたくさん聴衆がつかけているにもかかわらず、話し手の音声はとても低いのが普通である。これ等の音声を、拡声器が補ってくれる。

拡声器は法廷での大きな訴訟に際し、大きな意味をもっている。弁護士の弁論は、裁判官に向ってなされるものである。弁護士は裁判官の近くで話しをする。だから彼等の演説は、相対的に低い声でなされている。だが、これ等の訴訟には、数多くの傍聴人がつかけている。公的訴訟の原則は、訴訟を傍聴している総ての人達が、何がそこでなされているのかといった一部始終を詳細に聞けるようにすることにある。従って、弁護士の弁論もみんなが聞けるようにしなければならない。だから聴衆の事を考えて、弁護士は大きな声でしゃべらなければならない。

いことになる。この事は弁護士が裁判官に向つて話しをしているのではなく、傍聴人に向つて話しをしているかのような印象を与えてしまうことにもなり（そういった事がよくあるのだが）適切ではない。この場合、拡声器は弁護士と裁判官、弁護士と傍聴人の距離に適合した音声の強さを可能とする。

同じような配慮の下に、雄弁家はマイクロホンを使って話すのか、それともそれなしで話しをすべきかを決めなければならない。これを決めるには演説の直前に決めるといったことをせず、事前にじっくりと計画を練る必要がある。そして、この事に自分の音声の強さを合わせるだけでなく、話しの速度や自分の姿勢をも適応させていかなければならない。

音声の強さは、力強い雄弁学上の手段である。それは正確な語彙強調を可能とするだけでなく、文章中のことばの強調や演説の部分的強調を可能にしている。

総ての語彙が、文章の中で同じ重要性をもっているわけではない。その中でもほんの少しの語彙だけが、他の語彙よりも重要性をもっている。文章の意味は、語彙の位置を換えたり、文章の配置を換えなかったとしても、それぞれの語彙にアクセントをつけて発音すれば、変えることが出来るものである。文章の始めに置かれた語彙は、最も重要である。そして、それを強

く発音したとすれば、その重要性は更に明白なものとなる。話しの中でも、幾つかの語彙だけが重要性をもっている。そして、雄弁家はそれ等の総てを強調したいと考えている。そういう場合、それ等を文頭におく事によって、意図した事を強調することが出来る。もう一つにはそれ等の重要な語彙を、力強く、大きな声で（時には、最も低い、弱い音声で）発音することにより、それ等を強調することが出来、意図したニュアンスや効果を得ることが出来る。

多くの言語は、文章中の語彙の位置を、自由に選択することが出来ない。だから、それ等の言語で話しをする場合、文頭に強調したいとする語彙をもってきて、それを強調することは出来ない。国際語では、この事に関して、より大きな自由がある。この観点から、エスペ란トは数多くの他の言語よりも優れた、申し分のない言語といえるのである。

文章中のそれぞれの語彙にアクセントをつけることによって、人々は種々のニュアンスを得ることが出来る。最も単純な文章であっても、それぞれの語彙に順次、アクセントをつけることによって、意図した意味を得ることが出来る。例えば、*Li estas sin*（彼は彼女を尊敬している）といった単純な文章を考えてみたとして、このたった三つの語彙に異ったアクセントをつけたら、音声の抑揚をつけることによって、異った多くのニュアンスや意味を得ることが出来る。次にその幾つかを示してみよう。*Li estas sin*（私ではなく、彼が彼女を尊敬している。）

Li estimas sin (彼は彼女を愛しているのではなく、尊敬している。) *Li estimas sin* (彼は心の底から深く彼女を尊敬している。) *Li estimas sin* (彼は私やその他の人ではなく、彼女自身を尊敬している。) 音声の抑揚をつけることによってまた、この事に関する疑いや驚き、確信、疑問といったものを表現することが出来る。

もう一つの実例を、シェクスピアのジュリアス・シーザー、第3幕、第二景から引用してみよう。アントニオは持前の弁舌で次のように言っている。

“*La amata Brutus trapikis tie ĉi, kaj kiam li elŝiris la fiŝtalon, jen kiel sango de Cezaro sekvis, kvazau ĝi volus konstati ĉu vere Brutus tiel akre batis: ĉar Brutus, kiel vi scias, por Cezaro estis anĝelo! Ho dioj kiel Cezaro lin amis!*”

これが、あれほどシーザーに愛されていたブルータスの刃のあとだ、奴がその呪われた剣を引き抜いた時、シーザーの鮮血がまるで戸口を押しあけたかのような勢いで、今の無法な一撃の主がほんとうにブルータスであったのかと、それを確かめるかのように、剣のあとを追ってほとばしったに違いないのだ、諸君も知っての通り、ブルータスはシーザーにとって天使であつたのだ。おお神々よ、どんなにあの男をシーザーは愛していたか知ってもいよう。”

この短い文派の中に、ブルータスの裏切り（アントニオの観点からみて）を示したり、シーザーの高貴さや偉大さを示すどれ程多くの語彙強調があるだろうか。 *amata, Brutus, angelo, amis* といった語彙にアクセントをつければ、ブルータスに対するシーザーの高潔な気持がはっきりしてくる。 *trapixis, elsiris, fistalon* という語彙を強調すれば、シーザーを殺すための陰湿な謀略が聞く人の激怒をかもし出す。もし *Cezaro*（短い文章の中に、三度も繰り返されている）に力点をおけば、殺害者の人柄が浮び上って来る。これ等の語彙強調をうまく活用すれば、アントニオが意図したブルータスの糾弾というその事を、浮き彫りにすることが出来る。

この文例の中のたった一つの文章でさえ、諸々の効果を得るための多くの語彙強調がある。アントニオは次のように言った。

êar Brutus por Cezaro estis angelo!（ブルータスはシーザーにとって天使であったのだ）この文章に種々の語彙強調を用いて得られる意味を次に示してみよう。ブルータスを強調すれば、他の者が殺ったのではなく、ブルータスがシーザーを殺害したのだという意味をもつ。シーザーを強調すれば、私しにとつてではなく、シーザーにとつて彼は天使であったのだという意味をもち、天使を強調すれば、敵ではなく、息子よりも大切な男であったという意味をもつ。更に文章の頭に *Angelo*（天使）という語彙を用いれば、もっとよりすばらしい感銘を与えることが出来る。

雄弁家が複数のニュアンスを得たいと考えるのであれば、音声の抑揚に併せて、複数の語彙を強調すればよい。文章を口にするよりも前に可能な複数のニュアンスの中から、自分の意図したニュアンス（悔り、皮肉、あわれみ、疑問）を素速く選択しなければならないことがある。テキスト自身には複数のニュアンスを書き込む事は出来ないから、自分に最もびつたりとしたニュアンスを選ばなければならない。

音声の強さは、あらゆる文章を強調するために役立つものである。単調な語彙や単調な証明の羅列をなす場合、音声はそう大きな違いのない、通常中間の強さを用いる。しかし、次に続く文章が、更に強い論証を展開していくものであるとすれば、理論的にいって、音声は論証の内的な力に併い少しずつ強まっていくべきである。論証の帰結に際しては、最も簡潔な文章を用い、最も力強い音声か、あるいは前の文章と対照的に、精力的で、落ちついた、しかも弱い音声でもってなすことが大切である。

文章の内容によってよりも、集合的な語彙の音楽的響きをもって、あるいは最大の音声をもって、聴衆に大きな感銘を与えといった演説上の「絵画芸術」を作り出す場合がある。こういった場合、それ等の一つ一つの語彙を、聴衆に分析させるような話し方をしてはならない。なぜなら、雄弁家がそれをなす場合、そういった目的をもって話しをしているのではなく、全

体をもつて、一定の調和を得ようとして話しをしているからである。こういった場合、雄弁家がゆつくりと、しかも中間の強さの音聲でもって話しをしたとすれば、意図した効果を得られないであろう。それは言葉の中の総ての語彙を細かく十分に分析できるだけの必要な時間を聴衆に与えてしまうからである。雄弁家はこの場合、速く話さなければならぬ。自分の話している内容と、使っている語彙の間に隔りがあったり、それ等が単なる色づけの役割を担うといった限定されたものであるとすれば、それだけ速くしゃべらなければならぬ。速さと同時に音聲もまた強めていく必要がある。それは聴衆や雄弁家に興奮をもたらしにくれる。優れた真の誠実な雄弁家は、そういった現実の、精神上の状態をつくり出しながら、自分自身によって創り出された光景によって、特に聴衆との触れ合いが生れたという実感によって、すばらしい陶酔を味わうことが出来る。この事が彼の精神をより刺激し、彼の眼は炎のようにもえ、彼の声は雷鳴の如く轟くといった状態をつくり出し、聴衆も演説の炎の中に巻き込まれていく。雄弁家から聴衆へ、聴衆から雄弁家へとといった相互作用の中で、意図した調和が生れてくる。そして音聲強調もまた、この目的の到達に対して、雄弁家の大きな力となる。

最も優れた雄弁家だけが、特別な環境の下であつたり、重要な儀式、大衆の大集会、大きな訴訟といった催しに於いて、すばらしい演説絵画をなすことが出来る。すばらしい演説をなすためには、演説の外的環境（多くの聴衆、音楽、旗、盛大に飾られた会場）や演説の下準備と

いったもので、前もって聴衆を或る枠の中にはめ込むようにしなければならない。この事は雄弁家が自分の考えを展開していかうとしているレールの上に、聴衆をのせる事を意味している。雄弁家が演説をなすに当って、聴衆が自分と同じレールの上にはいないのだという事がわかれば、あきらめることである。聴衆と雄弁家が、お互いに異なる自分自身の道を進んでいるといった二重の路線をもつことほど危険なことはない。触れ合いの欠除は相互作用を不可能にさせ、聴衆が居眠りを始め、あくびさえするといった事態を招く一方、雄弁家は一人芝居を演じているかのように、自分自身で興奮し、両手を振り廻し、自分の声を高ならせるといった事態さえ招いてしまう。聴衆の心理状態と雄弁家の心理状態とがかみ合わないがために、雄弁家は猿芝居を演じてしまい、演説自体を死滅さしてしまう。

低い音声で話しをすることは、賢明ではない。低い音声は、話しを聞きとれないといった事態を聴衆の側に招くことになり、非常に危険である。だが、低い音声で話すことが、すばらしい結果を生むこともある。高貴さや人間性、友情といったことについての話しの部分は、低い音声でもって話しをしなければならぬ。

(d)、音声の音色は、前にも述べたように、音声の高さを示す基本振動に倍振動がどのように含まれるかによって決つて来る。例えば、基本音調下の振動は、ソ、ド、ミ、ソ、半音シ、ド

といった倍振動を引き起す。これ等の倍振動は、いろんな力を持っており、音調をつくり出す楽器の振動によっていろいろな形態を持つ。そのため楽器の総てが固有の音色をもっているだけでなく、同一のカテゴリーに属するそれぞれの楽器（例えばバイオリン、ピオセロ）もまた固有の音色を持っている。同じように、人間の音声もまた固有の音色をもっている。人々はお互いに音色を識別しているが、同じ音色をもった人間は、世界に二人といない。ほんの小さなニュアンスの違いが、お互いの音色を識別している。

音色は自然の与えたものである。穏やかな音声、澄んだ音声、気品のある音声、なめらかな音声、柔らかな音声がある一方、鋭い音声、つんざくような音声、笛が鳴る時のような音声、しわがれた音声がある。人々が美しいと思ひ、心地良い印象を与える音声がある。また聴くに忍びない不快な音声もある。聴き手にとって不快な音声の持主は、雄弁家としての適正を欠いている。だが、自分の音色を矯正することは出来る。こうした人達が、職業柄、人前で話しをする事をよぎなくされた場合、良い治療法を知っているすぐれた医者に相談することが出来る。また、これ等の人達は、自分の不快でいやな音声が、演説をなすための大きな障害であるという事を意識しておかなければならない。

総ての人達は自分の音色に、いくつかのニュアンスをもたせることが出来る。雄弁家は出来る

だけ多くのニュアンスを出せるように努力しなければならない。状況によって雄弁家の音声は、厳肅な響きをもったり、斧のように鋭かったり、ビロードのように柔らかであったり、子供のよう甘えた声であったり、大きな川の流れのように穏やかであったり、ほとばしる急流のように心を躍動させるものであったり……するものでなければならぬ。こういった場合であっても、ニュアンスは内容に合致したものでなければならぬ。

(e)、句読法は音声を紹介して、はっきりと読み取れるものである。この分野で音声は第一級の役割を演じている。大衆を相手に話しをしている人達の多くは、この目的のために音声を活用していない。だから、演説が文章としてではなく、節としてでもなく、単なる語彙の羅列としてしか聞えてこない。聴衆は文章の終りや文章の始まりに気付かないし、疑問文を疑問文として識別することも出来ないし、挿入文を挿入文として受け取ることも出来ない。

活字体の中で句読法が可能ならしめる役割よりも、音声は多くのニュアンスを持った句読法の活用を可能ならしめるものである。

演説もまた、自己の句点や句読点、コロン、引用符、セミコロン、疑問符、疑問詞、連字符をもっている。

句点は音声の小休止でもって表される。演説の句読点は、少し長めの小休止と弱い音声でもって最後の語彙を発音することにより表される。コロンを表すための休止は、句読点の休止にやや近いけれども、その時の音声は弱く発音するのでもなく、低く発音するのでもない。逆に音声を少し上げ、次に文章が続いており、そのためにコロンがつけられているのだという注意を人々に喚起するような発音をする。演説の中で、人の言葉を引用する場合は、音声の高さや強さを、必ず変えなければならない。速さも、その言葉の引用の間はゆっくりとした口調を使う。敵対者の言葉を引用する場合は、皮肉の色あいをもたせるとよい。しかし、その敵対者が品位のある人であったり、彼の地位が強力なものであったり、大衆に対して深い好感をよせている人物であったとすれば、皮肉の色あいをもった言葉を用いることは危険である。皮肉は敵対者に打撃を与えるだけでなく、雄弁家自身にも打撃を与えるからである。セミコロンは句読点の休止よりも、多少長めの休止でもって表す。そして音声は句読点のように下がないで、文章が未だ終わっていないということを示す必要がある。疑問符は音声の高揚や十分に長い休止（句読点よりも長い）をとることによって「エスペラントでは語彙C_oを強く発音することによって」なされる。休止は聴衆の反応を待つためのものであれば、かなり長めのものであってもよい。間投詞は言葉に多少感情をこめたり、しゃべった文章の後に長い休止を設けたり、C_o H_o! Vei! Fi! といった感嘆詞を強く発音することによって表わされる。連字符には含まれた文章は、その他の文章よりも弱い。そして低い音声で発音する。文章の中で連字符を用いる場合、文章

を中断するように、演説の場合にも休止を設け、異なる音声でもって——普通よりも深みのある音声でもって——挿入文を話す。そして、次の休止の後は、また連字符以前の同じ音声でもって文章を続けなければならない。

新しい演説のピリオッドを示すためには、長い休止を設ける。普通、新しいピリオッドは、中間の高さや中間の強さ、中間の速度の音声でもって始められる。それは前のピリオッドが、普通高い音声であったり、強い音声でもって終ったり、弱い音声で終るからであり、それは演説の速度が、前のピリオッドの最後にとても速くなっていたり、とても遅くなっているからである。だから、新しいピリオッドが始まる場合、聴衆がはつきりと意味を聞きとれるように中間の音声で始めるのである。

演説は建築芸術である。それは多くの本質的要素からなりたっている。これ等の本質的要素——語彙、文章、ピリオッド（文節）——は理論的に組み合わせられ、これ等の総てが、建築芸術を創り出している。美しい宮殿が、しっかりとした土台やすばらしい柱、美しい屋根なしにはあり得ないのと同様に、演説もまた美しいデイトイルなしにはあり得ない。これ等のデイトイルの一つが、一つ一つの演説文章を分割したり、あるいは結合さしたりする句読法である。だから総ての雄弁家は、雄弁法のこの部分をまじめに研究しなければならない。

初心者には音声の訓練が必要である。大衆演説をもうすでに相当ふんで来ており、今もしばしば大衆を相手に話しをしているのであれば、彼のなすあらゆる演説は、同時に新しい音声の訓練となる。しかし、初期のころ、青年時代に人々は、自己のもつあらゆる可能性を見い出す努力をしなければならない。そして、自分の音声の悪い面を矯正し、自分の肺を強化して音声を完全に掌握しなければならない。偉大な雄弁家として世に広く知られた人達は、青年時代にあらゆる方法で自分の音声を鍛えている。最も良い方法は、有名な演説を声を出して読み、それ等を解析し、暗唱するまで幾度も繰返し、演説の内容にびったりした音声のあらゆる要素をあてはめ、声を出して試みることである。このようにすれば、同じ演説をいろんな方法でなすことが出来、音声を介して多くのニュアンスを得ることが出来る。そして、それぞれの方法やニュアンスの効果を比較し、考えることが出来て、明確な目的に到達するための最も適切な道を選ぶことが出来る。

こういった観点から演説を学び取っていく中で、次のような省略記号を用いると便利である。例えば、最も重要だとおもわれる文章や語彙を強調する箇所には、赤、青、緑、黒等の色鉛筆を用いて解析した演説の要所に印をすれば、その部分の音色を表すことが出来る。音楽の記号 f (やや強く) ff (ごく強く) sf (強烈に) f (普通) の強さで) p (弱く) pp (ごく弱く) を用いれば、音声の強さを示す記号として用いることが出来る。もう一つの記号 ^ v を用いれば、

音声の高さを示すことが出来る。これ等の記号を活用し、最初に声を出して演説を読みあげ、後に可能な限り覚えてしまいか、重要な箇所だけでも覚えておき、演説を解析したり、読んだ時にこうあるべきだと想像したことが再現されるような演説がなせるまで、繰り返し努力しなければならぬ。

演説が終つた後には、雄弁家はそれを音声の観点から批判的に解析する習慣をつけておく、この解析は彼が将来犯すかもしれない誤りを避ける一助となるであろう。

三、身振り

有能な雄弁家は、言葉だけを用いて話しをしているのではない。彼は自分の体全体を使って、特に目や顔の表情、両手を使って自己を表現している。彼の表情は厳格さや快活さ、哀れみ、誇り、悲しみ、喜び——これ等総てを表現することが出来る。演説の内容によって、雄弁家の表情が細かく変化するというのは極く当り前のことである。追悼演説をしている人の眼が和やかで、輝いている事はない。結婚式の祝いの席で祝辞を述べながら哀しい表情をしている人もい

ない。

彼等の表情はこれ等の事柄を強調しているかのようである。所が緊張のためか、あるいはもつと他の原因によってか真疑のほどはわからないけれども、公けの席で話しをしている人の中に、話しの内容とまつたく似ても似つかぬ顔の表情や体の動きをしている人がいる。重要で、厳粛な会合の席で、出席者の一人がこの前の戦争の恐怖を呼びましたことがあった。幾百万もの戦死者についての話しをしながら、顔には微笑を浮べており、手はポケットにつつこんだままで、下肢は大きく開かれていた。それは単に場違いのものというだけでなく、礼を先するものであったから、当然、彼の態度は聴衆を激怒させてしまった。

雄弁家の主たる助勢者は手である。特に古代の雄弁法の教師が *telum oratoris* — 雄弁家の矢と名づけた右手である。

下手な雄弁家にとって最も厄介なものは、これもまた手である。多くの人達は、公けの席で話しをしながら、手でもって何をなすべきか、どこにそれを置いたらよいのかを知らない。彼等は手を後ろに廻したり—最悪の場合には—ポケットに手をつつこんだり、あるいは無意味に手を廻したり、鉛筆やチョークを手の中でもてあそんだり、話しの内容にあわせなければなら

ない手の動きとまったく違つたいろんな動きを作り出している。巧みに活用しなければならぬもの、それは手の動きである。適切な手の活用は、演説の効果を減じてしまう。誤つた手の活用は、時には全演説を水泡に帰すことさえある。演説の始めから終りまで、話し手がボートをこぐ時のオールのように手を無造作にふり廻していたとすれば、失笑を買うに決つてゐる。知的な論証をなしている場合でも、聴衆の目は雄弁家の手に集中されているから、手の活用を誤れば、すぐにも聴衆は演説の内容についてゆけなくなつてしまう。

手が重要な役割をもっていることから、雄弁学は雄弁法上の手の活用について注意深く研究している。古代の雄弁法の教師達は、手を腰と目の間の高さ絶えず置いておくよう奨めてゐる。彼等は手を頭の上に上げる事も、腰より下に下げる事も戒めている。この助言は明らかに一般的法則からして賢明なものである。それは美学の要求に叶つており、それは音声の原則に適合するものである。だが、それは絶対なものではない。例えば、特にどうしようもない。なげやりにも似た気持でなす演説の際中には、雄弁家の手は体の線に沿つて、だらりとたれたままになるだろうし、非常に興奮した際には、高く手を持ちあげ、頭の高さよりもずっと上方にさへ上げることもある。重要なことは演説内容に手の動きが併うことであり、聴衆の性格や（演説によつて呼び起された）聴衆の心理状態がどのようなものであるかということである。話しの内容が科学的な問題に関係するものであったり、単調な語りであつたり、証明の羅列で

あったり、これ等と同等のものであったとすれば、手の動きは控え目であるのが普通である。そして感激のあまり手を高くあげることは先ずない。一方、活発な政治上の討論をしたり、数多くの聴衆を前にして厳肅な演説をなす場合や重要な訴訟—実際にはたまにしかないけれども—やこれと同等の催しに際しての雄弁家の演説には、大きな身振りを併う。手は—音声の強調や高揚とあいまって—より力の入った論証の展開とともに、話しが最高潮を迎えたり、話しの山場にさしかかるまで、少しずつ上っていく。

指はにぎりしめたままであるのか、手は開いたままであるのか、指どしはくつつき合ったままなのか、人指し指だけは伸しておくのか、指どしは開いたままにしておくのかどうかという—これ等総ての事柄は、話しの内容に対応するものである。にぎり拳は最も強い論証や妥協のない立脚点を示す場合に用いられる。静かな講演、特に学士院、大学、その他学術協会での学術講演をなす場合には、手の平は伸したままにしておくが、指どしはくつつけたままであるといった状態で話す。右手の人指し指を伸すのは、特定の語彙を特に強調したり、現実的な、または抽象的な敵対者を示すといった通常、鋭いニアンスを表現する場合である。抱容力のある人間的感情や宗教的感情を呼び起そうとして話しをしている場合には、指は開いたままではあるが、指を少々内側に曲げておくといった状態で話しをする。(神父は説教の際、好んでこういった手の使い方をしている。)

演説の始め、特に話しの冒頭の部分では、手をあまり動かさないことである。演台の上に、もしそれがあるとすれば、そおっと手を置いておくか、または机の上に、それが適当な高さのものであるとすれば、軽く手をのせておく、あるいは腰の高さに両手を軽く組んでおくのもよい。ポケットに手を入れたり、後ろに手をやることは、厳に慎まなければならない。また、例として前に述べたような、どうしようもない。なぜやりに似た気持で話しをしている場合以外は、体の線に沿って手を下げたままの状態で話しをしてはならない。

演説思考が進展していくにつれ、手は次第／＼に自由になっていく。手は胸の一番下のあたりにあり、右手は左手よりも体から少し離れた位置にあるのが最も自然である。そして、その時の手の動きは、話しの内容にそったものでなければならぬ。手が最も大きな動きをもつて力強く使用されるのは、演説の最も重要な部分を、あらゆる手段を用いて強調しようとする時である。

演説の際中、右手は左手よりも多く用いられる。右手は雄弁家の戦いの第一線にある。一方、左手は最も激烈な戦闘の際にのみ活用される予備軍の役目を担っている。

身振りの活用、特に手の動きについての非常に一般的ではあるが、とても重要な法則、「下

手に動かすよりも、全然動かさない方が賢明である。」といった言葉がある。手でもって演説の内容をうまく表現し得ないのであれば、演説をしている間は、手を軽く演台の上にのせておくか、あるいは腰の前に両手をそつと組んでおく。

第二に「手の動きは、あまり大きくてはいけない。」という当然とも言うべき、重要な法則がある。演説の内容に答えない大きな身振り程、笑うべきものはない。単調な語りの際中に、話し手が手を頭上に振りかざしている様を想像してみれば、どのような感じを持つであろうか。大統領や官公庁からの授与式に列して、感激のあまり手を高くかかげ、深い感謝の気持を抑えきれずに声を震わせながら祝辞を述べている雄弁家を想像してみるがよい。大統領閣下（高鳴る声をはりあげ、片方の手をあげる。）有識者のみなさま方（同じような声で、もう一方の手をあげる）親愛なるみなさま方（同じような声で、もう一度手をあげる）……まさにふきだすより他にないであろう。

彼が例え、そのために興奮したとしても、聴衆はそうではないし、彼が感激に胸を打ち震わしたとしても、聴衆はそうではないということを雄弁家は覚えておかねばならない。身振りは思考の展開にもなつて、聴衆の心の動きや、雄弁家の心の動きに平行して、注意深く、少しずつ用いられていく。身振りがこれ等の要求に叶ったものでなかったとすれば、演説を妨

害する単なる体の動きとして聴衆の目には映るであろう。演説の内容と身振り動作の完全な調和、そして聴衆の心と雄弁家の心との完全な調和のみが優れた演説の必要条件である。最も優れた身振りは、身振り動作として気づかれることのない身振りである。それはもう演説の中に完全に溶け込んでしまっている。

もう一つ、雄弁家は役者ではないという事を忘れてはならない。雄弁家は自分自身の名前で話しをし、自分自身を表現しようとする。役者は自分以外の人物を演じており、自己の考えを述べているのではない。従って雄弁家の身振りは、自己の気質や自己の人間性、自己の有する総ての個性に合ったものでなければならない。一方、役者の身振りは、どういった場合であれ、かなり大きなものであってもかまわないけれども、演じている役柄の性格にぴたり適合するものでなければならない。

四、服装

雄弁家の物理的要素を取り扱う中で、物理的要素には属していないけれども、それに直接関係のある事柄について少々述べておきたい。雄弁家は自分の外觀、特に自分の服装について注意を払わなければならない。聴衆は聴いているだけでなく、観てもいるのである。無精な服装や場違いの服装は避けなければならない。

古代のローマ人達やギリシヤ人達は、多くのひだをもつ式服を着ており、それは演説をなす彼等にとって大いに役立つものであった。体にまとうようにして巻きつけられてはいるが、右手は自由に動けるようになっていて、トーガーは——古代ローマ人達の外着——この目的にうまく適合したものであった。

今日でもかなりの国で、あらゆる目的のために、同じような外着を着用している。西洋の幾つかの大学では、教授がかなりゆつたりとしたそでを有する特別な服を着て講義している。同様に、多くの国に法廷での弁護に際し、特別な服を着用する習慣や慣行が現在も失なわれずに残っている。軍人である雄弁家は、自分達の制服を持っている。聖職者達はどこにあっても、

特別な服装を着て自分達の存在を明らかにしている。これ等総ての人達は、はっきりと見分けがつき、混同されることはない。雄弁家は自分達の国や自分達の社会で普通用いられている、あるいは慣例的に用いられている服をあつさりと着こなしている。彼の外観は聴衆の側に驚きや激怒を引き起さすことはない。そして、彼等自身も、そのようなことがないようにと気を配っている。

雄弁家が自国の習慣と異なる服装の国で話しをするようなことがあれば、自国の習慣を必ず話しておかなければならない。場合によっては、その国の式服を着て話しをするか。その場に出来るだけふさわしい服装で話しをする事が好ましい。

雄弁家の服装について、絶対にこうあるべきだという特別な規則はない。原則的には、明るい服装であっても、暗い色の服装であってもさしつかえない。どのようなネクタイを締めていようと、どのような靴をはいていようとかわらない。女性の式服の多様性は、女性の雄弁家に対して、より大きな自由を許している。

しかし、服装に関する硬直化した規則が例え存在しないとしても、一般的ではあるが、重要な一つの規則「雄弁家の服装は、演説の性格に適合したものでなければならぬ。」という言葉

がある。演説の性格は、雄弁家の話しの内容にかかわっているだけでなく、どのように話しを展開していくか、どこで話しをしているのか、どのような聴衆が集まって来ているのかといった事柄にかかわっている。そしてその性格は、はっきりとした形でとらえることが出来る。例えば、或る人の追悼に列して話しをするのであれば、雄弁家は場所柄を考え、暗い色の服を着るであろう。野外での民衆の大集会に列して演説をするのであれば、えん尾服を着て演台に立つなどという事はない。雄弁家が演説の性格を十分に知らないといった事がよくある。彼は自分の話しのテーマについては、もちろんよく知っているのだが、演説を行う場所も知らないし、聴衆の構成も、そしてその数も知らないし、演説に対して抱いている大衆の気持も知らないということがある。これは自分以外の人達が自分の演説会を催した場合であるとか、大きな大会や会合に招かれて話しをするといった場合によくあることである。会場に出向いて行って、その場で会場や聴衆を見渡し、状況に応じて自分のなす講演の手法を、その場の雰囲気に合わせてことは容易である。しかし、自分の服装を変えることは至難である。演説の性格を、聴衆の求めているものとは全く違ったものとして受け止める事がある。彼が招かれた会合の内容が友好的なものであったから、気軽に明るい色の服装をして出かけた、しかし聴衆は全く違った考えを持っており、厳肅な気持で、暗い色の服装をしていた。こういった場合、とても不快な気持を味わうことになる。それとは逆に、雄弁家が厳肅な気持で暗い色の服装をして出かけたのだが、聴衆は平素の仕事着を着ていたといった場合も同様である。

どういった不快さを、場違いの服装がもたらすのか、実例を紹介してみよう。

言語学者の重要な国際会議に参加した各国の科学者達は、非常に厳めしい服装をしていた。ほとんどの人達は黒色の服装をしており、他の人達も黒ずんだ服装をしていた。総ての人達はもちろんネクタイを締めていた。そこに出席していた若い科学者が上着を着ずに、半そでにノーネクタイという姿で、エスペラントについて話しをしようとした。(まことに残念であった。)司会者は彼の服装を見て、彼の言葉をすぐにさえぎってしまった。その事は話し手にとって不愉快なばかりでなく、彼が主張しようとした事についてもまずいものであった。その若い科学者は、服装の重要性についてよく知らなかったのであろう。彼はそういった服装は若者達の会合や仲間達の会合の席での演説には向いているけれども、科学者達の会議の席では不向きであるという事を知らなければならなかったのである。

雄弁家が演説の性格を知らなかったとすれば、情報を得るように努力しなければならない。事前に会場に赴き、聴衆のおよその構成を質問し、その数についても知っておくようにする。そして同じような催しに着用するその地方の人達の服装についても聞いておく。これ等の調査を基にして、どういった服装で出かけたらいかを決めるのである。何もここではファッションについて述べようというのではない。ただ身仕たくについて論じているのである。ただ二つ

の服装、厳肅なものか、日常のものかといった中から選択するだけで十分である。もちろん、これは男性に対してである。女性は大きな選択の自由をもっている。だから、彼女達に対して服装に関する特別な助言を与える必要はない。

(112)、雄弁学が要求する観点からすれば、言語知識の規準は非常に高度なものである。

(113)、K・カローチャイとG・バラングヤンの著書：“Plena Gramatiko de Esperanto, Budapesto, 1935..”
を参照の事

第十章

雄弁家の知的要素

一、一般教養と専門知識

雄弁家の任務は、自己の内にある知識や考えを人前で話すことである。あらゆる面での膨大な知識の発達を促した歴史の中に、総てを知りつくしていた人はいなかったことからわかるように、あらゆる総てのテーマについて話しをすることの出来る人はいない。だが雄弁家は他の人達よりも、より多くの場所で、より多くのテーマについて話しをする機会をもっており、自己の専門分野について話しをする場合でさえ、しばしば他の専門分野にも触れなければならない。

このことから、真に優れた総ての雄弁家は、絶えず自己の知識を高めるように努力しなければならない。自国の文化活動や国際交流に挺身するとともに、科学のあらゆる分野の知識を得るように努め、国内文学や世界文学を読み、哲学や総ての芸術分野の発展に目を配り、知識

を得るように努めなければならない。雄弁家は絶えず自己の一般教養を高める努力を怠つてはならない。総ての知識を身につけることが出来なければ、当然な事ではあるが、どこに行けば少くともその事を知ることが出来るのかを知つておく事が大切である。このようにして、科学や哲学、芸術のあらゆる分野に通じていなければならない。

幅広い一般教養をもつ雄弁家は、どのような場合であれ、けつして窮地にたたされることはない。演説の下準備をなす場合、必要であれば、容易に新しい知識を汲み取ることの出来る知識の泉を捜し出すことが出来るからである。例えば、被害者の受けた傷害と被害者の死との因果関係の問題を、弁護士が取り扱わなければならないかつたとした場合、被害者の死因はその時うけた傷害ではなく、他の原因がもとで死んだのであるという事を証明するために、彼は他の専門分野の知識、自己の専門分野ではない、即ち医学の専門分野の知識を調べあげなければならない。彼はもちろん、これ等の医学分野の専門家とはなり得ないにしても、その道の専門家に、適切な相談をもちかけることが出来るであろうから、この点に関しても、自己の弁論に際して、適切な論証をなすことが出来る。一般教養は自己の不得意とする分野にも通ずる道を切り開いてくれるとともに、なそうとする弁論に必要な、新しい専門知識の宝庫に自分を導いてくれるであろう。

こういった場合の他にも、一般教養はまた雄弁家を大いに助ける働きをする。こういった弁論をなす場合でさえ、言葉たくみにそれを活用することが出来るし、聴衆の不意の質問や敵対者の悪意に満ちた質問に対しても、的を得た知識をもって答えることが出来る。彼は自分の弁論を、あらゆる面から修飾し得る大きな力を持っており、弁論を生かし、弁論を興味あるものとする可能性を持っている。

雄弁家の一般教養が出来うるかぎり幅広いものであるべきだとすれば、彼の専門知識も出来るかぎり深いものでなければならぬ。総ての雄弁家は、最高のレベルまで自己の専門知識を高めなければならない。法律の深い知識もなしに、法律について話しをする雄弁家など考えられない。医学、技術、芸術、神学、哲学、政治、言語、エスペラント——といったこういった分野であれ、それ等の専門分野についての深い十分な知識もなしに、話しをすることの出来る雄弁家など想像することさえ出来ない。法律家でもないものが、法律について論ずることは出来ない。俗人が教会で説教することなど出来るものではない。人々は雄弁家が専門的テーマで話しをする場合、必ずや完璧な専門知識を彼に要求するものである。

この事からも、一般教養と平行して雄弁家は自己の専門分野に最も多くの時間をさかなければならない。自分から求めずに、自分で研究もせずを得られる新しい知識や新しい考え等ある

わけがない。雄弁家が自己の専門分野について特定のテーマで話しをしようとして、演説の下準備をなす場合、彼はそのテーマについて深く掘り下げて研究しなければならない。彼は今までの知識を一新し、新しい知識を得るようにする。演説をしている瞬間には、聴衆は彼の話しに耳を傾けているのだから、彼はすでに自分の話しのテーマを、完全に自己のものとし、支配するまでになつておくようにする。このようにすれば、聴衆は自分達よりも、彼はより多くの事柄について知っていると考えらるであらうし、少くともその事については新しい観点から掘り下げた考えを持っているのだと考えらるであらう。雄弁家にとって明らかに有利なこうした賛美を、自己の演説でもって更に確固たるものとし、話しの内容に関する深い確かな知識でもって、それを更に不動のものとしなければならない。

雄弁家の専門知識や一般教養は、内容の観点から見ても、優れた演説をなすための前提条件である。雄弁家の個人的教養やその教養についての知識は、彼に不可欠の確信を与えている。それは雄弁家の勇気を彼が得る大きな手助けとなり、雄弁家の教養は、聴衆の目に彼の權威を不動のものとして映し出し、彼の考えは聴衆により強く、より心よく受け入れられるのである。

二、言語知識

雄弁法に対する言語の重要性は、すでに幾度にも渡って強調して来た。総ての雄弁家は公けの席で話しをする時に使う言語を十二分に知っていなければならない。雄弁家の言語知識は、彼の一般教養や専門知識に深く関係している。彼の教養が深く幅広いものであれば、それだけ多くの知識を彼は知っているとと言える。だが雄弁法の観点から言えば、語彙の豊富さだけが大事なのではなく、それ等の適切な活用が特に重要なのである。これと同時に文法を正確に適用し、誤りのない文章であることが重要である。言葉の使い方をよく知らないで話しをする雄弁家は、聴衆をいらだたせるばかりでなく、誤解を招く危険さえ冒し、言語の知識が不足していることが災いして、せっかくの優れた多くの考えを犠牲にしてしまわなければならない。通常、彼は無教養だという印象を与えてしまうであろう。

雄弁家の文体は、普通の文体よりも生き生きとしており、秀れたものである。特殊な活力を与えているのは、文章の中に雄弁学上の比喩的表現が使われているからである。言葉や思考に對して言わんとする氣持をより適格に、より効果的に引き出そうという考えから、独得な、多少ひねった感覺をもった表現を用いる。

比喩的表現の中には、言語比喩と思考比喩がある。言語比喩は一定の方法により言葉のもつ通常の意味合いをより広げ、より拡大したり、あるいは言葉の意味をひねったりする。このようにして、通常の意味をもつ他の言葉を用いるよりも力強い、深い感銘を与えることが出来るのである。思考比喩は話しの中で用いられる表現に係わりなく、思考の裏返しの表現である。

総ての雄弁学上の比喩的表現は、思想をより明確に、よりわかり易く、はつきりしたものにさせる目的をもっている。このことから雄弁家達は、それに自分達の創意や才知を加えて、聴衆の心に衝撃を与えようとする。比喩は演説のレベルを高め、心の触れ合いをもたらし、精神を躍動させる。適度にうまく使いこなされた比喩的表現は、演説を芸術の域へと導くであろう。

次に雄弁学上の主たる比喩的表現を紹介しよう。

(a)、言語比喩——非常に数多くあり、最もよく用いられるものである。

(1)、エリプソ（ギリシャ語で *ellipsis*）は、思考の理解にとつて、絶対不可欠なものとは思われない一つかそれ以上の語彙を省略する比喩的表現である。日常生活の中で人々は絶えずエリプソを用いて話しをしているが、相通じている事柄が、不足している言葉の溝を容易に埋

めてくれる。話しの内容が親密なものであったり、家族的なものであればある程、それだけ多くのエリプソが話しの中に入ってくる。雄弁家の比喩的表現としてもまた、エリプソはよく使われる。その場合、話しテーマが聴衆によく「熟知」されていることが大きな条件となる。

専門的講演を専門家仲間の前でなす場合は、非専門家の前でなす専門的講演よりも、エリプソの入る割合が多くなって来る。雄弁家が聴衆をよく知っており、親密な交流を持っているのであれば、それだけエリプソを多く用いて話しをしてもかまわないことになる。雄弁学上の語彙のもつ意味からする真のエリプソは、話しの中で普通用いられるわかりきった語彙を省略することにある。それは頭脳の緊張をほぐし、聴衆の精神的負担を軽減させることが出来る。だから話しの内容が聴衆にわかり易く聞えて来るとともに、容易に記憶されるに至るのである。一方、この比喩的表現を誤って用いるような事があれば、聴衆が話し手の考えをうまく理解し得ないといった事にもなりかねないであろうから、この事には十分に注意しなければならない。

(2)、ヒペルバート（ギリシャ語でhyperbaton）は、通常の語順や文の配列を置き換えることによって表す比喩的表現である。この比喩は詩歌でよく用いられるが、雄弁法の中では、情熱を特に表現するために用いられる。

Homon mildan, homon grandan, homon noblan oni mortigis !

博雅な人を、世にも偉大なる人を、まれにみる高貴な人を失ってしまった。という文章は、

Oni mortigis mildan homon,……!

我々は博雅な人を世にも偉大なる人を……失ってしまったという普通の文章よりも、情熱をかきたてるものがある。

(3)、コンジュンクツイーオ（ラテン語で *conjunctio*）…雄弁学上の比喩的表現としてのコンジュンクツイーオは、意味を強める目的で、同一の接続詞を繰り返し用いたり、同一の接続詞を強く発音するといったことでもって表現する方法である。同じ例をもって説明すれば、

Oni mortigis homon kaj mildan, kaj grandan, kaj noblan !

博雅で、そして世にも偉大な、そしてまれに見る高貴な人を失ってしまった。明確な感銘を得ようとして用いる接続詞の繰り返しは、接続詞や他の語彙を絶えず繰り返して使っている多くの人達のよくある恐ろしい誤りとは、何等共通性を絶対にもつものではない。的確な語彙を見い出せずに、あらゆる文節や文章でさえ「しかし」とか「そして」あるいは他の同様な語彙でもって始めるといった雄弁家には、聴衆の感銘など得られるはずがない。

(4)、プレオナスモ（ギリシャ語で *pleonasmus*）は、既に表現した考えを、再び表現するといった冗語句の活用をもつて表す比喩的表現である。日常生活の中で用いられるプレオナスモは、言語の知識が足りないために、その結果、使われたり、単なる不注意がもとで誤って使われる

ものである。しかし、雄弁学上の比喩的表現としてのそれは、思考に強い力を与え、多くのニ
ュアンスを文章に与えることになる。単に耳で聴き、目で見たことを、例えば、自分の耳で聴き、
自分の目で見たと表せばより思考を浮き彫りにすることが出来る。

(5)、リピート・雄弁学上の比喩的表現としてのリピートは、同一の語彙や同一の文章を、幾
度も意識的に繰り返す表現方法である。同一の語彙を文章の始めに繰り返して用いるのであれ
ば、その比喩的表現をアナフォーラ（ギリシャ語で *anafora*）と呼ぶ。同一の語彙が諸文章の
中で、位置を換えて使われるのであれば、その比喩的表現をコンベルシオ（ラテン語で
conversio）と言う。

アナフォーラの例を示せば “*Bona estis Ludoviko kun siaj kolegoj en gimnazio ; bona en
la familia rondo ; bona inter la amikoj, bona ĉiam kaj ĉie. . . .*”

“中学校で、クラスメートと一緒のルドビコは、礼儀の正しい少年であり、クラブ活動にも
熱心で、友達の間にも人気があり、いつでも、どこでも模範的な少年であった。”

コンベルシオの例を示せば、 “*Ke oni parolu bone aŭ malbone pri la fama kardinalo,
miaj versoj kaj mia prozo diros pri li nenion.*

Li faris al mi tro da bono por paroli pri li malbone.

Li faris tro da malbono por paroli pri li bone. (Corneille pri kardinalo Richelieu)

かの名高い枢機卿について、世間では色々評価しているが、私は何もつけ加えることはない。彼のことを悪く言うには、余りにも良いことを私に彼はしてくれ、彼のことを良く言おうとしても、彼は余りにも悪い事をしている。(リシュリユー枢機卿を評したコルネーユの言葉) コンベルシーオの秀れた実例が、ブルータスやアントニオの演説の中にある。(114) 両者の演説の中で幾度も繰り返し用いられている「野心」という語彙に特別の注意を払えば、自ずと理解し得るであらう。

(6)、オポシイツイオ(ラテン語で *oppositio*) は、通常の意味からすれば、お互いに対立する語彙の結合によって表す比喩的表現である。例えば、*freneze saĝa* : 氣違いじみた知性、*terure bela* : 恐ろしく美しい。

幾つかの言語比喩はトローポイ(ギリシャ語で *tropos*) と名づけられている。語彙の通常の意味の転意から成りたっているこれ等の比喩的表現を論じてみよう。次に主要なトローポイを示せば、

(7)、メタホーロ(ギリシャ語で *metafóra*) は、通常の意味からすれば表現しようとする物事

の間にある類似性を見出し、一つの物事の最も特徴的な性質を、他のものにうまく転用する方法である。一つの物事を表す語彙でもって他の物事を表す。例えば、文脈の中で勇猛な人という代りにライオンという語彙を用い、大きな危険という代りに火山という語彙を用いる等の方法である。時折、不均衡な、誇張したメタホーロを用いる事がある。優れた表現方法を用いて表そうとするが、教養の不足が災いして、平凡な言葉で置き換えてみたりすることがある。だからメタホーロで表そうとして、結局は愚鈍な表現をしてしまうことになる。こういったメタホーロの良い例として、アンリ・モニアがムツシュ・ブルドホーンに伝えた有名な次の言葉がある。 *La caro de stato navigacias sur vulkano.* (国家の財政は火の山を歩き来している。)

メタホーロは比較を示す語彙を含んでいないから、純然たる比較用法とは異なるものである。比較用法で表せば： *Li estas forta kiel leono.* ∴ 彼はライオンのように強い、メタホーロで表せば、∴ *Li estas la leono de teamo.* ∴ 彼はチームのライオンの存在である。

(8)、アレゴリーオ (ギリシャ語で *allegoria*) は、聴衆の心の中に実像を描かせようとする言葉によって描かれる——通常の意味による語彙の活用とか、その実像によって間接的に他の意味を聴衆に気ずかせようとする語彙の活用をもつて表す比喩的表現である。

例えば、∴ *Nia publika ŝipo troviĝas en tempesto.*

我々の船は、暴風雨の中にある。と言ったとすれば、大波に揺り動かされ、暴風雨によって動きのとれない状況にたちいたらせられた船の実像を想いのかべ、その実像によって、人々は、国家を脅やかしている危機の実体を知るであらう。

古代の民衆は、アレゴリーを多く用いていた。今日に於いてもそれはまた非常に優れた雄弁学上の比喩である。専制君主制国家や独裁国家の下では、自分の考えを述べる場合、迫害を避けようとして、よく用いられる表現方法である。

(9)、アルード（ラテン語で *ad. ludere*）は、間接的な言葉によって、ずばりは言わなくとも、或る事柄についての考えを呼び起そうとする比喩的表現である。それは聴衆が既に知っている知識を呼び起す思慮深い比較法でもある。アルードは投げつけるとはね返されてくるボールに比較して考えることが出来る。目的に叶ったアルードをなすためには、歴史から引用した有名な事件を活用したり、神話学から引用した話を引き合いに出したり、風習や習慣の中から得る知識を活用する。例えば、贈賄について話す場合、古代のアルードをうまく活用することが出来る。

Azeno ŝargita per oro transsaltas eĉ la plej altajn murojn !

（黄金を背おったロバは、とても高い塀でも飛び越える。）あの人の追悼演説はどうでしたかと

ヴォルテールに質問したところ、彼はカルロの剣のように偉大であつたと答えたが、聴いた人がその意味をつかみきれなかつたので、彼は長くて平坦なものをつけ加えた。

(10)、イロニオ（ギリシャ語で *eironeia*）は、言語比喩あるいは思考比喩といった文彩である。両方の場合とも人々の考える反対のことを口にするが、聴き手は文脈の中に隠されたその言葉の意味を、うまく理解することが出来る。ペテン師のことをイロニオで表せば、「立派な伝導師」とか「正直者」といった言い方をするし、無学な者に対しては「我等のソクラテス」といった言い方をする。これ等は文彩の部類に属するものである。もしイロニオが全体の文章で表現されていたり、複数の文章でいい表されているのであれば、思考比喩である。

イロニオは思いやりのある表現であるかに見えるが、実際には懐疑的で、残忍さを秘めた手厳しい。酸味のきいた、毒のある表現であるかも知れない。非常に強くて鋭いイロニオは皮肉になつてしまう。

(11)、カタクレーズ（ギリシャ語で *katahresis*）は、メタホーロの一種であるが、観念を意味する適切な語彙を欠いているために、殆んど強制的ともいえるメタホーロである。新しい語彙を見い出す代りに紙葉というし、同じようにひな壇の足とか机の足、安楽いすの腕といった言

い方をする。雄弁家はこれ等の比喩的表現の活用を慎重にすべきである。必要性を感じるものでなかったり、有益でなくてはならぬものでなかったならば、新しいカタクレーズを創り出さないことである。実際すでに使われているカタクレーズは、もちろん、自由に使うことが出来る。

(12)、ヒパラゴ（ギリシャ語で *hypallage*）は、たまにしか用いられることのない比喩的表現である。同じ文章の中で、一方の言葉に実際あてはめなければならぬ語彙を、他方の言葉の中にあてはめて使うといった表現方法である。

Mortigite homon per tiu trancilo kulpa, li....!

“罪を犯した刃物でもって人を殺してしまった、彼は……。”刃が罪を犯したわけではないのだから、実際には *kulpa* を彼の前におかなければならない。だが、この比喩的表現が、文章の中の或るものごとを浮彫りにさせ得るものであるとすれば、うまく使うことが出来る。右に示した例文は、人を殺すために用いられた手段を、はっきりと浮き彫りにしている。

(13)、メトニミイオ（ギリシャ語で *metonymia*）は、ヒパラゴに多少似かよった所がある。

或るものごとを示すために、他の物事を示す語彙でもって表現する比喩的表現である。その語彙は理論的、歴史的、風俗といった関係から前の物事を示している。原因でもって結果をいい

表す場合、美しい書体の代りに優れた腕というし、あるいは逆に、結果でもって原因を言い表す場合には、毒薬を飲むという代りに死を飲むといった表現をする。物理的要素でもって知的要素あるいは倫理的要素を表現しようとする場合、血も涙もないというし、容でもって内容を表現しようとする場合には、あの人は立派な容だという。メトニミイオはメタホーロよりもつと通俗的で、より庶民的な表現方法である。

(14)、エウフェミイスマ（ギリシャ語で *eufemismos*）は、甘美な言葉の選択をもつて特定の概念を――不快な、嘆かわしい、胸のむかむかする。いやな概念――和らげて表現しようとする表現方法である。真の名称でもって物事を表現しようとするれば、言わんとする人の気持が損なわれるから死去したという代りに他界したといったり、盗んだという代りに取った………というように上品な言葉を使って表現する。

(15)、アンティフラーズ（ギリシャ語で *antifrasis*）は、風刺的で、いや味のあるエウフェミイスマである。語彙の真の意味からする甘美な出来事について論じようというのではなく、辛らつな出来事やいやな出来事といった全く相反する出来事に、甘美な語彙を適用する比喩的表現である。古代のギリシャ人達は、自分の父や母、兄弟、姉妹を殺した為政者に対してさえ、*Patroama*, *Patrinama*, *Fratama*（父想いの、母想いの、兄弟想いの）といった言葉を使うこ

とさえためらわなかった。

(b)、思考比喩

思考比喩もまた非常に数多くある。中心となるものを簡潔に紹介してみよう。

(1)、アンティテーゾ（ギリシヤ語で *antithesis*）は、二つの異なる思考を対峙させて用いる比喩的表現である。オポシツイオでは二つの対照的な語彙を並置して用いた、適切に選び抜かれた文章をもって対照的な思考を表現する方法をアンティテーゾな表現という。そのコントラストはオポシツイオの場合よりもアンティテーゾな方が強烈であり、はつきりとしたものである。

アンティテーゾは最も優れた雄弁学上の比喩的表現の一つである。美の本質はコントラストである。それは文章の表現形式を浮き彫りにさせるすばらしい手段でもある。

例えば

: *La vivo de herooj riĉigas la historian, kaj la historio plibeligas la vivon de herooj.*

“英雄の生涯は、歴史を薫り高いものにするが、歴史は英雄の生涯を現実よりも美化してしまう。”

(2)、アポストローフォ（ギリシャ語で *apostrophe*）は、出席していない人達や無生物に向つて呼びかける比喩的表現である。雄弁家はよくアポストローフォを用いる。情熱を表現したり、聴衆の中に燃えさかる情熱をふき込む比喩的表現で、これに勝るものはない。雄弁家は演説の途中で自分の氣持を押えきれなくなつてしまい、それを爆発するかのように口ばしる。殆んど聴衆を忘れてしまつたかのように、彼はその場に居あわせない人達や死者に向つて、あるいは神に向つて自分が考えたり、自分が感じてゐる總ての眞実の証言者に向うかのように、目を輝やかせながら彼等に向つて呼びかける。彼の精神的高まりは、頂点に達し、彼の靈感は計り知れない深みをもつに至る。

古代世界の最も偉大な二人の雄弁家、デモステネスやキケロヌスは、アポストローフォのすばらしい実例を世に残している。マラトンの戦いで祖国のために死んでいつたギリシャ人達へのアポストローフォには、実に感銘させられるものがある。同じく、ミローネの運命を説いてローマの知識人を沸かせたキケロヌスのアポストローフォ（「ミローネのために」という演説の中の）が有名である。

(3)、エクスクラマツノオ（ラテン語で *exclamatio*）は、激怒、怒り、感嘆、恐怖、驚嘆としてこれと同等の力強い感情を表現するために役立つ表現方法である。雄弁家は自然にこみあ

げてくる内的な衝動に身をゆだねて、歡喜や驚き、激情といった生々しい感情を吐露する。エクスクラマツイオは通常、*Ho! Ve! Fi!* といった感投詞でもって始まる。それ等は消極的なエクスクラマツイオを除けば、すべて最も高い、最も力強い音声でもってなされる。消極的なエクスクラマツイオは沈んだ、弱い音声でもってなすと、とても良い結果を得ることが出来る。

エクスクラマツイオはとても嚴肅な演説の中でよくなされる。それは演説に情熱的な性格を与えるものであるから、聴衆の側に、それを受け入れるだけの精神的準備が整っている時のみなされるものである。それは普通、ピリオッドの終りになされる。すでに引用したアントニオの演説から、その実例を示そう。： *Ho dioj, kiel lin Cezaro amis!* “おお、神々よ、どんなにあの男をシーザーは愛していたか知ってもいよう。”

(4)、エピイフォネーモ（ギリシャ語で *epifonéma*）は、全文章でもって述べられるエクスクラマツイオの特殊なカテゴリーである。それは前の推論の結果としての深い思考や一般的格言を含んでいる。例えばシーザーの亡骸のそばでなすアントニオの演説から引用すると、

“*Kaj la vizagon volinte en mantelo, ĉe la bazo de la Pompeo-statuo, kiu sangverŝis dume, jen Cezaro la granda falis. Ho kia falo, miaj samlandanoj! Falegis tiam mi kaj vi, ni ĉiuj, dum la sanga perfido baŭmis venke!*”

“顔をマントルで被いながら、ところもあるにあのポンペイの脚下で、それが吹き出す血潮に身を浸すかのように、シーザーの巨軀は崩れ落ちたのだ、諸君、ああ何たる破滅なのであるうか、今や私がそして諸君が、我々の総てが打ち倒されたのだ。しかし一方では、血に汚れた叛逆がわれ等の頭上にわが世の春をうたっているのだ。”

また、ブロン・スルメール（フランスの海岸）でなしたザメンホフの演説から引用すれば、
“Benata estu la tago, kaj granda kaj gloraj estu ĝiaj sekvoj!”

“此の日が祝福で満たされ、偉大なそして栄光に満たされる日が来るであろう。”

(5)、レトリカ・デマンドは、雄弁家が聴衆や敵対者に向つて問題を投げかけるのだが、返事をもらうことなど考えてもいないか、あるいは自分自身で答えを出すか、それとも拍手かつさい、呼び声、罵声といった形で彼等の答えがかえつて来るといった表現形式をいう。レトリカ・デマンドは文体に活気を与えるだけでなく、聴衆が実際に反応して来たとすれば、演説全体の雰囲気活気をもたらし、興奮をもたらすことになる。自己の演説の中で、ブルータスは幾つかの問題を聴衆に投げかけている。そして、彼は次のような質問でもつてその部分を終えてい

“*“Kiu el vi estas tiel malnobla, ke li ne amas sian patrujon? Se iu, li parolu, ĉar lin mi ofendis!”*”

「君たち諸君の中に、自分の祖国を愛さぬほど卑劣な者がいるだろうか、いれば名乗り出ても
 らいたい。その人にこそ私は罪を犯したのだ！」ここまで述べれば、聴衆は自ずと反応して来
 るであろう。しかしブルータスは少々まずいことには、答える時間を聴衆に与えようとして、
 実際に休止を設ける代りに、自分から次のように言っている。

.. "Mi pausas por la respondo..". 諸君の返事をしばらく待とう。その間、聴衆が反応して
 いるが、その結果はブルータスの最後の一節がなかった場合の反応より、かなり減ぜられたも
 のとなっている。アントニオはブルータスよりかなり優れた雄弁家であったが、彼もまた聴
 衆に向って幾つかの質問を投げかけている。彼は答えの返ってこない質問でもそのままにして
 おいただけでなく、彼は聴衆の心の中に自発的に生れて来る答えを、うまく引き出すことに成功
 している。(115)

(6)、コムニカツイオ(ラテン語で *communicatio*) は、雄弁家の与えた命題に、判事や敵対者
 が自ずと答えてくるように、あたかも彼等を雄弁家が説きさとすかのような質問形式の表現方
 法である。例えば、: "Kion, do, estus devinta fari la akuzito?"

「被告は何を、では、なさねばならなかったというのでありましょうか。」この答えは前の論
 証からして、被告が実際なしたことより他にやりようがなかったという事になるに違いない。

コムニカツイオの下では、弁護する事柄や被告人と雄弁家との一体化が生れる。例えば、弁護士が自分の依頼人のことを話す場合、我々を告訴しているといった言い方をする。

(7)、エヌメラツイオ（ラテン語で *enumeratio*）は、よく使われる思考比喻である。それは、前の論証をもう一度紹介するために、それ等を整理し、聴衆の心をより強く、効果的につかもうとして、前の論証の中心的な帰結を要約する方法である。一つの演説の中に、幾度もエヌメラツイオを使うことが出来る。幾つかの論証を含んだあらゆる文節の後に、それを成したり、一つの問題を各方面から論じた後に、それを成すのも賢明な策である。エヌメラツイオを効果的に活用しようとするれば、次の法則を順守する必要がある。(i)、要約は非常に簡潔なものであること。(ii)、論証を繰り返すことなく結果だけを、即ち論証の結論だけを述べること。(iii)、それ等が一つ一つ理論的に連続して並ぶように、一つの事実の次に、もう一つの事実がすぐに続くといった表現方法を用いること。(iv)、普遍的な考えや、最も力強い結論は、エヌメラツイオの最後にもっていくこと。

(8)、コンツエード（ラテン語で *concessio*）は、幾つかの点に於いて、あるいは幾つかの事実について、自分の敵対者に譲歩するといった思考比喻である。その事を黙認はしたけれども、自分自身はいささかも正当性を欠いてはいないのだという事を証明せんがためになすのである。

この比喩的表現は雄弁家の寛大さを示したり、聴衆の共感を得ようとする場合に効果がある。それは確かに中心的論証の枠内から逸脱しないためにも、くだらない事を論じて時間を浪費しないためにもうってつけの手法である。敵対者はしばしば、雄弁家の中心的論理をはぐらかそうとしたり、論戦の巷に巻き込もうとして枝葉末節の事柄を意図的に強調しようとするのだという事を覚えておく必要がある。

(9)、グラダツイオ（ラテン語で *gradatio*）は、複数の思考を語彙のもつ内的な力によって整理統合し、最も力強い思考を文章の最後に並べるといふようにして、順序を迫って話していく比喩的表現方法である。エヌメラツイオでは論証の中で展開された思想を基に、それを要約するといった結論の形をとる表現方法を説いたが、グラダツイオは要約ではなく、次に示すように思考の純然たる漸進的羅列である。

“*Zamenhof estis nobla en animo, granda en pensoj, genia en sia intuicio*”

(10)、インテルテンポはもう一つの考えに移行するために、思想展開を意図的に中断する方法

“ザメンホフは高潔な精神の持主であり、偉大な思索家であり、天才的な直感の持主………であった。”
 “グラダツイオは言葉の漸層的内容に理論的に依存する音声の段階的変化をもつて常に表現される。”

である。それは中断された思想をより鮮明なものにする。インテルテンポは不可欠なものである。しかし、演説の際中にそれをしよつちゆう用いたとすれば、聴衆を疲労させ、全演説を水泡に帰させてしまうことになる。インテルテンポは余り長くならないように特に気をつけなければならない。それは聴衆が雄弁家の中心的思想を忘れてしまうといった事態を引き起すかもしれないし、雄弁家自身でさえ、前の自分の考えに復帰し得ないといった因却の中に身をさらすことにもなるからである。

(11)、ヒペルボーロ (ギリシャ語で *hyperbole*) は、言葉の嚴密な意味からすれば、虚偽的なものであるが、文脈に助けられて、表現した思想に正当な価値を与える言葉を使って、物事を誇張する雄弁学上の比喩的表現である。ヒペルボーロの例を次に示そう。

.. *Li diris pli da mensogoj ol kiom da sableroj troviĝas sur la marbordo!* ..

彼は波打つ浜辺の砂の数にも匹敵するほど多くの、とてつもない嘘をついた。

(12)、リトート (ギリシャ語で *litotés*) は、ヒペルボーロの逆の表現である。それは思考を弱めた表現を用いているが、実際には口にしたことよりもより多くのものを理解させようという目的をもってなされる比喩的表現である。リトートは慎しみ深さを秘めた表現である。アントニオは引用した演説の中で、自分はブルータスよりも、更に巧妙な雄弁家であるにもかかわ

らず、*"Mi oratoro ne estas kiel Brutus."*

「私はもとより弁舌の士ではない。その点ブルータスの比ではない」と言っている。ザメンホフはフランスでの第一回世界大会で、*"Modesta estas nia kunveno,"*

「慎しみ深さに満された我々の集いがここにある」と言っているが、実際にはその重要性を強調したかったのである。自分の考えを彼は別の箇所で次のように言っている。

"Ni konsciu bone la tutan gravecon de la hodiaŭa tago."

「比の日の集いのあらゆる重要性を、我々は良く認識しておこうではないか」

雄弁学上の比喩的表現は、演説に官能的な悦びを与える。それは確かな事ではあるが、*"スパイスのききすぎた料理はまずくなる"*という事を忘れてはならない。比喩的表現の慎しみ深い活用や演説の内容にぴったりと合い、外的諸条件にも適合した活用のみが、ほんとうに優れたものである。どれだけの比喩的表現を用いたら良いのか、比喩的表現の中のどれを雄弁家は用いるべきなのか、という事は一概に言えない。それは個人の好みや選択にかかわる問題である。偉大な雄弁家は、雄弁学上の比喩的表現の適切な活用によって、更に偉大な雄弁家となっていくであろうし、下手な雄弁家は、もしそれ等の活用を誤るようなことでもあれば、更に悪い世評を買うことになるであろう。

三、三つの知的活動

雄弁家の知的活動は、記憶力、注意力、想像力の統合である。記憶力は過去に向って働く知力であり、注意力は現在を見つめる知力であり、想像力は未来を創造的に描き出す知力である。

すでに事前に充分練り上げられ、用意された演説原稿を読みあげるといったことをせずに、聴衆の前で自分の考えを自由に展開していくといった真の雄弁家について論じることになろう。

こういった雄弁家は演説の下準備に十分な時間をかけている。彼は自分の総ての知識を動員するとともに、テーマに精神を集中させ、事実や論証を整理し、それ等を秩序よく並べ、可能な比喩的表現を思索することによって、演説計画を練り上げていく。それと平行して後で述べるように、雄弁家はメモを作っておく。

記憶力は思想を精気に満ちた活気あるものとなさしめる働きをする。演説をなしている間、雄弁家は自分が言おうと心に決めておいた総ての事柄について思い出そうと努める。演説全体だけでなく、各々の演説周期を結ぶ論理的関連性だけでもなく、自分が表現しようとして心に決め

ておいた諸々の演説細部にも絶えず心を駆せている。記憶力は自分の教養がもたらしてくれる最も多彩な事実や偉大な知識の宝庫に雄弁家を導いてくれる。その中の一つが演説のために準備された具体的な資料に関する記憶である。それは非常に態動的なものである。もう一つの記憶は受動的で殆んど潜在的なものである。だが演説をなしている間、雄弁家の——知的活動全体を含めた——記憶力は緊張状態にあるから、必要とされる瞬間には、その受動的な面がすぐに活動を始める。それは潜在的な、だが失なわれているわけではない知識を見出し、演説の中で活用させる働きをする。

最も優れた雄弁家でさえ、記憶力は彼等を裏切る事がある。頭をハンマーでなぐられたかのように意識がもうろうとした状態に陥ってしまった雄弁家は、自分が何を言わんとしていたのかさえわからなくなってしまう。彼は数百あるいは数千という目の前にさらされている自分を意識してしまって、自分自身の声は聞えるが、まったく演説の続きを思い出せないといった状態に陥ってしまう。こうなってしまうえば、事態は最悪である。こういった状態を迎えてしまえば、もう最後に自分が言った言葉の「変形」をなすより他には、どのような解決策も見い出すことが出来ない。今いったばかりの考えを、彼は他の言葉や他の表現方法でもって言い換えてみることになる。それと同時に、彼はその後にくる演説の展開について思い起そうと全神経を集中させることになる。次の演説展開を思い出すまで、幾つもの「変形」をなさねばならな

い事もある。思い出してしまえば、すぐにでも中心的テーマに戻ることが出来るのだが、こうした努力をする間に、話しがテーマからかなりそれてしまつていたとすれば、雄弁家は一足跳びにそこに戻ることは出来ないから、幾つかの橋渡し言葉をを用いて、少しずつ上品にもとの思考の流れに聴衆を導いてゆく必要がある。最も大切な事は、話しの筋道のそういった裂け目に聴衆が気付くことを避けねばならないことである。雄弁家が真に偉大な雄弁家であれば、聴衆は——幾人かの経験者を除いて——決して、その事に気付く事はないであろう。忘失という泥沼の瞬間に、雄弁家がどれ程の精神的苦悩を味わつたのかという事等、聴衆は露ほども決して知り得ないであろう。

記憶力を助けるために、演説の主要な箇所を抜き書きしたメモを用いる。記憶が雄弁家を裏切るような事が起つた時、控え目な視線をメモに向けることが出来る。後に続く総ての思想展開を思い出すためには、たった一つの語彙を見るだけで十分である。メモは雄弁家に不可欠の安心感を与えてくれる。記憶が自分を裏切るような事がもしあるとしても、メモが自分を救つてくれるであろうという意識が、記憶力をうまく働かせる役目を果してくれる。メモが自分の前の机の上にあるとか、演台の上にある、または自分の手の中にあるといった意識を持った彼は、それを全く見る必要がない。メモをポケットにしまい込んだ雄弁家は、それを殆んど活用することが出来ない。しかし、それがあつたという事実だけで雄弁家に不可欠の安心感を与え

てくれる。

注意力は現在を見つめる知力である。演説の間、雄弁家は自分の周囲の総てを見守っていないなければならない。聴衆を見渡しながら、聴衆はたして自分の話しを聴いているのか、反応が生じる程に聴衆は演説について来ているのか、聴衆は話し of の主旨に賛同しているのか、それともそうではないのか、自分をうまく理解してくれているのかどうかという事を見守っていないなければならない。こうした確認をして始めて、彼は自分の考えをうまく理解させるために、自分の考えを拡大していけるし、聴衆がすでに話しの内容を汲み取ってしまっていることがわかれれば、その部分を省略することも出来る。

聴衆が論証の重苦しさのために、あるいはもつと他の原因によつて疲労をもようして来たとすれば、雄弁家はインテルテンポを用いたり、適切な小話しや気のきいたしゃれを持ち出した、あるいはこれと同等の方法でもつて聴衆の心を揺さぶる必要がある。聴衆の中の一人が、或る種の警句を――友好的なあるいは敵意に満ちた――を成したとすれば、雄弁家はそれに注目し、反応すべきか否か、反応するとすればどのように反応すべきであるかをすぐに決めなければならない。

注意力は具体的な周囲の条件に適合した演説の手法やスタイルを創り出す手助けとなるから、彼は自分が話しをしている周囲の条件にぴったり合った自分の音声や身振り、あるいは姿勢を調整する事が出来る。

聴衆を前にして話しをしている多くの雄弁家は、注意力を活用することを知らない。精神を集中しようとして、彼は特定の物体——絵やグラス、窓、柱、壁、その他ありとあらゆる物体——に無意識に視線をもっていく。時には一人の特定の人だけに注意力を傾ける。彼等は自分の声を聞いてはいるが、聴衆の警句には耳をかそうともしない。彼等は自分自身に聴き入ってしまつて、聴衆が退屈しているのかどうかという事には目を止めようとしめない。

これではどうしようもない。雄弁家は特定の物体や特定の人を時折、見つめることがあるにしても、聴衆の側に起っている総ての事柄に注意力を注がなければならぬ。雄弁家が総ての聴衆を——自分自身、聴衆と一緒に——熱狂させてしまうほどにまで持ち上げることに成功した最も興奮した部分にだけ、注意力がぞんざいになる。その時にはそれはもう必要なものではなくなっている。自分の言葉や思考によつて陶醉させられ、強い恍惚の中で一体となつてしまつた聴衆と雄弁家は、激しく突進しようとする。このような状態を創り出してしまえば、もう雄弁火山の溶岩が多少、右へ流れようが、左へ流れようがたいした問題ではない。

想像力は未來を創造的に創り出す思考力である。それは雄弁家の非常に重要な知的要素でもある。彼は前もって自分の準備した演説内容を思い出すだけでなく、言葉を口にするよりも前に、頭の中にはつきりと思考を形づくらなければならない。雄弁家は自己の知性の中に總ての文章を呼び起し、後にそれを現実化していく。一つの文章をしゃべっている間には、もう次の文章を思考している。もしそうしなかったとすれば、意図していなかった方向へと話しがそれてしまつて、どうしようもなくなつてしまう。不慣れた雄弁家には實際起り得る事である。この事は文章を誤つて始めたとすれば、文法上の観点からうまく文章をしめくくる事の出来ない幾つかの言語に於いて特に言えることである。すでに解析したように、エスペラントはこの事に関しても適切な言語である。それは語彙を鮮明にしたり、語彙を弱めるために思つた場所に特定の語彙を意識的に配置し得る幅広い可能性をもっているだけではない。エスペラントの語順に関する大きな自由度は、偶然に、誤つて文章を始めたとしても、最後まで満足し得る内容でもって文章を締めくくることを容易にしている。

想像力は演説のあらゆる部分を、はつきりと見通す可能性を雄弁家に与えている。例えば、演説の際中に或る歴史的事件を急に思い出し、それを自分の演説の中に取り入れてみたいといった場合、彼の想像力は、必要とするあらゆる細部をも含めた總ての事柄を、心の中に呼び起さなければならぬ。もし重要な細部が欠けていることがわかれば、その話しはあきらめるべ

きである。総ての事柄が、自分の心の中に新鮮な形でよみがえつて来たり、それを成した場合、聴衆の側に良い効果が生れて来ると予測し得た時にのみ、その事について話しを始めることが出来る。

多くの人達はこの能力を欠いている。この広い世界の中に、どれ程の場所で、どれ程の人達が、小話しやウィットのかいた話しをしていることであろうか。少し話しをすればすぐにもまごついてしまい、その後が続かない。もう一度話しを始めるのだがすぐにも行きずまってしまふといった人達がいる。この人達は話しを総てを見通す能力がなく、話しの全体を描くといった能力を欠いているからである。だから、どこで話しを終えるのか、どのようにして話しを締め括つたらよいのかという事を知らずに話しを始めている。想像力の欠けたこの種の話しは、友達の場合等では余興でもある。しかし優れた雄弁家にとってそれはあつてはならないことである。雄弁家は自分はどこへ行くのか、どういった目的をもつてそこへ行くのかという事を、事細かに知らなければならない。想像力は彼に道標を与えるであろう。

記憶力、注意力、想像力は同時に活動する。これ等は雄弁家の知的活動の三位一体をなしている。この三位一体は大きな知的緊張を必要とする。それは雄弁家の疲労の主たる原因でもある。演説の後、雄弁家は常に疲れをもよふ。活気に満ちたものであればあるほど、洗練され

たやさしい言葉で話せば話すほど、彼の疲れはひどいものとなる。聴衆はとても早く流暢に話をした雄弁家が、下手なとつとつと話しをする雄弁家よりも、よほど疲れるといふ事など考えてもみない。難かしく話しをするよりも、易しく話しをする方がずっと難しいのである。

優れた演説をなすために、雄弁家は十分な下準備をなし、うまく記憶力を用い、注意深く観察し、自分の想像力を最大限に活動させなければならない。

(114)、付録、ブルータスの演説を参照の事

(115)、付録、ブルータスの演説及び、アントニオの演説を参照の事

第十一章

雄弁家の倫理的要素

倫理の原則に無関心でいて、優れた雄弁家となる事が出来るであろうか。演説は倫理の確かな要求に叶ったものでなければならぬのだろうか。公的、私的生活を含めて雄弁家は特定の行動規範に従わなければならないのであろうか。

これ等の正当な疑問に対して、そうあらねばならないと答えたとすれば、どういった倫理に、どういった行動規範に雄弁家は意を用いなければならないのかといった新たな疑問が湧いて来る。

倫理という語彙は多重の意味をもっている。第一にそれは善悪の概念の上に成り立つ行動を支配している法則の総てを意味している。「善悪」の概念の相対性は、倫理を相対的なものになっている。だから倫理上の法則は、時代、時代によっても、社会形態の違いによっても、社会階層の違いによっても様々に変化している。奴隷制度を基盤とする社会にあって善だとされる、

即ち道德的だとされていることが、奴隷制度の放逐に成功した社会では悪であり、非道德的なことになる。奴隷制度を基盤として理想社会を説いたプラトンの思想は、善悪についてのその時代の概念といった観点より見れば、道義性を否定することは出来ない。しかし、今日の概念の観点よりすれば、奴隷制度を擁護したり、そのために活動したりすることは非道德的である。同一の国家に於いてさえ、道德についての概念は、最も強力な団体が自分達の倫理規範を普遍的なものとして設けることに成功はしているものの、総ての階層や総ての社会の中で同一ではない。

倫理という語彙は、善悪についての概念に根ざした行動の原理や法則を与えたり、研究したりする哲学の一部をも意味している。哲学がその根本基調の中に実在する一般社会形態を反映しているとしても、同時代の哲学者達でさえ、お互いに非常に異なる自分達の概念をもっている。哲学の概念は社会帰属によって大部分条件づけられてはいるが、他の社会的な、あるいは個人的な要素によってもまた制約されている。だから、デモクリトス(Demokritos)やヘラクレイトス(Herakleitos)の倫理はエンペドクレスや(Empedokles)やピタゴラス(Pythagoras)の倫理と全く同一ではない。ソクラテス(Sokrates)やプラトン(Platon)のアリストテレス(Aristoteles)ソフィスト達、エピクロス(Epikuros)といったギリシャの哲学者達の倫理上の各概念は、お互いに非常に異っていた。こゝにはデカルト(Descartes)ホッブス(Hobbes)スピノザ(Spinoza)

カント (Kant) ベンサム (Bentham) スチュアート・ミル (Stuart Mill) スペンサー (Spencer) ヘル (Hegel) マルクス (Marx) といった偉大な哲学者達の諸倫理概念に触れる箇所ではないが、彼等の倫理上の概念は、非常に異なっているということだけを述べておこう。

もう一つ、倫理という語彙は、特定の哲学学派に限定された行動規範の実践的活用という意味も含んでいる。この意味で用いる場合、一般には享楽主義とか禁欲主義、精神主義といった倫理や行動を言っているのである。

これ等の多様性や変化の中にあつて、では、どれが雄弁家の倫理なのであろうか。どのような倫理的要素をもたなければならないというのであろうか。

雄弁学の観点から見たそれ等に関する規範といったものは存在しないし、在り得べきもない。あらゆる人達のように雄弁家も特定の時代に生き、特定の社会集団に属し、自分自身の個性を持っている。このことから、雄弁家は自分自身の世界観や善悪についての自己の概念、自分自身のモラルを持っている。

諸環境や諸条件の中で、異なるそれ等の哲学概念の外にあつて、あらゆる社会やあらゆる時

代の中にあつても変らない二つの倫理的要素を、総ての雄弁家は必ず身につけていなければならぬ。それは実直と勇氣である。

一、実直

実直とは雄弁家が与えられたテーマについて、熱心に、説得力をもつて話しをしたり、自分の思想の正当性を知覚させるということだけではない。それは演説の中で自分が述べた思想を体现することを求めている。まさにその事が、ただ他人の情熱をかきたてるだけで、自分の述べたことと反対のことをしたり、反対の行動を自分自身とっているありふれた扇動政治家や偽善者、詐欺師と雄弁家とをはつきりと区別している点である。

聴衆に向つて話しをしながら、或る目的のために犠牲を聴衆に求めるが、彼自身は同じ目的のために何の犠牲も払おうとはしない人達がいる。もう一方の人達は、演説の中で、自由、平等、公正のために戦うことを力説しておきながら、自分達の生活の中では自由でもなく、公正でもなく、自分の同志達とも平等にふるまおうともしない。これ等の人達は眞の雄弁家ではな

い。それは彼等に雄弁家として不可欠の道義性・実直さが欠けているからである。自分の行動をもってするのではなく、言葉をもって物事の立脚点を正当化することは実直さを欠くことになる。

雄弁家の実直さとは、だから或る種の抽象的な実直さでもなく、あらゆる哲学学派によって系統だてられた実直さでもなく、まさに雄弁家、その人自身に体现された実直さである。彼の言葉は、全く無条件に彼の行動に反映されねばならない。この調和さえあれば、例え彼の思想が一部の聴衆の気に入らぬものであったり、彼の立脚点の一部の社会では悪であり、不当なものとして考えられていたとしても、その雄弁家は実直さをもって行動しているのである。

ここでは演説自身の道義性について論じようというのではない。非道德的演説、即ち特定の時代に於いて、あらゆる社会階層の大多数の民衆によって非道德的だとされる演説は、公的演説として全く成り立つものではない。この種の演説について雄弁学は全く関与していない。雄弁学は少くとも、或るかなり大きな社会集団の中で、その内容や目的から見て、倫理に叶ったものとして考えられている演説について論じている。雄弁家の実直さとは、倫理上の観点より見た優れた演説の内容に、雄弁家の行動が叶っていることを言う。

この種の実直さとはほんとうに可能なのであろうか。例えば、大罪人を弁護している弁護士は、この要求に叶っているものであろうか。

一見して、それは可能ではないかに見える。事実を表面的に見たとすれば、罪人を擁護することは、彼の罪を容認することを意味するから、偽善さをもって、非道義的に行動することを意味すると考えがちである。

所が、もう少し深く掘り下げた見方をすれば、ほんの少しの善良さも持ち合せていないといった罪人はいないのだという事がわかって来る。罪についての概念は、法律上の罪の規定、罰則の規定といった二つの要素から成りたっている。このようにして定義づけられない罪は存在しない。罪の規定は、誰れが人を殺害したのかというように、常に厳密で、恒久的であり、不変なものである。罰則の規定は、X年からY年までの禁固刑をもって罰するというように、常に不明瞭で、不定であり、変化に富んでいる。どうしてなのであろうか。それは罪自身の数多くの外的条件や犯罪者の数多くの外的要因が、罪に微妙な軽重の違いを与えているということから来ている。或る人の具体的な行為が、法律上からは罪として断定され得るものであったとしても、その外的要因から見て、罪を罪として罰することが出来ないといった事があり得るからである。人間の殺害は今日のあらゆる法体系から見て罪である。しかし、精神異状者がそれ

をなしたり、あるいはそれを危急の際に、自己防衛としてなさねばならなかったとすれば、その殺害はもう罪ではない。端的に言えば、数多くの外的要因や、実際の外的条件が罪としての或る行為の判定に大きな影響力を与えているという事は明らかである。

弁護士としての雄弁家の課題は、罪を擁護することではなく、被告を擁護することである。

裁判官の前には、なされた行為（即ち罪）や行為者の全人格がある。検察官の義務が、罪の要因を行為の中に見い出すことであるとすれば、弁護士の任務は、同じ行為の中に罪を締め出す要因を見つけ出したり、あるいはそれを緩和する要因を見い出すことである。これは高度な道義的任務である。それは公正な、正しい裁判を可能ならしめるものである。罪を道義的に罰するという事は、不正に告訴された人を、道義的にその罪から解き放つ手助けを出来るだけなしたり、余りにも苛酷に著せられた罪を柔らげる手助けをなすことである。

雄弁家の実直には、もう一つの要素・誠実さを内含している。

総て、最も古典的な雄弁学上の法則に則り、最も美しい句調でなされているのだけでも、その内容は偽りに満ちているといった演説をなす偉大な雄弁家はいない。出来得る限り大きな効果を演説に与えようとして、あらゆる雄弁学上の可能性を研究しようとする雄弁家の努力は、

もしその努力が真理に貢献しようとしてなされるものであれば、高尚なものである。逆に、偽善者が虚偽の種をまくために雄弁学上の技術を活用しようというのであれば、彼の行為は偽善である。これ等の人達は自分の聴衆を一度か二度騙すことには成功する。演説を自分のものとして知覚せずに、偽善を意識的に述べたてており、彼の主張と異なつた行為を彼がなしているという事に気づけば、聴衆は早晩、彼の思想を激怒をもって捨て去るであらう。こうなつてしまえば、例え、彼が真実をもって話しをしたとしても、あるいは真理を説いてみたとしても、もう人々は彼を信じないであらう。雄弁家の偽善は、演説の死活を意味している。

雄弁家の誠実さについての問題に触れてみたが、我々は、今ここでもう一度、真理が相対的なものであり、それはあらゆる分野の人間の知識の発展水準に依存しているだけでなく、それは同時代の社会集団の間にあつても、かなりの違いがあるという事を述べないわけにはいかない。

相対性を内に秘めた真理は、その内にある対立する二つの面、テーゼとアンチテーゼの合成である。一つの演説の中で、総ての問題を照らし出そうとすれば、そのあらゆる側面、テーゼとアンチテーゼの合成を照し出す努力をしなければならない。真理を見い出そうとして、複数の雄弁家が、同一のテーマについて論じ合う討論会等では、一方の雄弁家が一つの面を強調し、

もう一方の雄弁家は他の面から論じ合う。この場合、なされた弁舌の総てが、真理を提示している。だから、この最終的な真理に寄与した総ての雄弁家達は、例え、彼が真理の一部分であったり、真理のほんの断片だけしか述べていなかったとしても、誠実に行動したことになるのである。この意味に於いて、人々は雄弁家の誠実さというものを理解しなければならない。

雄弁家の実直さは、語彙の通俗的意味に於ける実直さと同一のものではない。自分達の社会集団の中の現実的な倫理の観点より見て、私生活の中では実直であるかもしれないが、雄弁家の実直さを欠いている場合がある。例えば、聴衆に向つて国際語の学習を呼びかけているのだが、自分は全くそれを知らなかったり、知っていたとしても、ほんの少しであつたとすれば、彼や彼女は私的生活では実直であつたにしても、雄弁家の実直さを欠いている。この欠除は、演説の価値を縮小させ、全く無価値なものにさえしてしまうのである。

重要な国際会議の席上で、出席者の一人がIALA（国際補助語協会）の計画言語について、かなり流暢に、聡明さをもつて話しをした。そして、この会議が自分のテーゼに叶つた好意的な決議をなすように要望した。その時、聴衆の中の一人が立つて、雄弁家に「あなた自身か、又は他の誰れでもよろしいが、IALAの四つの計画言語の中の少くとも一つを、充分に知っておられるでしょうか。」と質問した。雄弁家は困つてしまつて、自分も、自分以外の他の誰れもこの計画言語の内容をよく知らないのだという事を、打ち明けなければならなかつた。この

事が、他のあらゆるどんな事よりも、決定的に全演説を死滅さしてしまった。

雄弁家の実直さは、従つて、総ての倫理概念の観点より見て、不可欠な要素というだけでなく、演説を成功へと導く重要な要素でもある。

二、 勇 気

総ての雄弁家のもう一つの資質は勇氣である。それは語彙の通常の意味の勇氣とは何の共通性も持ち合せない特別な雄弁家の勇氣である。日常生活の中では、とても勇氣のある人だが、雄弁家としての勇氣を持たない人達がいる。又逆に、日常生活の中ではそれほど勇氣ある人とは思えないのだが、偉大な雄弁家の勇氣を持った人がある。

戦場で勇敢に戦う兵士、危険にさらされた吾が子を護ろうとする雄々しい父、おぼれかけた人を救うために河にとび込む勇氣ある人、競技場で勇敢に闘う若者、これ等総ての人達は、手段は違つていても明らかに勇氣ある人達である。しかし、彼等が雄弁家としての勇氣を持つて

いるということを意味しているわけではない。他の分野で活躍するこうした勇氣ある人達でも、聴衆を前にして話しをする場面に直面した際、まごついてしまつて、その後の言葉が続かない、ただ同じ言葉を繰り返しているといったことがよくある。

熱狂した聴衆の前に導びかれて来た英雄が、その場で最もひ弱な面を露呈してしまつたといった事が、どれ程多くあつたであらうか。話しをしようという彼の意志に反して、ただ何だかわからない、とりとめもない言葉を訥々としやべる事しか出来ない。あるいはたつた一語しかしゃべれなくて、群集の前で、絶望的に、死を前にした既決囚のようにただ茫然と立ちすくんでしまい、彼の頭脳は完全に機能を停止してしまつているといったことさえある。

私的な会話では、流暢に、しかも雄弁に話しをする人達でも、雄弁家の勇氣が欠除しているために、聴衆を前にして話しをすることが出来ないことがある。晩餐会や友人の集いこれ等と同等の催しの席で、小話しやウィットのきいた話しをして会合を和める人達がいる。また、このような催しの席上で、諸々の文学や政治、哲学、その他のあらゆる問題について自分の考えを正々堂々と發展させ得る人達がいる。会合は円滑に進み、彼は坐つたまま和やかに話しをしている。しかし、その同じ会合で、同じ聴衆を前にして、同じテーマで、そういった私的雄弁家が立つて話しをしなければならなくなつたり、他の人が今から彼が話しを始めますと新たに

告げたとすれば、急に言葉をつまらせ、まったく話せなくなったり、少くとも私的な時のように雄弁には話しが出来ないといった事がある。その原因は、雄弁家の勇気が欠除しているからである。

大きな心理的变化が、演説の開始に先だつて、すでに雄弁家の内部に起っている。話し手はどぎまぎし、彼の神経は昂ぶり、心は押しひしがれて来る。演説が重要なものであればある程、心理的震えはますます強くなっていく。こうした心の動きは、多少の違いはあるにせよ總ての雄弁家につきものである。大衆を前にして話すことが日常茶飲事であるような雄弁家でさえ、それから解放たれる事は出来ない。そういった心理的震えが、数時間、時には演説を前にした幾日にも渡つて、雄弁家を責め苛む事がしばしばある。

演説の瞬間に、この心理的震えが色々な形で頭をもたげて来る。未熟な雄弁家は、手の震え（手をしっかり握りしめるために起る）や声の震えを隠すことが出来ない。彼の顔は神経症のしかめ面になっており、彼等の姿勢は、深い緊張をあらわにしている。舌は麻ひし、口唇が硬直化してしまつて、はつきりした音声が出せなくなっている。

重苦しい、苦悩の時は、雄弁家にのみ起つて来るのではない。それは聴衆の側にも起つて来

る。同情をよせない積りでも、こういった場合、どうしても同情の気持が湧いて来る。聴衆はどうにかして彼を助けたいと思ひ、彼を現実に取り戻そうと必死になり、体を動かしたり、がさがさ音をたてたり、………時には拍手かっさい等さえする。状勢を好転させようとしてやっているのである。時には何の助けにもならず、決定的な仕損じに終ることもある。所が、瞬間的なためらいの後に、雄弁家が自分自身を見出す事に成功したとすれば、すぐにも雰囲気は好転して来る。彼の音声は明瞭になり、彼の身振りは堅固なものとなつてゆき、聴衆は自由に呼吸し始める。

優れた雄弁家は、決して聴衆に自分の心理的震えを気付かれる事はない。聴衆の中の一人といへども、雄弁家の静寂の瞬間に、彼が声をつまらせ、まごつきあせり、どもりさえすることがあったかも知れないという深い心の動きを隠しているとは決して露ほども考えていない。全く單純に彼を信頼し、彼の演説に耳を傾け、彼の考えに従ひ、賛同してみたり、不満を面に出したりする。しかし、彼に懸念を抱くことはない。雄弁家と聴衆の間に、このようにして、これこそが大衆演説であるといったすばらしい会話を可能にさせる快い調和が創り出される。逆に、雄弁家に勇氣が欠除しており、聴衆がその事に気付き、或る種の心理的苛立ちが生じるようなことにでもなれば、この事があらゆる場合に雄弁家をひどく邪魔し、演説をぶち壊してしまうことにもなりかねないであらう。

この心理的震えは払拭し得るものなのであるか。雄弁家の勇氣を人々は自分のものとする
ことが出来るのであろうか。

心理的震えは、完全に決して払拭出来るものではない。現実には或る種の心理的震えを
常に問題にしており、それを普通、興奮とか感動という言葉で言い表している。ほんの少しの
心理的震えも経験したことがないといった雄弁家はいない。必ずや多少の心理的震えは持つて
いるものである。それは神経を興奮させ、頭脳の回転を速め、或る種の弱いエクスタシーの境
へと導いていく。これ等の総てが、彼の記憶力や注意力、想像力をうまく機能させるのに役立
っている。多少の心理的震えは、だから知性のあらゆる機能を動員させ、雄弁家を助ける働き
をする。それは危険なものではなく、有益なものである。それは効果的な心理的震えであり、
聴衆に気付かれることのない心理的震えであり、偉大な雄弁家の心理的震えである。それは決
して、雄弁家を混乱させたり、臆病にさせたり、麻痺させたりすることはない。

もう一つの心理的震え、即ち知性のあらゆる機能を麻痺させてしまう心理的震えは、非常に
危険なものである。こういった心理的震えは取り去らなければならない。雄弁学の学習、演説
の真剣できめ細かな下準備、自己内での論旨の繰り返し練習、論点の抜き書き、――これ等の
総てが、演説をなさうとしている人に、自分は演説を自分のものとしており、どういった不意

の心理的不法妨害も自分には起り得ないのだという意識を創り出す。この意識が、同時に、聴衆に対する彼の位置を不動のものにしている。雄弁家はどの聴衆よりも、よりよく物事を知っているのだという確信を持っている。この事が、勇気を生み出す不可欠の自信を創り出している。

心理的震えを取り去るもう一つの方法は、出来るだけ数多く練習することである。初心者自分の部屋で、あるいは人の見ていない場所で練習することである。大きな声を出して全演説を試みてみて、聴衆が自分の話しを聴いているのだと想像してみることである。多くの偉大な雄弁家達は、みんな最初のころそうしたのである。時には、自分の前に幾つもの椅子の列を作り、聴衆を自分の目の前に描き出そうと彼等は努力したのである。

最初は友人、同志、同僚達で作っている小さなサークルで演説をする。そして十分な経験を積んだ後に、若い雄弁家が、もう自分は十分な勇気を持っているという自信を得たならば、もっと多くの幅広い聴衆を相手にして話しをすることが出来るであろう。こういった実地の練習は、雄弁家の勇気をますます確固としたものにしていくであろうから、そのうち彼は不動のセキユリティをものにすることが出来る。

エスぺラントの運動に於いては、人々はソツイエートという素晴らしい練習の場を持っている。残念なことに、自分の意見を自由に口にして論ずる代りに、諸々の書物を読むだけに終わっていることがよくある。そこでは小話についての意見交換や旅行の感想、あらゆる催しの印象を述べるようにすべきである。そして、それは容易なことでもある。後に少しずつ、より大きな緊張を必要とする、より複雑なテーマに移行するようにすれば、典型的な演説がなせるように成るであろう。もしソツイエートの中に優れた雄弁家がいるとすれば、彼は助言をもって初心者を指導しなければならない。しかし、どうでもよい、枝葉末節のことにまで口をはさんで感情を害することが無いように留意しなければならない。自分自身によって反省したり、他人の批評を受け入れることによってのみ、彼等は上達する事が出来るのである。

あらゆる他の要素を兼ね備えていなければならないとはいえ、雄弁家の勇氣なくして、雄弁家足り得る事は出来ないのだという事を覚えておかなければならない。

第十二章

聴衆

演説は或る種の会話であるという事は、すでに述べておいた。総ての会話が成り立つためには、最低二人の人が必要である。この公的会話もまた、雄弁家と聴衆という二つの要素があつて始めて成立する。

自己の反射的な体の動きでもつて、演説の資質を高めるために、聴衆は人々が通常考えているよりも、より多くの貢献をしている。雄弁家の演説に際して、聴衆は彼を助けたり、妨害するだけでなく、自己の姿勢や自己の態度をもつて表現された思想を肉づけしたり、平凡なものとしたり、演説に調和をもたらしたりする。演説の中腹や終りに自ずと生れて来る拍手かっさいは、賛意を示すといった単なるサインではない。それは雄弁家に新鮮な勇気を与え、聴衆自身の熱情をかきたてる力となるものである。一方、一部の人達の抗議喚声や大多数の人達の抗議喚声は、雄弁家をおくびようにさせるだけでなく、それは全体の雰囲気硬直化させ、緊張したものにしまふ。

雄弁家と聴衆のこういった会話の中で、雄弁家は言葉や身振り、体全体でもって自分を表現しようとする。聴衆は諸々の方法で彼の考えに答えて来る。聴衆は賛同したり、拒絶したり、侮つてみたり、疑つてみたり、氷のように冷淡であつたり、あたかもうわずつたかのように法悦の境をさまよつてみたり……する。自分の感情や思考を聴衆は、拍手かつさいでもって、好意的な微笑や皮肉の微笑でもって、叫び声や嘆息といった警句、賛意や拒否を表す頭の動きでもって、居眠りや咳ばらいでもって、口笛を鳴らしたり、無作法な大きなあくびでもって表現する。

雄弁家が自己の演説でもって聴衆に影響を与えようとするれば、聴衆も自己の体の動きや反応をもつて、雄弁家に影響を与えようとする。最も優れた雄弁家であっても、程度の低い聴衆の前では何もなせなかつたり、成せても効果の薄いものとならざるを得ない。それ程偉大な雄弁家でなくとも、あらゆる面から彼を助ける優れた聴衆の前では、しばしば驚ろくべき成功をすることがある。演説の成功にとって、聴衆は第一級の意味をもっている。しかし、聴衆とは一体何なのであろうか。

聴衆とは演説を聴きに集まって来た人達の集団であると答えたでしょう。聴衆の概念を演説を聴きに集まって来た人達の単なる数に限定したとすれば、この定義は本質的に正しい。だが、

こうした公式的な概念は、雄弁学の要求を決して満足させることは出来ない。聴衆は数だけでなく、諸々の個人的資質や複数の外部環境に左右された自己固有の特質を持っている。聴衆という概念のまさにこの部分が、雄弁学を興味あるものになっている。

客観的に見れば、聴衆は聴き手の総てを形成している個人からなる集団である。その集団は自己固有の要素や特質を持った数多くの部分から成り立っている。出席者の中には、理解力の優れた人もいるし、鈍感な人もいる。彼等の中には高い教養の持主もいれば、それ程でもないといった教養の持主や全く教養の無い人も居る。話しのテーマを誰れも知らないこともあるし、知っていても数える程の人達だけであったり、または全部の人達が知っていることもある。活気や気質、年令等に関しても大きな違いが聴衆の間にある。それぞれの観点から聴衆をみれば、多くの個性から成り立っているという事がわかって来る。

聴衆が演説に参加している単なる人間の集団であるとすれば、聴衆の特質の総てを、何らかの方法で反映している或る数学的な中間を見出し得るはずである。例えば、聴衆の年令にふれる際、総ての出席者の年令を加えて、出席者の数でもって出席者の年令の和を割り、その出席者の平均年令は三十五才であるとか、三十才……であると言えるであろうか。

こういった観点より見て、聴衆の性格を割り出すというこの種の数学的解答は、まったくの誤りである。先ず第一に、特質の間にあるニュアンスの違いが、結論を引き出すことを不可能にしている。例え平均年令を算出できたとしても、同様の方法でもって聴衆の平均知性や平均教養を算出することは出来ない。数人のみの特殊な特質では、何一つ聴衆を変貌させることが出来ないこともあるが、聴衆の特質にとってそれが非常に決定的な役割を担うこともある。大人の会合に、大人に連れだつて参加している子供達は、聴衆の年令構成には何の意味もなさないが、幾人かの著名な人達の参加は、聴衆全体の水準を高めてくれる。

どのような数学的公式でさえ、聴衆の定義づけには役立ち得ないものである。知的特質や倫理的特質を数字でもって推し測る事は出来ない。

確かに聴衆の性格は、その内的構成によつてのみ定められるものではなく、諸々の外的環境によつても左右されるものである。聴衆の置かれた場所や時間は、聴衆の性格に多くの影響を与える。二〇〇人の聴衆といった場合でも、或る定められた場所に聴衆が居る場合と、そこと違つた別の定められた場所に居る場合とでは、雄弁学の観点より見た聴衆の性格は異つてゐる。両方とも同じ二〇〇人の聴衆について論じているのだが、会場の広さや外観、音響効果といったものが、聴衆の性格を変えている。一方、同じ二〇〇人であつて、全く同じ会場であつても、

聴衆の朝の反応の仕方と昼の反応の仕方、夜の反応の仕方とは異っているし、特定のテーマや特定の雄弁家に対しては、大変すばらしい反応を示すけれども、その他のテーマであったり、他の雄弁家に対しては悪質な面をさらけ出すことがある。

雄弁学の観点より見た聴衆は、従って、複数の要素から成り立っている複雑な概念である。これ等のあらゆる要素が結び合つて、聴衆の性格を結果的に作り出している。

一、物理的条件

聴衆は常に一定の場所に位置づけられている。それは講演会場や、劇場、映画館、学校といった屋内会場であつたり、公園、街頭といった野外であつたりする。聴衆は立つたままとか座つたままということもあるし、その数が数百であつたり、数千ということもある。また極く少数ということもある。

聴衆が何処に位置していようと、その数がどれ程のものであろうと、気持よく話しが聴ける

状態になければならない。屋内会場で演説がなされるのであれば、雄弁家は音響効果を調べておき、自分の声が後ろの人達にほど良い強さで聞えているかどうか確認しなければならない。可能であればメガホンの使用を避けるべきである。だが会場の広さや音響効果の面から、自分の声を総ての聴衆が聴き取れないかもしれないと見てとったならば、メガホンを使用してよい。大きな集会、特に野外での演説にはメガホンを使用する。雄弁家は演説の前に、それがうまく機能しているかどうかを確認しておかねばならない。演説の際中に、しばしば異様な音をメガホンが発することがある。雄弁家がすばらしい考えを展開している際に、少しでもそういった音が入れば、笑い声や私話が生れて来る。このことは演説を大いに妨害してしまう。メガホンの調整を怠らずに、常に最高の状態に保つことによって、それを避けねばならない。

聴衆は快適であらねばならない。これは聴衆が疲れない位置にあらねばならないという事を意味している。聴衆が座っている状態が最高である。そしてこの事は、常に可能である。例外の場合にだけ、聴衆は座る事が出来ない。将官の話しを兵士は立ったまま聴いている。同じように、大きな民衆の集会であつたり、追悼演説に際して、又はこれと同等の会合に於いて、人々は立ったままである。演説の性格自身からして、座って聴く事が出来ないのであれば、少くとも余り暑くもなく、余り寒くもならないように聴衆に対して気を使う必要がある。野外で演説をなす場合、夏であれば口陰であつたり、朝早く、又は夕方になすべきであり、冬であれば、

それと逆のことをなすべきである。この事が可能でないならば、可能な限り雄弁家は自分の演説を短かくすべきである。寒さや暑さ、風等によつて疲労した聴衆に向つて長い話しをするよりも、疲れを知らない聴衆に向つて短かく話しをする方が最善の策であるという事を覚えておかなければならない。

数多くの聴衆が、小さな会場に押し込められれば快適であるはずがない。一方、余りにも大きな会場は、雄弁家を不愉快にするだけでなく、相対的に数少ない聴衆をも不愉快にする。聴衆の数にうまく匹敵する会場に於いて始めて、最高の快適さを得ることが出来る。だから、それを予見することが出来れば、総ての人達が意に叶つた席を持てるような、どこにも空席のない、空席があつたとしても数える程しかないといった会場を準備しなければならない。心理学的観点より見て、その事は非常に重要である。あまりにも伽藍とした会場は、聴衆に空虚さを味あわせることになる。このような空席は確かな寒けを引き起し、個々の聴衆の融和を妨げ、聴衆の中に入つていこうとする雄弁家の気持を妨げるものである。聴き手の間にある隔りは、心理的にも彼等の間に隔りを創り出し、総ての人達がばらばらに反応してしまふから、自ずと一体とはなり得ないという結果を招くことになる。語彙の真の意味からする「聴衆」ではなく聴き手の「集団」となつてしまつた彼等は、拍手かっさいする勇氣もないし、おもいきつて非難する勇氣もない。

偶然にも、会場があまりにも広すぎるといった事が起れば、雄弁家は聴衆を前の席に座らせるようにするか、自分の周りに聴衆が集まって来るように声をかける。このようにすれば、少くとも演説の間だけでも、聴衆は背後の空席を忘れるであろう。

聴衆は他の原因がもつても、快適ではないといった事がある。会場で煙草を吸ってれば、煙草を吸わない人達是不快さを味わう。煙草を吸う人達は、煙草がすえないとなれば不愉快である。演説の間は煙草を吸えないというのは常識である。教会での説教、学士院や大学での学術講演、あるいは追悼演説、その他の厳肅な演説の間、決して人々は煙草を吸うことはない。しかし、国会や討論会、その他これと同等の会合に於いては、煙草を吸う習慣がある。原則的には演説が多少とも厳肅な性格を有していたり、雄弁家の個性や論題の品位、又は会場の氣風が禁煙を求めているのであれば、それを順守することが賢明である。だが、これ等の場合にも、愛煙家を忘れてはならない。演説が余りにも長時間に渡るものであったり、幾人もの雄弁家がつぎつぎに並んでいるのであれば、聴衆が多少の休息を得られたり、氣分を一新することが出来るように、短い休息の時間を設けるべきである。

会場は自己の三次元的広がりを持つていただけでなく、自己固有の氣風をも持つてゐる。会場の氣風が演説テーマに明らかに対立するものであったとすれば、聴衆は快適ではない。科学

的テーマでもって聴衆に話しをするのであれば、気楽な雰囲気のある会場に聴衆を集めるべきではない。同様に、科学アカデミーでもって、通俗的な内容の演説をすることは出来ない。

会場の気風は、会場の慣習的活用、その芸術的価値といった伝統によって創り出されている。確かにこの気風は会場が演説の内容にふさわしいとか、ふさわしくないといったことをなしている。それは雄弁家の人柄や演説のテーマ、催しの内容に関係なく会場を訪ずれる自己固有の聴衆を持つていているという事が原因となっている。一方、会場ではなく、雄弁家やテーマが聴衆を引きよせることがある。テーマや雄弁家の人柄が、会場の気風と調和しないために、演説が場違いの様相を呈するのであれば、聴衆は不愉快さを感じとるであろう。会場の趣きだけを通して入れてやって来た聴衆は、がっかりしてしまつて雄弁家に注意を払わなくなつてしまふ。テーマに興味を抱いてやって来た聴衆でも、会場が放つ気風と論旨が調和していないために不愉快さを味わう。テーマの価値、雄弁家の品位、催しの内容といったものが、会場の気風と完全に一致して始めて、聴衆は最もびつたりとした快適さを味わうことが出来る。

会場のもつそうした固有の気質に関係なく、あらゆる会場を演説の内容にふさわしい調和を生み出せるように整えることが出来る。演説の性格にあわせて、賑やかな、陰気な、いかめしい、戦場的な、あるいは厳肅なといった外観を会場にもたせることが出来る。

数多くの社会活動や文化活動は、自分達固有の色や旗を持っているから、演説を厳肅なものとするために、それ等をうまく活用することが出来る。

うまく、適当に整えられた会場は、演説にふさわしい雰囲気を作り出したり、演説に対する聴衆の心の準備に大きく貢献することが出来る。広場に設けられたたくさんの旗、会場の窓の上から吊り下げられた大きな布やつづれ織りの字幕、美しく飾りたてられた演壇、音楽や声楽といったこれ等の総ては、大きな民衆の集会等では適切な調和を創り出す。一方、黒いカーテン、肩から脇の下にかけて掛けられた黒いたすき状の布、数枚の控え目なシユロの葉、またはその国の慣例に従った他の青物といったものは、死者の追悼式等にはおちついた厳肅さをも出し出してくれる。万国旗よりも一回り大きなエスペラントの旗、花、青物、賛美歌の斉唱といったものは、国際色を強め、精神を高揚し、世界大会の厳肅な開会式にふさわしい雰囲気をもし出す。

会場の飾りつけは、あまり華美に流れないようにすべきである。最上の装飾は一切の装飾物を設けないことであるという事を覚えておかなければならない。格好の雰囲気を作り出そうとしても、会場が通常もっている装飾物を取り外すことが出来ないことがよくある。最も大切なことは、会場の外観が出来るだけ演説の性格に調和するようにすることである。これまで述べ

て来たように、この事に関しても、不調和や不均衡は非常に危険なものであり、演説を殺してしまうこともある。

聴衆の精神状態や演説の時間は、決して無視できない意味をもっている。人々が精神的に最も精気に満ちているのは朝であり、最も疲れているのは正午すぎである。だから、雄弁家が時間を設定しようとする場合は、正午すぎの時間を避けるようにしなければならない。

専門演説はほとんど午前中に行なわれている。教授は午前中に大学で講義している。聖職者は教会で午前中に説教している。弁護士は法廷で午前中に弁護している。だが、こうした専門演説を午后、あるいは夕方になさねばならないことがよくある。こうした場合には、出来るだけゆつくりと話しをするように心がけなければならない。演説が数時間にも渡って続くようであれば、最も重要な部分を午前中か、夕方になすようにする。非常に重要な訴訟の際には、弁護士は数時間というのではなく、幾日にも渡ってさえ弁論を続けることがある。こうした場合、雄弁家は最も大切な部分を選び出して、それを最も適切な時間帯の中でなすようにしなければならない。

専門演説ではなく、幅広い大衆を相手にしての演説を論ずるのであれば、夕方にそれをなす

ことが、最も効果的である。一日の労働から解放された人達の精神は、新鮮さを取り戻している。更に、会場の明るくて、美しい照明が、演説に向う人々の気持をよりふさわしいものになっている。もう一つには、多くの人達が出席することが可能となる点である。この規則も例外をもってはいるが、原則的には有効である。

二、知的水準

聴衆は自己の知的要素をもって、演説の資質に大きく貢献している。聴衆の知性の高さや一般教養や専門知識の深さは、演説の水準に決定的な意味をもっている。雄弁家が充実した話しをしたいと望むならば、聴衆の理解力に自分の話しを合わせるようにしなければならない。聴衆が高い教養を持っており、その演説に関連する知識を多く身につけているのであれば、雄弁家は自分の考えに最もぴったりとした語彙や専門用語を使って、自由に自分の考えを展開することが出来る。聴衆の教養が程度の低いものであり、話しの内容が聴衆とかけはなれたものであるとすれば、雄弁家は演説を簡略化し、複雑な思考を排除して最もありふれた言葉だけを用い、専門用語を解きほぐして説明しながら話しをしなければならない。こうすることによって始め

て、聴衆との間に、ささやかではあるが接触を得ることが出来る。あらゆる演説に際し、この事を得るために、雄弁家は文章の美しさや部分的にはあつても内容の資質を、多少犠牲にしなければならぬ。演説の中に深い思考が失なわれ、雄弁学上の比喩的表現が欠除し、自由な身振りが損なわれることになる。一方、文体は間違いなくぎこちないものとなるであらうし、雄弁家は使った言葉や述べた文章についてのきめ細かな説明を絶えずなさねばならなくなる。この事は演説の構築全体を、破壊してしまうことにもなる。雄弁学上の比喩的表現としてのインテルテンポは、最も基本的な説明を与えるために使われることになる。それはもう比喩的活用ではなく、邪魔者でさえある。しかし、それは演説の効果を減ずるものであつたにしても、演説を理解させるためには不可欠のものである。雄弁学上の比喩的表現を、総て使おうとすれば、それもまた、同じ運命を辿ることになる。

すでに述べたように、雄弁家は自己の知識を上げる努力を絶えずなさねばならない。そして、その事を彼は聴衆に要求することが出来る。聴衆の知的要素について述べる際も、原則的には同じ考え方をすることが出来る。しかし、この願望はささやかな願いにすぎないかもしれない。自己の欲するままに行動するのが聴衆であるから、雄弁家はそのことに関して何もなすことが出来ない。気に入らない聴衆であつても——特殊な場合を除いて——彼は話しを止めるわけにはい

かない。又聴衆を会場から追い出し、次の聴衆に取り換えることも出来ない。雄弁家は自分の話を聴きに集まって来た聴衆に対して話しをしなければならぬ。

では、どうしようもないのであろうか、聴衆の資質に関して何もなせないというのは本当であらうか。

そんな事はない。先ず第一に、専門的雄弁家は自己の専門テーマで話しをする場合、そのテーマの観点からかなり平準化された聴衆を持つてるのが普通である。法廷で話しをする弁護士は、自分の前に裁判官を、即ち、弁論の専門テーマに明るい同じ道の専門家を持つてゐる。

大学院で講演する科学者達は、自分とほぼ同じ教養を有する自己のパートナーに話しかけてゐる。大学生はかなりのレベルの似かよつた教養をもつてゐるから、その事が教授の仕事をかなり楽なものにしている。上官の話しを聴いてゐる兵士達も、教養や個人的な知性といったものからすれば、彼等の間にはかなりの隔りがあるとはいへ、兵士としての共通した面を持つてゐる。同じように、教会で神父の説教を聴いてゐる信者達は、教養の面からいへば、お互いに違ひをもつてはゐるものの、彼等は共通した信仰を持つて結ばれており、それが統一された均質の体制を作り出している。国会で演説している雄弁家は、自己の聴衆である代議士が、各種の党派に属しており、お互いにしばしば敵対し合う仲であるにも拘わらず、雄弁学の観点より

見て、十分に均質さを有する聴衆を前にして、自己の考えを展開している。演説の内容が、労働者の興味を引きつける経済問題や社会問題であるとすれば、労働者の組織や労働組合に加わっている人達で構成される聴衆の中には、大きな均一性が見られる。このことから、特定の文化活動や政治運動、その他これと同等の運動に携わっている聴衆を前にして、これ等の運動にふさわしいテーマで話しをする総ての雄弁家は、テーマに関する専門知識を有する聴衆を得ていると言える。

この場合、一般教養に関して、しばしば、聴衆の間に、とても大きな相違がみられることもあるが、なされるテーマにとって真に要求される専門教養の分野で、聴衆はかなり均一性を持っている。あらゆる場合に、この事が言え、それが雄弁家の仕事をかなり楽なものにしている。厳密な意味での専門演説について論じるのでなければ、範囲の選択、会場の選択、又は—更により効果を得るには—範囲と会場を併せた選択でもって、聴衆の構成によりよい影響をもたらすことが出来る。

特定の専門テーマで演説をなす場合、その分野の専門家にだけ通知するというようにして、範囲を一般には限定している。例えば、法律、医学、技術、哲学、その他これと同等のテーマ

でもってなされる演説は、法律家、医者、技術者、哲学者、といった限定された範囲の人達にだけ通知されている。

専門テーマが、あまり特殊なものでなかったり、幅広い聴衆に関心がもたれるものであったとすれば、それを幅広い層に知らせ、聴衆が雄弁家は何を論じようとしているかを、かなり明確に知ることが出来るようにしなければならない。雑誌の広告でもって、招待状によって、あるいはもつと他の方法でもって、大衆に知らせる必要がある。このようにして始めて、なされるテーマに特別の興味を抱く聴衆を招き寄せることが出来る。

会場の選択もまた、聴衆の構成にかなりの影響を与えている。特定の目的のために通常使われている会場で、演説がなされる場合、その事だけで、その会場をいつも訪ずれている聴衆が部分的にはあれ、集まって来るということがある。例えば、労働者の組織が経営している会場、大学の管轄下にある会場、または専門協会の有する会場で、演説が行なわれる場合、それ等の会場をしばしば訪ずれる労働者、教授あるいは学生、専門家といった人達が、聴衆の大部分を占めることになる。

範囲の選択と会場の選択を併せもって始めて、これ等の演説を理解することの出来るかなり

均一性をもった聴衆を得ることが出来る。

演説のテーマは非常に普遍的なものであってもよい。それは大衆のあらゆる階層に興味を抱かせるものとなるであろう。科学者、技術者、芸術家、作家、商人といった専門家の世界や労働者の世界に関連性を持つている国際語の問題も、こうしたテーマに属している。雄弁家に普遍的な話しをなすように無理強いする大変異質な聴衆をもつことは、危険を併うかもしれない。それを避けるために、雄弁家は自分がどんな話しをしたのか、どういった分野の人達を対象に話しをしたのか、どういった聴衆を相手にしたのかといった事を、きめ細かく認識しなければならぬ。自分の目的にはつきりとした認識をもった雄弁家は、範囲の選択と会場の選択を誤りなくすることが出来るから、望み通りの聴衆を得ることが出来る。

これまで述べて来た総ての事柄は、雄弁学上の観点より見て、大きな重要性を持っている。異質な聴衆よりも悪い聴衆はいない。無学ではあっても、均一性をもった聴衆であれば、異質な聴衆よりも優れている。残念なことに、この事に人々は殆んど意を用いなかったり、あるいは全く気付いてもない。だから、聴衆を相手にして話しをする能力を雄弁家が十分に持っているながら、演説を失敗に終らせるといった事がしばしばあるのである。演説の下準備をなす時のほんの少しの熱意やほんの少しの注意力が、大変に良い結果を招く、雄弁家、優れた雄弁家

は、聴衆の均一性を無視してはならない。

聴衆の言語知識は、彼等の一般教養や専門知識に相呼応している。従って、聴衆が出来るだけ幅広くて、深い知識を得てくれるようにといった願いを原則的には繰り返してみても、その事は聴衆の意志にまかすより他に道はない。聴衆の均一性は、言語の均一性にも表れて来ている。この事は彼等の母国語について述べた場合である。各々の聴衆の間にある一般教養の程度の差とか職業、その他の仕事の多様性は、言語上の異質さを引き起す。雄弁家と聴衆は、言語を介して交りを持っているのだから、雄弁家と聴衆の言語知識が、どれ程の重要性を担っているのかといった事は、特に強調しなくても明日である。そして、この事は疑う余地もない。聴衆が理解することが出来ないのであれば、雄弁家がどんなに素晴らしい表現を駆使して話しをしてみても、どんなに適切な比喩的表現を用いて話しをした所で、何の役にも立つものではない。

外国語について述べる場合、聴衆の言語知識の問題は、全く別の観点よりとらえられるものである。この場合の聴衆の言語知識は、彼等の一般教養や専門知識に相応していない。自己の母国語についての言語知識に比べ、外国語の言語知識は、著しく程度の低いのが普通である。聴衆の教養がかなり程度の高いものであっても、聴衆の外国語の教養は、非常に程度の低いものであるかもしれないし、一般に低いのが普通である。聴衆に向って、自己の母国語で話す雄

弁家でも、聴衆にとって彼の言葉が外国語であつたとすれば、聴衆に理解させるために、自己の表現方法を最大限に単純化しなければならない。この事は彼に大変困難な労働を強いることになり、総ての場合に演説の水準を程度の低いものとなさしめるであらう。外国語でやさしく話しをすることが出来なければ、その言葉でやさしく演説を聴き取る事は出来ない。言語の異国性は、演説を死滅させてしまう。それはその言語が雄弁家にとって外国語であつても、聴衆にとって外国語であつても、全く同様である。

国際語は外国語のそういった立場と同一ではない。第一に、それは総ての外国語よりも、母国の文学言語よりも大変易しい言葉である。第二に、それが「異国」のものであるとすれば、その「異国性」は雄弁家にとつても、聴衆にとつても同様である。雄弁家に国際語を完全に身につけるように要求したとすれば、聴衆にも同様に、それを身につけるように、あるいは国際語を少くとも容易に理解し得るようにと要求することが出来る。国際語を原則的に受け入れた総ての人達（エスペランチスト）は、その役割がレストランで一杯のビールを注文するためにあるのではなく、思考手段や人間の総ての活動分野の中での意志疎通手段として役立つものであるという事を認識しなければならない。残念ながら、国際語の多くの使用者達は、まだその本来の役割についての認識が足らずに、初心者知識といった限定された枠から一步も踏み出そうとしないで現状に甘んじている。一般のエスペランチストの言語水準が、少くとももう少

し現状よりも高まった時に、エスペラントの詩歌や国際語での学術文献、美文学、あるいはエスペラントの雄弁法といったものが、本来の形で力強く開花するであらう。聴衆が国際語を十分に身につけていなければ、雄弁家がエスペラントで自己のすばらしい考えを表現してみても、彼の考えに従っていくことは出来ないし、デリケートなニュアンスも味わうことは出来ない。雄弁家がエスペラントの演説を、雄弁に、しかも正確に出来るようになる事が必要である。時折エスペラントの雄弁家に、人々は「もっと早く話すように」と非難の声をあげることがあるが、通常、その事は真理ではない。真理は聴衆が「十分に余裕をもつて聴ける」ということである。

国際語の知識は、母国の文学言語の知識に匹敵するものでなければならぬ。エスペラントを話す総ての人達の一般教養や専門知識は、母国語の知識とほとんど同等のものを、国際語の知識に反映しなければならない。それはエスペラントの演説の大きな発展をもたらす前提条件の一つでもある。そして、それは語彙の通常の意味からして「異国のもの」ではないからである。

聴衆の相対的均一性がかなりのものであるとすれば、——相対的とは、聴衆の均一性が雄弁家の演説自体と関連性を有しているからである——我々は聴衆の特性をもつて研究してみる必要があらう。

このようにすれば、聴衆は相対的均一性をもつとはいえ、諸々の要素から成り立っているという事がわかって来る。雄弁家の任務は、聴衆を観察し、その意図を探り、その反応に注目して、聴衆の総ての人達を、意図した方向に導びくことの出来る幅広い道を見出すことである。この任務はとても難題である。だが、この難しい任務を果し得た雄弁家のみが真の雄弁家なのである。事前に準備した演説原稿を読み上げるといった人達は、聴衆を自由に観察することが出来ないし、例え、演説の中で時折、聴衆をかいま見ることが出来得たとしても、彼等は演説の確かな要求を満すことは出来ない。聴衆の前で、演説のあるべき姿を創り出す真の雄弁家のみが、聴衆の不意の要求にもすぐに応える事が出来るだけでなく、声なき反応にもすぐに応え得る能力を持っている。例えば、総ての聴衆が自分の考えを効果的に理解してしまっていると見てとったならば、その事にはもう深入りするのを避け、すぐにも次の思考へと移ることが出来る。しかし、聴衆の一部が、自分を理解していないという事に気づけば、自分の考えを理解させるために、新しい文章をつけ加えることになる。或る考えが聴き手を大変熱狂させ得るものであると見てとったり、その考えが演説のより大きな展開への重要な跳躍台であることに気付けば、自分が前に考えていたよりも幅広くその事に触れることが出来る。

聴衆に語りかけると同時に、聴衆を見守り続けていくならば、聴衆の知的水準にぴったりと応え得る、最もふさわしい軌道を見い出すであろう。演説の導入部では、特に注意深く聴衆を

觀察しなければならぬ。必要とあらば、演説の最も適切な尺度を見い出すために、導入部を多少長める事も必要である。後に、彼がその中間的軌道を見い出してしまえば、それからあまり遠ざからないように、自己の考えを展開していけるであらう。彼の考えは聴衆と深く結びついてゆき、知らず知らずのうちに彼等は一体となっていく。積極的な意味でも、消極的な意味に於いても強力な特別の個性を有する一部の人達でさえ、集団に巻き込まれ、集団の中に溶け込んでしまう。そうなってしまう時には、雄弁家はもう個別の人達を自分の前にしているのではなく、たった一人の人物、聴衆を前にしているのである。その人達に対して自分の考えを語り、その人達に対して自分の思想を説いて聴かせるのである。一部の人達の警句や反発、ざわめきといった特別な原因がある時にだけ、例外的に彼は個人や小集団に向って語りかけることになる。

演説の中間的軌道、中間的水準といったものは、数学的に割り出された聴衆の中間的知的水準に相応するものではなく、先に述べた幾つかの要素がそれを決定するのである。それを決めるもう一つの要素が重要人物であり、有名人物である。

聴衆の中には必ずといってよい程、いつも政治的に重要な地位にある人物であるとか、特定の科学、技術、文化、芸術あるいはもつと他の分野での重要な役割を担っている人達がいる。

どのような人達が名士であるのかといった事は、一概に規定出来るものではない。一部の人達はあらゆる場合に名士であるが、その他の人達は特定の社会の中でのみ名士である。雄弁学上の観点より見て、具体的なテーマをもった演説をなす場合、それに参加している人物の社会的知名度、政治的地位といったものが大きな意味を持っている。例えば、聴衆が労働者によって構成されていたり、演説が労働問題に関係したものであるとすれば、そこに出席している労働者の指導者達は名士である。しかし、この指導者達が、純粹に専門的テーマを論ずる科学者達の会合に出席していたとしても、その時にはもう名士ではない。一方、或る著名な言語学者が、言語学を論じる演説会場に招かれたとすれば名士となるけれども、その同じ言語学者が労働者の会合に出席していたとしても、その時にはもう名士ではない。

名士達は普通、最前列に座っている。彼等を注目しているのは雄弁家だけではなく、総ての聴衆もそうである。聴衆は雄弁家の演説に聴き入っているだけではなく、名士達の反応にも注目している。彼等の好意的な微笑やうなずき、拍手かっさいといったものは、雄弁家を大いに勇気づけるものである。彼等は彼の主張の正当性、正確度、真実性に対する証人でもある。彼の主張に対する名士達の拒否反応は、雄弁家を大いに妨げるものである。

優れた雄弁家は、名士達の重要性をなおざりにはしない。彼等が自分の立場の強化に大いに

貢獻してくれるということをよく知っているからである。だから、雄弁家は総ての聴衆に向つて話しをしているのだけれども、自己の演説に対して重要性をもった人達が座っている場所に時々、頭を向けるのである。彼等の顔を直視することによって、自分の主張に対する彼等の賛意を汲み取ろうとする。彼等が賛意を示していると見てとつた聴衆は、自分達が雄弁家の論証を完全に理解することが出来なかつたとしても、重要人物や有名人達が彼に賛意を示しているといった事から、聴衆は彼の考えを受け入れるに至るのである。この事からもまた、雄弁家は演説の最も重要な部分に際して、名士達の方へ原則的に体を向けなければならない。

名士達は時折、自己の体でもつて懷疑や拒否反応を示すことがある。この場合には賛同が得られるまで、自己の論証を強化していかなければならない。名士達が雄弁家に対してあくまで敵対してくるのであれば、彼等を見捨てざるべきである。このようになせば、彼等は彼の演説に対して無感心を装うようになって来る。そうやっても意図した効果が得られなければ、雄弁家が自己の論旨を曲げることなく、考えを貫きたいと考えれば考えるほど、彼等のテーゼや彼等の思想の直接的攻撃にさらされ、抜きさしならぬはめに陥いることになる。こうなつてしまえば演説の雰囲気は陰悪なものとなつてしまう。雄弁家と彼の見解に異議を唱へる有識者との間に壮烈な戦いが始まる。勝利か敗北かは多くの周囲の事情によつても決るが、何はともあれ雄弁家の腕前にかかつてゐる。どのような場合であれ、彼は原則的に最も強い立場にある。立つ

て話しをしている者は、座って話しを聴いている者よりも常に強い立場にある。入念に下準備をなし、まじめに論旨を練り上げてきた者は、そのようになさなかつた者よりも常に強い立場にある。この事について、よりよく知っている者もまた名士達である。雄弁家が彼等に好意的な視線を投げかければ、洗練された弁論の主旨や誠実な弁論の主旨の展開といったものにより、彼等は通常、常に賛意を示してくる。最悪の場合、例えば、演説自体、あるいは演説の一部が彼等の意にそぐはないものであつたとしても、彼等は無関心を装うだけである。ほんのまれにはあるが、雄弁家が彼等を攻撃したり、笑ひものにしたり、彼等の感情を害するような態度を示すような事があれば、彼等は自分達の不満を露骨に面に表し、演説自体を危険に陥し入れることにもなる。

単に出席しているだけに見える名士達は、我々が見て来たように、自己の体でもって聴衆の知的水準を決める決定要素に積極的に参加している。彼等の数が多ければ多い程、演説水準を決定する彼等の役割はより重要性を帯びて来る。演説の水準やその部分的な水準は、多くの聴衆を除いた専ら、有識者の知的水準に適合するものである。雄弁家が述べている思想を、重要な尊敬すべき著名な人達が賛同しているといった事から、聴衆は自己の水準を高めようと努力し、演説自体や特に、その主張点を理解しようと努め、結論をうけ入れるに至るのである。

三、倫理的資質

知性の観点より見た聴衆の均一性は、倫理的観点より見た聴衆の均一性とも符号するのが普通である。総ての場合、総ての細部に渡つてというのではないが、主として原則的には少くとも一致するものである。

雄弁家の倫理的概念と調和する聴衆の倫理的均一性は、雄弁家の立場を楽なものにしている。この場合、彼は誤解を招くといった心理的恐怖に災いされることなく、倫理概念に関する語彙を自由に使いこなすことが出来る。総ての聴衆によつて異論なく受け入れられた倫理的原則の枠内で、彼は自己の考えを發展させていく。

宗教教団に属している聴衆の中には、常に高度な倫理的均一性が見られる。総ての宗教は自己固有の倫理を持っている。総ての宗教、あるいは幾つかの宗教の倫理的原則に似かよつた所があつたり、あるいは同一のものであつたにしても、大きな相違がその中には多岐に渡つて織りなされている。宗教上の倫理規則は、異論のはさむ余地のないドグマの性格を持っている。この教理を受け入れた雄弁家が、同一の教理をすなおに受け入れている聴衆を相手に話すので

あれば、倫理的観点より見て楽な任務を担っているといえる。聴衆の倫理的教理を受け入れない雄弁家は、倫理自身に直接触れないテーマでもって話しをする場合でも、一般に受け入れられた幅広い倫理の枠内で自己の理想を展開するのであれば、思慮深く行動しなければならぬ。このようにすれば、自己の良心とも、聴衆の良心ともあつれきを引き起すことはない。演説の目的を遂げようとして聴衆に譲歩するようなことでもあれば、彼自身、倫理の道を踏み外すことになる。自己の倫理概念に固執しすぎれば、――演説の主たる目的を遂げるために、必ずしも不可欠なものではないとすれば――聴衆の敵愾心を煽るだけであるからこの事もまた意味がない。従つて、最も好ましいのは、雄弁家と聴衆が一般に受け入れている普遍的な倫理の枠内で話しをすることである。

宗教上の教理を受け入れた倫理的に堅固な聴衆以外の一般の聴衆であっても、倫理上の観点より見てかなりの均一性を有している。聴衆の倫理的概念が異質のものであり、彼等の觀念と雄弁家の觀念が大きく異なっていればいる程、それ等の倫理的教理から遊離した所で話しをしなければならぬ。彼はそれ等の教理を攻撃することもないし、是認することもない。演説の性格自身が必要としている場合以外、その事には触れようとしないだけである。例えば、回教徒である雄弁家が、敬虔なカトリック教徒に対して、国際語の優位性について話す場合、一夫多妻性（彼の倫理概念）の道義性や一夫一妻制（聴衆の倫理概念）の非道義性について、話し

の中で強調してはならない。

演説の性格自身、又はその中の一部分の性格自身が道義上の解析を必要としているのであれば、雄弁家はそれをためらってはならない。彼は自己の倫理上の観点を断固として守り通すべきであるが、自己の意見に同調しない人達の感情を害するようなことの無いように努めなければならぬ。信念は攻撃的なものでもなく、偏狭なものでもない。

雄弁家は聴衆の物理的条件や知的水準に意を用いるだけでなく、聴衆の倫理概念にも意を用いなければならない。未知らぬ聴衆に向ってどういった所で、どういった国で話しをする場合でも、彼は自分の国の風俗や習慣について、主たる倫理上の行動規範について、明らかにしておかなければならない。このようにすれば、無駄な誤解や無作法を避けることが出来るし、全演説を仕損じることと避ける事が出来るであらう。

四、三つの主たるカテゴリー

聴衆は雄弁家に対して、あるいは彼の演説に対して友交的であつたり、中立的であつたり、無関心を装つたり、時には敵愾心をむき出しにしたりする。聴衆は友交的、中立的、あるいは冷淡といった観点からもまた均質なものである。

聴衆が同一の宗教教団に属していたり、同一の文化活動や政治運動に携わっており、雄弁家がそれ等の宗教活動や文化運動、政治闘争にかかわる話をするのであれば、一般に聴衆は友交的である。

法律や習慣が聴衆に中立を求めているのであれば、聴衆は中立的でなければならない。例えば、裁判官達は—少くとも理論的には—自分達の前で抗弁している弁護士達や検察官達に対して完全な中立を保たなければならない。アカデミー会員の科学的立場は、科学者仲間の演説に対して確固とした中立を求めている。

聴衆が雄弁家や彼の演説に積極的に抵抗して来る場合の聴衆は、冷淡である。

友交的な聴衆を相手に話しをする雄弁家の任務は、とても容易なものである。この場合の彼の演説は、聴衆のもっている願望や意向を汲み取り、美しい表現方法で自己の考えを述べるだけである。自己の考えを明確に表現することの出来る雄弁家は、自己の聴衆の思考をも形づくっていく。そして、その適切な思考表現は、熱狂や拍手かっさいを呼び起す。聴衆や雄弁家は、均一性をもった統一体となり、彼の言葉は総ての聴衆の気持を代弁しているかのようである。

無関心を装った聴衆に話しをする雄弁家の任務は、困難なものである。これ等の聴衆は原則的に、彼の思想を巧みに受け入れるけれども、熱気といったものが無い。優れた雄弁家はこういった聴衆に対しても、適切な論証によって自己の正当性を十分に納得させる事が出来る。彼の表現形式の美しさは、聴衆の注意を引きつけ、芸術的味わいさえ与える。聴衆の気持が少しずつ雄弁家の方へ傾むいて行き、誠意のこもった熱気や熱意のこもった拍手かっさいさえ引き起すことに成功していく。聴衆が裁判官のように「職業上」中立的立場を保っており、当然のことながら拍手かっさいといった極端な意志表示には無頓着であるような人達であっても、この種の雄弁家は自己の立脚点を聴衆に納得させたり、敵対者の立場を部分的にはあるにせよ弱めることに成功する。

雄弁学の観点より見て、最も困難ではあるが、同時に最も感動的なものは、敵意をみなぎら

せた聴衆に話しをする雄弁家の任務である。雄弁家の話しを聞くよりも前から、すでに敵対して来るといった聴衆について論じてみよう。抗議喚声や口笛、体全体でもって自分達の嫌悪の情をむき出しにしたり、演説を妨げようと一生懸命になったり、すでに話しを始めているのであれば、彼を混乱させようと懸命になったり、その他あらゆる方法で彼を妨害しようとする場合がある。雄弁家が実際に演説をあきらめてしまったり、演説を始めるけれどもすぐにも止めざるを得なかったり、最後まで呆然と立すくんでしまうといったことがある。初めに仮にではあっても、聴衆の立場を受け入れて、その主張を出口としてとらえている雄弁家は、少しずつ自分の考えに彼等を導いていく事に成功し、自分の思想に彼等を熱狂させることさえ成功していく。こういった演説こそが雄弁家と聴衆の真の戦いと呼べるのであり、この戦いの中で最終的な勝利をおさめることの出来るのもこういった雄弁家である。

最初のカテゴリーに属する演説のすばらしい実例が、フランスの第一回世界大会でなされたザメンホフ博士の演説である。これと同じカテゴリーに属するものに、シーザーの死後になされたブルータスの演説がある。敵意を抱いた聴衆の前で成功をおさめた演説のすばらしい古典的実例が、シーザーの亡き骸を足下に安置しておこなったアントニオの演説である。

(116)

聴衆があまり交友的でもなく、敵意を露わにしているわけでもないが中立的である事を好む

といったことがある。

人々は諸々の理由から演説を聴きに來ている。或る者はテーマに魅力を感じて、或る者はその会場をいつも訪ずれているといった事から、他の者は或る種の義務感から、或る者は雄弁家に誠意を示そうとして、あるいは雄弁家が代表している運動の参加者として、公けに意志表示をせんがために集まって來ている。芸術の見地から演説を享受したいとか、新しい知識を学び取りたいといった事から、多くの人達が演説に参加している。

こうした多様性は、聴衆の中に雄弁家に対して多少とも好意的な人達がいるという事を示している。彼の任務は支持者を大切に、傍觀者達を熱狂させる事であり、敵対者に打ち勝つことである。この目的を遂げるために、あらゆる雄弁学上の手法を活用するが、支持者達も意識的に、無意識的にはあつても、種々の方法で賛意を表にして雄弁家を助けている。熱氣が少しずつ広がっていく。支持者達から傍觀者達へと、熱氣が伝わってゆき、傍觀者達から敵対者の中でもそれほど執拗でない者達をも熱氣が包んでいく。こういった観点からもまた、聴衆は均一なものとなっていく。雄弁家によって引きずられてゆき、演説激流にのみ込まれていった聴衆は、一体となつて反応して來る。演説が最大の山場を迎えたり、演説が最高潮に達した時、聴衆の内部に貯つた熱氣が爆発的に拍手かっさいとなつて表面化して來る。このようなお

互いの興奮がかもし出す雰囲気深く心を揺り動かされていく中では、最も執拗な敵対者であれ、放らつな灼熱の渦中に身を投げ出してしまふ。彼等はもう対立する勇気もなくなつてしまひ、傍観者でいる勇気さえもなくなつてしまふ。みんなの拍手かっさいやみんなの示す賛意に参加しようとして、彼の手は自動的に上つていく。雄弁家によつて巧みに導びかれた聴衆は、彼等を飲み込み、彼等は單なる聴衆の一構成員となつてしまふ。

演説の第二の要素がこういつた聴衆である。誰れと一緒に自己の公的会話を導いていくのか、この事を雄弁家は詳細に渡つて知らなければならない。聴衆の具体的な性格を決めるあらゆる要素や聴衆に関する深い知識が、雄弁家にすばらしい演説を可能にさせるのである。そういった彼の言葉だけが目的を手にするであらう。

(116)、付録、アントニオの演説を参照の事

第十三章

演説

演説とは聴衆を前にして、特定のテーマについて、言葉と身振りでもって表現する芸術的に織りなされた思考の連続的展開である。

この定義は幾つかの説明を必要とする。

話しをする場合、人々は常に或る思考を表現している。いかなる会話であれ、人々は相手との何らかの意志疎通を計っている。簡単な会話は質問に対して答えが続くとか、一人の主張が相手の主張でもってより充実した主張になっていくとか、肯定や否定を固執し合ったり、相手の主張を偽りであると否定するということのようにして展開していく。このようにして私的会話では、二人かそれ以上の人達によってもたらされた思考が、無秩序に雑踏している。

演説は反対に、整理された、芸術的に織りなされた論理的思考の序列である。こういった思

考を展開する人が雄弁家であり、他の人は雄弁家によって展開された思考の枠内で、これ等の会話に賛同や非難、励ましや妨害をもつて参加する聴衆である。

私的な会話は多彩なテーマに触れると同時に、話題が次から次へと飛躍していく。会話に参加している人達は、雨とかひっくり返ったグラス、頭痛、突然路上で逢った知人……といった偶然の出来事からくる新鮮な印象にもとづく事柄について話しをする。口から出た言葉は無意識に出た言葉であつたとしても、思いもかけない話題へと会話の方向を変えていく。

演説は特定のテーマを常に取り扱っている。雄弁家はしつかりとした序列にもとずいて、順序正しく思考を並べたて、体系的にその事について話しをする。雄弁家がテーマから外れた話しをしたとしても、それは何等かの意味で、基本的なテーマを助けたり、支えたりする目的を常に持った意図的なものである。

人々は私的な会話の中でも、特定のテーマについて自己の思考を連続的に、秩序正しく展開させることが出来る。私的な会話を実際になしているのであれば、この種の思考展開は演説ではない。しかし、聴き手が聴衆の性格を有しており、彼等は話しを聴くために集まって来ているのであり、話しをするためではないとすれば、その時には――聴衆の数には無関係に――演説を

しているのである。

聴衆は普通、多くの人達、少くとも数人以上の人達から構成されている。多くの観点より見ても、聴衆の数は大きな意味をもっている。この事は明らかである。だが原則的には、数が聴衆の性格を決定するのではない。聴衆は数千の人達から構成されるということもあるが、数人ということもある。またたった一人という事もある。弁護士が依頼人のために弁護しているその前で、彼の弁論を聴いている裁判官は、例え部屋の中に一人だけだったとしても聴衆である。

雄弁家が意図的で、意識的に選択された位置、即ち話し手の立場を本質的に定められているのと同様に、聴衆も意図的で、意識的に選択された位置、即ち聴き手の立場を本質的に定められている。二つの異なる立場は前もって定められており、誰れが話しをして、誰れが話しを聴くのかといった事が明確に定められている。この事を人々は演説の数日前、あるいは一ヶ月前に知ることもあるが、演説の直前になって知る事もある。その事をハガキや雑誌で通報したり、鐘の音が知らしたり、話し手が立って話し手の位置について話しを始めるといった事から人々は知るのである。まさに、聴き手のこういった立場が、出席者としての聴衆をつくり出している。聴き手と話し手の側に、重要な心理的変化が起って来る。雄弁家は聴き手が特定のテーマに関する芸術的に織りなされた思考の連続的展開を、自分に期待しているのだという意識をもつ

し、すでに「聴衆」となつてしまつた聴き手は、自分の個人的な考えを抑え、静寂を保ち、話を聴こうと心の準備をする。ここでは話しをすることが任務である雄弁家と、話を聴く事が務めである聴衆の間の会話といった全く特殊な公的会話を取り扱っており、聴衆を前にして行ふ芸術的に織りなされた思考の連続的展開といった真の演説について論じている。

一、演説の種類

演説は種々のカテゴリーに分割することが出来る。分類化によつて決め手となる基準もまた、多岐に及んでいる。基準となるべきものを考える場合、演説の内容を選ぶことも出来るし、どこでそれがなされるのかといった場所を考慮することも出来るし、何を目ざしているのかといった目的を採る事も出来るし、それが文章化されたものか否かという形態や論題を選ぶことも出来る。

古代の修辞学者達は、アリストテレスに習つて総ての演説を、デリベラティブス演説、デモンストラティブ演説、ユジェヤ演説といった主たる三つのカテゴリーに分割している。

(a)、デリベラティブス演説とは、特定の意識をもつように聴衆を納得させ、聴衆をなだめすかし、聴衆を説得するといった役目を担う演説である。雄弁家は或る決意を受諾させ得るか、それとも拒絶されてしまうのかというこの事のために力の限り奮闘する。語彙自身がこの演説の性格を浮き彫りにしている。deliberativus というラテン語はdeliberareという動詞から派生した形容詞である。それは熟考する、審議する、協議するといった意味、即ち共通の問題を論議し合い、論じ合うといった意味をもっている。デリベラティブス演説を考える場合、市民主権者の大会合である民会でなされた演説が先ず第一にあげられる。そこで人々は戦争や平和といった重要な決定を行ったり、法律を定めたり、他国との同盟関係や諸国間の交流についての取り決めを行ったり、公的生活にかかわる一般的事柄についての取り決めを行っていた。

あらゆる演説の中でも特に、デリベラティブスに属するものは、古代の修辞学の大家達から最も高く評価されていた。そして、それは最も傑出したものと見なされていた。賛同、抵抗、妨害、警句、喚声……といったもので表された対立する意見の中にあつて、雄弁家は公共の利益に関与する自己の意見を通そうと懸命の努力をする。彼はまどうことなく勝利に向つて、自己の考えを力強く押し進めていかなければならない。

今日に於いてもまた、この種の演説は最も重要なものである。国会やその他の政治的会合に

於ける現代の雄弁家の立場と、かつての民衆の大会合に於ける古代の雄弁家の立場との間には、かなりの大きな違いがある。古典的デモクラシー体制の下では、自己の考えに敵対して来るかもしれないが、一方では比較的御し易くもあつた大衆とか民衆に向つて、雄弁家は弁論の火蓋を切つていた。今日の雄弁家は、どのように行動するのか、どのような態度をとればよいのか、どのような意見を述べればよいのかという詳細に渡る訓令を受けた政党の代議士や州の代議員に向つて演説をしている。実際には問題が討議されるよりも以前に、すでに決定がなされてしまつてゐるといつた事がよくある。この事は今日、この種の演説がもう何の意味もなさないものになつてしまつてゐるという事を、もちろん意味してゐるわけではない。

優れた雄弁家は、今日の状況下にあつてもまた、自己の演説でもつて、こうした決定に対し、多面的な影響を与えることが出来る。一方、幅広い聴衆は——演説もする専門家や話しを聴くだけといつた聴衆全体——雄弁家の話しを聴く機会をしじゅう持つてゐる。これ等の聴衆は訓令に基づいて自己の考えを形成してゐるのではなく、論証の影響に基づいて、自己の考えを形成してゐるのである。新聞や雑誌、テレビ、ラジオといった報道機関は、雄弁家の考えを広く報道しようとして、時には演説全体さえも報道し、総ての大衆に彼の考えを理解させようとする。このようにして、今日でも偉大な雄弁家は、大衆の思考形成に多くの貢献をしており、かなりの高度なレベルまで聴衆に影響を及ぼしてゐる。

(b)、デモンストラティブ演説とは、特定の人物や重要な出来事を賛美したり、賞賛したり、おごそかに祝ったりする内容を持った演説である。このカテゴリーに属するものに、各種の追悼演説、称賛演説、乾杯演説、厳粛な催しの席上でなす大使やその他の国家の代表者達の公的挨拶、各種の記念式典、開会式等でなされる演説がある。

(c)、ユジェアな演説とは、古代の修辞学者達が第三の基本的カテゴリーとして考えた法廷演説である。この種の演説は、法廷でなされる告発や弁明に関するものを言う。

古代の修辞学者達の粗っぽい分類は、現代の雄弁学の教師達を満足させる事は出来ない。諸々の学派は独得の基準を持っており、それぞれの観点から演説を論じているから、結果的には色んな方法で演説を分類している。最も一般的な分類の方法として、総ての演説を次の四つの主たるカテゴリーに分類する方法が採られている。

(a)、政治演説、これは国会や民衆の集会、厳粛なレセプション、国際会議、国際会談、あるいは国際的な施設でなされる大使や国家を代表するその他の人達の演説、王位継承演説、声明演説といったものを言う。

(b)、カテドラ演説、これは学校、大学、教会、軍隊、あるいは死に際して、結婚の祝いの席で、その他これと同等の状況の下でなされる演説を言う。

(c)、法廷演説、これは告発や弁明をなすために、法廷や判事席の前でなされる各種の演説を言う。

(d)、学士院演説、これは科学アカデミー会員がなす演説である。この演説の典型とも言えるものが、フランスに於いて特に発展して来た。そして、それは実際、特異な性格をもつものであった。一六四〇年、オリヴェー・パトールが自己の推挙に感謝してフランスアカデミーに対して異例の演説を成したことから始まっている。この演説にひどく心を打たれたアカデミー会員達は、同様な演説をなすようにと総ての新会員にこの事を義務づけてしまった。長い間、新会員の演説は、いつも交代された会員に向けての賛辞に関するものばかりであった。こうして、彼等は常に同じ内容をもった全く特異な性格を受け継いでいった。後になって、アカデミーの厳肅な開会式に際しても演説をなす習慣が採り入れられて来たが、この演説もまた、「アカデミーの社会的役割」といった常に同一のテーマで論じられていった。十八世紀になると厳肅な開会式を司るアカデミーの理事が、開会演説のテーマを自分達で決めるようになった。フランスアカデミーではこれ以外にもまた、各種の演説が機会ある毎になされている。幾人かの雄弁学

者の考へによれば、アカデミーでの弁論大会や文化祭の報告、各種の懸賞論文受賞の報告を含めたこれ等総ての演説が、この種のカテゴリーに属するといっている。

演説を正しく分類するには、先ず第一に、適切な基準を見い出すことが大切である。演説の内容自身によつても、それがどこでなされるのか、誰がそれをなすのか、またはその他の状況によつても、演説は特殊な性格をもつてくる。こうした内的な性格は、演説の形態を大きく決定する要因でもある。

あらゆる芸術のように、雄弁法もまた、外面的形態が、一般には内容と調和している。

雄弁学は雄弁法の理論である。その主たる目的は、内容と形態の関係を研究し、内容に対する適切な外觀を見い出し、内容と形態を一致させる事である。最も優れた分類は、演説の内的な性格を基準として採用することであろう。テーマの数だけ内容の数があるとはいへ、これ等総ての内容の間には、部分的にしっかりと結びついた特徴が見られる。その特徴が互いの相違を明確に区別している。

こうした観点から、総ての演説を専門演説、非専門演説といった二つの演説に分類すること

が出来る。これ等のカテゴリーの総ては、複数のサブカテゴリーを持っている。そして、これ等のサブカテゴリーの総てに、お互いを明確に区別させ得る数多くの特殊なニアンスを持った幾つかのタイプが属している。

(a)、専門演説は三つの主たる特徴を持っており、それ等はお互いに深く結びついている。雄弁家は専門家であり、人に話しをすることが職業である。テーマは専門的なものであり、雄弁家の知的職業に関するものである。聴衆は演説に参加することが義務づけられている特定の人達から成り立っており、幅広い大衆は除外されるのが普通である。

専門演説をするための特別な資格をもった雄弁家だけが、この種の演説をなすことが出来る。一方、聴衆は演説テーマに関する専門知識をかなり身につけている。だから、当然のことながら、専門演説は同一のテーマを扱った非専門演説よりも、ずっと深みのあるものとなっている。弥次馬的非専門聴衆には、雄弁家は全く見向きもしない。彼は専門知識を有する特定の聴衆に向けて話しをする。そして自己の演説を聴衆の知的水準に合せている。こうした専門聴衆—実際にこう呼べるとすれば—は、とても数少ない、たった一人ということもある。一方、好気心やもっと他の原因があつて出席している非専門聴衆は、とても数多くいる（重要な訴訟事件等の場合）といった場合でも、雄弁家は専門聴衆にのみ話しかけ、非専門聴衆は完全に無視されてし

まう。眞の聴衆は専門家だけであり、その他の聴衆は、雄弁家の聴衆というよりは演出的聴衆の性格を持っている。

聴衆の均一性は、総ての専門演説の重要な特質である。この均一性はテーマに関する非常に深い知識や入念な研究を雄弁家に求めている。しかし、それは彼が自己の考えを腹藏なく表現し得る事を可能ならしめてもいる。彼は確信に満ちた考えを放棄しなくてもよいし、理解してもらえないといった危険を避けようとして明確な言い廻しを棄て去らなくてもよい。雄弁家は最もふさわしい語彙の衣で内容を美しく飾り立てることが出来る。彼の文体は香り高く、彼の文章は適切であり、彼の語彙は思想を満すものである。これ等の総ては、雄弁家が内容と形態の一致した演説レベルを可能な限り高めることを可能ならしめている。

専門演説は、互いに多面的な違いを有する複数のサブカテゴリーを持っている。

(I)、科学、教訓、教育的演説とは、学校や大学で講義されている諸々のテーマに関する演説である。雄弁家は一連の講演や講義の中で、科学、哲学、芸術、政治といった特定の部門を披露する。この場合、最初の講演は導入演説の性格をもっており、その他の講演はそれぞれのテーマや専門について、雄弁家の思想を体系的に展開していく。諸々の私学や夜学、これと同等

の教育機関でなされる演説も、この種の演説に属している。同じように、科学や芸術、哲学その他の専門に関して、各種のテーマをもってなされる学士院での演説もまた、このカテゴリーに加える事が出来る。

演説が普遍性を有しており、大衆性をもったものであれば、それを講演という。大学や学士院でなされる演説や重要な科学的意味をもつ高等な教育的演説について論じるのであれば、それを講義という。一連の講演や講義はかなり細かく定められている。この種の演説は普通、四十分から一時間の単位でなされる。形態もかなり典型的なものである。総ての新しい講演や講義の導入部は、前の演説の短い要約から成り立っている。その後のそれは一連の教育、訓練計画の下に、前もって十分に練り上げられたテーマについて、あるいはテーマの一部について思考の展開が続いていく。最後に結論の部では、次の講演や講義の内容にさりげなく触れておく。こうした一連の講演や講義は、体系的に結合されており、それ等は一体をなすもの——特に講義について論ずる場合——であるとはいえ、個々の演説は、たくさんの講演や講義からなりたつ膨大な演説の一部にすぎない。

(II)、教会演説は各種の宗教的テーマを取り扱った演説内容をもっている。雄弁家の任務は自分達の宗教上の観点より見た宗教的真理を説いて聴かせることであり、彼等の宗教活動に於け

る士気を鼓舞し、自分達の宗教の倫理的原則の正当性を信じ込ませることである。

専門演説の中でも、このサブカテゴリーに属するものは説教と呼ばれている。講演や講義と同様に説教もまた、一連の演説が体系的に結びついて一体を成しており、広範囲なテーマを取り扱うことが出来る。この場合、個々の説教の総ては前の説教の続きである。雄弁家である説教者は、一連の全演説を始めるに先だって計画を練り上げ、その計画にそって演説全体の中の一部を説いていく。

説教は教会やこれと同等の雰囲気をもった会場でなされる。教会がかもし出す神秘的な雰囲気の中で、雄弁家は自由に身振りを使いこなすことが出来、あふれるばかりの情熱を込めて話しをすることが出来る。テーマ自身は聴衆の理性に向って話しをするというより、良心や心に向って話しをするといった内容を持っている。このことから、説教では知性的な面よりも感情的な面が強く押し出されて来る。講演や講義はデリベラティブな性格を持っていると言えるが、説教はむしろ、デモンストラティブな性格をかなり持っている。

説教の場所や時間、継続時間は、それぞれの宗教規則によって大部分が定められている。説教の時間は講義や講演よりも一般的に短い。説教は数分間で終るのが普通であり、半時間にも及ぶ説教はかなり長いものとして受けとめられている。

宗教が大学や学校で教えられたり、演説が全体的に宗教的テーマを扱ったものであったり、宗教的テーマで話しをしたり、討論し合うといった目的を持つ宗教の有する知覚の外部的または直接的対象に関するものである場合、その演説は説教ではなく、講演や講義の性格を持っている。この事実は形態にも影響を与えている。演説の時間は講演や講義の通常の継続時間に匹敵するものとなり、情熱は影をひそめ、全く消えうせてしまうことにもなる。雄弁家は感情的な要素よりも、多くの論証を用いなければならない。

(Ⅲ)、政治演説とは、地域、県、国家、世界といった枠内での公的生活上のあらゆる問題を取り扱った演説である。専門演説の中でもこのサブカテゴリーに属するものに、市議会や県議会、国会でなされる演説とか、各国との外交交渉、各種の国際機構、国際会議、国際機関で各種のテーマをもってなされる演説がある。立憲君主制の下でなされる王位継承演説、国家元首の声明演説、大使や国家を代表するその他の人達の公式演説も同様に政治演説である。

政治演説は、(a)慣例や伝統によって、あるいは特別な規則によって細かく形態が規定されている演説、(b)公式には規定される所のない演説といった二つのタイプに分割することが出来る。

第一のタイプに属しており、先ず最初に述べなければならない演説に、厳密な意味での大使

演説がある。発言の長さや場所、タイトルの決め方、その内容さえもほとんどが慣例によって定められている。総ての語彙が特殊な意味を持っており、演説がなされる音調までも首尾一貫したものである事が要求されている。あらゆる現実の状況や個人的事情（現実世界の中での自国の大きさ、力、立場、自分の社会的地位、相手の社会的地位、演説の具体的な目的、これ等に類する状況）を考慮しながら、雄弁家はこの種の演説をなすに当ってこと細かに予知される規則に自分の演説の形態を合せている。こうした事から、これ等の規則を彼はよく知らなければならぬ。彼がもし未経験者であつたとすれば、それ等を必ずこと細かに知るように努めなければならぬ。このようにして始めて、彼は自分の置かれた状況に最も合った演説をなせるであろう。この事からもわかるように、この種の演説をなす雄弁家は、必ずしも偉大な思索家である必要はない。同一の問題に対しては単に、同一の演説構成をなすだけである。このタイプに属するものに王位継承演説がある。

第二のタイプは、それぞれの有機的組織体の機能を円滑に運営するために取り決められた内規によって、部分的にはあるが規定されている。例えば、市議会、県議会、国会、各国との外交交渉、平和会議、そして国連の諸機関の内規は、誰れが、何時、話しをする権利を持っているのか、どれだけの時間継続して話しをすることが出来るのかといった事をあらかじめ取り決めている。雄弁家は当然、これ等の内規に従わなければならないけれども、規則が誤って自

分に適用されないように気をつけなければならない。そのためにはそれ等を細かく知っておく必要がある。周囲の状況が自分の発言を求めている場合には、いついかなる場合であれ、それをなすことの出来る自分の権利を知っていなければならない。

話しをする権利を取り決めた内規の部分は非常に普遍的であり、弾力性に豊んでいる。それ等は演説の形態や演説の内容に関する大きな自由を雄弁家に与えている。それは民主主義の有機的組織体の中で、雄弁家があらゆる機会を利用して、自分の考えを遠慮なく述べる事を可能にしている。大使演説の場合のように、彼は自分の考えを融通性のない定式文でがんじがらめにされることはなく、自由に自分を表現することが出来る。演説の力は彼の知的能力や雄弁家としての才能、雄弁学の学識といった彼自身の力量にのみ左右されている。

公式的に定形化されていない政治演説はとても短いものであつてもよいが、時には数時間、あるいは幾日にも渡つて続けられることもある。また数分で終ることもある。総ての論証をなすために、数時間もしゃべり続けなければならない事がある。この外、それぞれの有機的組織体の活動を妨害しようとして、意図的に演説を長くすることもある。国会で政府が提出した或る法案を拒絶しようと企んでいる野党の雄弁家は、国会の議事を妨害するといったただそれだけのために、あるいは納得のいかない法案を廃案におい込もうとして、幾日にも渡つて、時に

は一ヶ月にも渡って演説を続ける。とても長時間に渡る演説をなす能力を持っているという事で有名になった雄弁家がいる。彼等の中の幾人かは、幾時間にも渡ってよどみなく演説をなすことが出来、わずかの休憩の後、新しく幾時間にも及ぶ演説を再び始めるといった能力の持主であった。こうした長い演説は、議事妨害の強力な武器である。

政治演説はデモンストラティブなものか、デリベラティブなものかのどちらかである。第一のタイプはデモンストラティブな性格を有しており、今述べた第二のタイプはデリベラティブな性格を有している。政治演説はそれが多少長めのものであったり、説得を目的としたものであるとすれば、デイスクルソと呼ばれている。

(iv)、法廷演説とは、法廷でなされる弁護や告訴のための演説である。個人名義でもって、国家の名に於いて、自分の依頼人の名に於いて、人々は告訴する。弁護側は自分自身を弁護したり、あるいは自分の依頼人の事件を弁護する。どういった場合であれ、法律の熟知が優れた法廷演説の前提条件である。こうした事から、とても大事なあらゆる民事訴訟や刑事訴訟に際して、殆どどの国では法律専門家の助勢を義務づけている。

法廷演説の長さは訴訟の重要性によって決つて来る。訴訟が重大なものであればある程、演

説時間は長くならざるを得ない。とても重大な訴訟や国際司法裁判所、その他の国際法廷、国際仲裁裁判所にもち込まれたとても大きな訴訟や告訴に際してなされる演説は、幾日にも渡って継続される。

法廷演説は内容の特殊性によつてだけでなく、法律によつて大部分が定められていたり、あらゆる法体系によつて大部分が規定されているといった事実によつてもまた他のものと區別されている。法律は雄弁家がどのような質問をなさねばならないのか、どういった質問をしてはならないのかといった事を事細かに教えている。判事達の前で弁護している雄弁家は、こうした規定を必ず遵守しなければならない。総ての法廷演説は各種の法体系の特殊性にとらわれることなく、事実の観点や法律の観点からも事件を分析しなければならない。総ての事実関係は特定の法理論を作り出すから、雄弁家が最初に事実を見て、後に法を論ずるというのが正しい。事実を明らかにするために、雄弁家は証人や専門家の意見、それぞれの法体系に関する証拠物件といった諸々の証言を活用する。こうした動かし難い事実関係の中から、雄弁家は弁護している事件の目的に叶つた法解釈をなしながら、結論を引き出していく。

法の解釈は法廷演説の最も重要で、最も難しい課題の一つである。この事に関してもまた、諸々の法体系は異なる解釈の道を規定している。文法的に整然とした、理論的で、類似性を有する解釈があると共に、総ての場合、又は幾つかの場合にのみこれ等の解釈方法を許す法体系

がある。又他の法体系は或る種の解釈を禁止している。これと同時に、法理論や最高裁判所の判決、法律や協定に関する予備調査、解釈の道具としての判例に関する予備調査を認める法体系があり、これ以外の法体系は特定の法規範を解釈するためのこれ等の道具の活用を禁止している。こうした多様性があるために、法廷雄弁家は法解釈についての絶対的な規範をうち立てることは出来ない。特定の法機関で話しをする事が職業上義務づけられている総ての人は、これ等の規範を十分に調べあげなければならぬし、それ等を自己の演説の中で幅広く活用しなければならぬ。法廷演説はプレードと名付けられている。

(v)、軍事演説は、専門演説の中でも特異なサブカテゴリーを形成している。この演説は上官が部下に対して行うのが常であり、それは或る戦斗に際しての勇気であるとか、英雄的行為の賛美、旺盛な技術習得意欲等々を促すといった軍務に関するテーマを取り扱ったものである。

諸々の機会や諸般の状況を考えて兵士達に演説がなされる。戦斗に際して、勝利や敗北の後、建国記念日や独立記念日といった国家の祝日に際してなされる。目的は兵士の士気を高めるといった常に同一のものである。他の目的をもってなされる演説と同様に、精神を高揚させるためであるとか、演説の目的に合った環境をつくり出すために、トランペットやクラリネット、タンバリン、音楽やブラスバンド、国旗や紋章、記章、砲声や鐘音の響き、軍服や華麗な

武器といったものが活用されている。

軍事演説は形態上の観点より見て、短かさや簡潔さを有しており、内容の観点より言えば論証の欠除があげられる。一般に、この演説は導入部や結論に至る結びの部を持っていない。環境のもたらす全体的調和が、これ等の部分を代行しているからである。本論の部は論証や証明から成り立っているのではなく、張りのある声調や扇動、激励といったものから成りたっている。論証は雄弁家の階級優位性や聴衆に規律をもたらす絶対服従の精神に地位を明け渡している。

軍事演説は特殊命令の形でなされる事がしばしばある。特殊命令が最高司令官によってなされるのであれば、それ等は幅広い政治的意味をもつことになる。その場合、こうした特殊命令は、軍隊の前で下級士官によって読み上げられたり、ラジオやテレビを通して、全民衆に幅広く伝えられる。演説の著者と聴衆の直接的接触が欠除しているために、真の演説とはいえないものである。実際、多くの人達はこうした形で雄弁家として振る舞う事が出来るけれども、彼等は他人の書いたものをただ読んでいるにすぎない。

(b)、非専門演説は、専門演説を構成している要素のうちの少くとも一つが欠けているといっ

た事実によつて、専門演説と区別されている。雄弁家が専門家であり、自分の専門に関する話しをするのだが、聴衆が専門家ではないといった場合の演説は非専門演説である。雄弁家は特定の科学、あるいは芸術、その他の分野での専門家であるが、自分の専門と直接関係のないテーマで話しをするといった場合も非専門演説である。

総ての非専門演説は、講演と式辞挨拶といった二つのカテゴリーに分類することが出来る。

(I)、講演とは、非専門又は専門聴衆を前にして、専門家やアマチュア専門家によつてなされるあらゆる専門テーマに関する演説を言う。講演は教育的演説の一部である。これ等の講演と学校や大学でなされる講演や講義の間にある唯一の違いは――とても大事なことであるが――聴衆の性格にある。専門講演や専門講義を聴くのは、相応の理由から演説を聴く事が義務づけられている人達から構成されている限定された聴衆である。非専門講演は専門家のみから構成されることもあるが、通常は多くの非専門家や非専門家のみから構成される幅広い聴衆に対してなされる。こうした事実が講演自体をポピュラーなものにしている。

講演がなされる会場は、演説テーマによつて決つて来る。学校や大学、その他それぞれの地域で大衆演説をなすために用意された特別な会場で講演がなされることもあり、劇場や映画館、

公共施設、交友クラブ、その他これに類する会場でなされることもある。会場の選択は、講演内容を知らせておく範囲の選択と同様に、聴衆の構成に大きな影響を及ぼす。

講演の継続時間もまた、テーマによって決つて来る。講演は四〇分から一時間の範囲でなされるのが普通である。最も適切な継続時間は普通、五〇分である。

(II)、式辞挨拶は、あらゆる催しに際してなされる一般的な演説である。結婚式や誕生、仕事の完成を祝つて、人の死を悼んで、大会や会議、祝典等の開会式やそれ等の冒頭に際して、式辞を述べる習慣がある。これ等はデリベラティブスな性格を有する数多くの演説と違って、デモンストラティブな性格をもつ演説の典型とも言えるものである。

式辞挨拶は人物や思想、団体やその運動の賛美を主眼としたテーマを扱つたものである。

式辞挨拶が死者に関係したものであるとすれば、追悼演説とか弔辞と名付けられる。長くて厳肅な祝辞は、称賛演説と呼ばれている。人物や思想の名誉や成功を称えて酒宴の席でなされる演説は乾杯の辞という。その他諸々の機会になされる演説は、それ等の目的に最もふさわしい自己の名称をもっている。例えば、大会や会議の冒頭になされる演説に対しては、開会演説

とか開会の辞といった名称がつけられている。厳肅な催しの中心ともなる演説は、記念講演とか基調演説と名付けられている。

式辞挨拶は催しの内容にぴったりとしたものではない。諸々の状況に応じて、それ等は多少長目のものとなることもあるが、雄弁家はできるだけ短かく話すようにしなければならないし、表現は活気に満ちたものである事が望まれる。演説がなされるこれ等の催し会場には、はっきりした調和が創り出されているのが普通である。だからテーマに合った心の準備を、聴衆の側につくり出そうとして、長い前置きをなす必要はない。雄弁家はすでにある聴衆の心理状態に合わせて、自分の演説スタイルや音調を調和さす努力をするだけである。

式辞挨拶はその内容自身とか、その時の会場の雰囲気といったものが、他のタイプの演説にみられる音声や身振りに比べて、より多くの情熱を雄弁家に求めている。会場の雰囲気が厳肅なものであればある程、演説はそれだけ情熱のこもったものとなる。その優れた文体や磨かれた文章で表現された堂々とした思考、内容に応じて変化する音声、催しの規模に応じた身振り――これ等の総ては、これ等の催しの内容をより重みのあるものにしていく。

二、演説構成

演説とは――既に述べたように――織りなされた思考の展開である。それは芸術でもある。総てのパーツや総てのピリオッドは、全体の中で一体となつて、一つの作品を作り出していくと同時に、作品の美しさや偉大さに貢献しながら作品の豊かさの中にその姿をうずめ、溶け込んでしまう。

芸術的に磨きあげられた単独のデテイルは、断片的な研究材料として見れば、興味あるものであるかもしれない。デテイル自身、それは美しさを内に秘めている。しかし、その真の芸術的価値は、他のデテイルとの調和ある結びつきや全体との調和があつて始めて生れて来るものである。これと共に、総てのパーツやピリオッドの均衡ある調和は、芸術作品の並優れた個性の中に移植され、デテイル固有の個性をも失なわしめてしまう。

唯一つの石塊は――非常に美しいものであつても、唯一つの楽句は――とても快いものであつたにしても、モザイクやシンフォニーの美しさを作り出す事は出来ない。しかし、芸術的に織りなされた石塊や楽句なしにもまた、これ等の作品を想像することさえ出来ない。

芸術全体がデテイルなしには存在し得ないし、デテイルもまた全体の外にあってはその表現能力を発揮し得ないのであれば、デテイルから成り立つ全体とか、全体の中でのデテイルのみが芸術を創り出す。

ブリリアントはたくさん面の面を持っている。総ての面はまばゆいばかりの美しさを創り出しており、総ての面は全体の輝きの中で、自己固有の微妙な違いのある美しさを放っている。演説は音声や音調、語彙や文章、節や部から成り立っている金字塔である。語彙の中の音声や音調、文章の中の語彙、節の中の文章、部の中の節といったように、あらゆる部分は上位の統一体の中で、自己の位置や自己の役割を有し、自己の意義を見出し出している。それ等の総ては自己の力や自己の美しさでもって、全体の力や美しさを創り出しているが、それ等固有の力や美しさは、それ等の相互関係や全体とのかかわり合いの中でこそ成り立つものである。全体を強化しながら自分自身、力強くなってゆき、全体に活気をもたらしながら、自分自身、生命の源となっていく、全体を芸術的に価値あるものとなしながら自分自身、芸術的に磨かれていく。

演説を構成している総てのパーツやピリオッドを、慎重に取り扱うだけでなく、それ等をうまく結合させ、それ等がうまく調和するように気を配らなければならない。

古典的雄弁学によれば、演説は導入、告知、提示、説得、論破、結論といった六つの基本的部分から成り立っている。

導入の部分では、雄弁家が自分を紹介し、演説テーマに対する聴衆の関心を引き起し、聴衆の好意を引き出すように努める。この部分を古代ラテンの雄弁家達は、エコルディウム(*exordium*)と名付けた。

第二の部分—告知は、演説内容全体についての明確で、きめ細かな告示から成り立っている。この部分で、雄弁家は自分がどういった問題を論じようとしているのかといった事が一日でわかるように、演説計画を聴衆に紹介する。この部分はエヌンツィアテオ(*enunciatio*)と呼ばれている。

提示と呼ばれる第三の部分は、事実関係の提示である。雄弁家は事実を一つ一つ理路整然と並べたて、自己の考えを紹介していく。この部分を古代の演説の教師達は、自分達の著書の中でナレイティオ(*narratio*)とかエクスポジティオ(*expositio*)と名付けた。

第四の部分—説得は最も重要なものと考えられていた。雄弁家はこの中で自分の今まで述べて

来た主張を証明し、言わんとする重要な事柄を有利に導びく論証を行い、自己の立脚点の正当性について説得していく。この事から、古典的雄弁学ではこの部分をペルスアシオ（*Persuasio*）と呼んでいた。

次の第五の部分、雄弁家が敵対者の論証を論破し、彼等の論理を弱めたり、潰してしまったり、彼等の要求を打破ったりするこの部分はレフタティオ（*refutatio*）と名付けられていた。

かつて、ペロラティオ（*Peroratio*）と名付けられていた第六の部分、結論の項では、雄弁家が最後の立脚点を勝利に導びくこうとして、感動的な言葉を駆使し、自己のテーゼを最終的に受け入れさせてしまうというようにして自己の演説をしめくくっていた。

こうした演説分割は、特定のタイプに対しては今日に於いてもまだ有効であるかに見える。特に政治演説や法廷演説は、これを基本的モデルとしてうまく活用することが出来る。だが総ての演説がこれ等の総ての部分必ず持たねばならないとか、右記の様式に従って順序よく論旨を展開していかなければならないといったわけではない。

多くの演説——例えば、乾杯の辞とか称賛演説、弔辞、その他の式辞挨拶——には、告知が欠け

ていたり、論破の部分が欠けているのが普通である。これ等の演説には、語彙の古典的意味に於ける提示もまた入り込む余地はないし、あつたとしても非常に短いものである。講演ではこれとは逆に、中心的位置を提示や場合によつては説得が占めており、一方、論破は何の役割も演じなかったり、殆んど何の役割も果すことがない。説教は主に説得から成り立っているが、この説得は論証の権威というよりも、権威者の論証といった性格をもっている。軍事演説もまた同じような性格を持っている。

六つの古典的部分を有する古典的なタイプは、法廷演説である。だがブレードに於いてもまた、特別な例として告知を取り去ることが出来る。又提示や説得、論破を——より適切であるとすれば——混ぜ合わせる事も出来る。こうした場合、雄弁家は一つの事実を紹介し、その証明をなし、敵対者の論証を論破し、結論へと導いていく。その後、またもう一つの事実について順次同じような展開を行つていくというようにして論旨を展開していく。

又、他の方法でもつてなすことも出来る。即ち、最初に総ての事実を述べたて、その後説得や論破といった形で論証や反論が続くといった方法もある。

事実関係の総てを明らかにする最も大事な論証や論破は、演説の後半に残したままにしてお

いて、各々の事実を述べたてたすぐ後に論証や反論が続くといった事も時折ある。他の場合には、提示の部分で総ての事実を紹介し、一つの論証に対してそれを攻撃する反論が続くというように、説得や論破のみを織り混ぜるといった事もある。これ等の総ては、演説の具体的な要求に叶った形式を選ぶ事の出来る雄弁家の能力や周囲の状況によって異つて来る。

あらゆる演説の中でも、絶対不可欠な部分として、導入、本論、帰結の三つがある。

導入(I)は多重の意味を持っている。先ず第一に、雄弁家は導入をもつて聴衆に今から会話が始まり、接触が生れて来るのだという事を知らせる。雄弁家と聴衆の間のこの最初の出逢いは、その後の演説の展開にとって非常に重要である。全体の成功は、殆んどこの導入部にかかっているといつても過言ではない。このことから、雄弁家は導入に大きな注意力をさき、人念にそれを仕上げ、諸々のこの先起るであろう状況を予見し、場合によつては幾つかの変形を準備しておかなければならない。好調なすべり出しは、成功裡に目的を達成するための前提条件である。

導入をもつて雄弁家は演説のテーマに聴衆を引きつけると同時に、話しの内容に聴衆の個人的興味を抱かせ、聴衆の好意を得ようと努める。この二つの目的をテーマにふさわしい敬称によつてとか、導入の内容自身によつて達成する。

敬称は雄弁家が挨拶の代りにさし出す手である。それは頬を殴るためにあるのではない。それは信義と友愛のために差し出す手である。“*vias sinjoraj moŝtoj*”（閣下）と盟友に向つて言う事は、高位の人に向つて“*karaj amikoj*”（友よ）という敬称をもつてするよりも、失礼には当らない。

敬称は演説の性格に合ったものでなければならぬし、雄弁家と聴衆の關係を考慮したものでなければならぬ。仲間や友達の会合では“*geamikoj, gekamaradoj*”といった敬称を用いるのがふさわしい。専門家の会合や学士院、大学で雄弁家の科学者としての地位が同等であつたり、聴衆よりも高い地位にある場合は、“*gekolegoj*”という敬称を用いる事が出来る。少くとも彼が同等ではないという事であれば“*sinjorinoj kaj sinjoroj*”とか“*sinjoroj profesoroj*”あるいはこれと同等の敬称を用いる。軍隊での上官は兵士達に向つて“*soldatoj, suboficiroj kaj oficiroj*”といった敬称を用いて話しを始める。牧師は“*karaj kredantoj*”とか“*fratoj per Kristo*”又は、それぞれの宗教の慣例に従つて、同様な敬称を用いる。弁護士や

検察官は“*alta tribunalo*”とか“*sinjoro prezidanto kaj alta ĵuĝistaro*”といった人達の前で話しをする。外交官の儀礼は、諸種の状況を考慮して、ありとあらゆる高官への敬称が定められている。政治演説では“*civianoj*”“*geamikoj*”といった敬称が広く用いられている。エスペラント聴衆に対しては“*gesamideanoj*”という敬称がよく用いられている。各国語に於いて

も、これと同様の敬称が用いられている。

会合が議長によって運営されていたり、名士達の出席を伴っているのであれば、議長に敬意を払うと共に、名士達にも、聴衆にも同様の敬意を払う事が大切である。更に、聴衆が雄弁家に多少とも近い様々な要素から成り立っているのであれば、総てのグループとの接触がなされるように、二重にも三重にも敬称を用いる必要がある。この場合、最も親密な関係にあるグループを最後にするような敬称の用い方をする。

例えば、“*Estimataj sinjorinoj kaj sinjoroj ! Geamikoj ! Gekamaradoj !*”
といった言い方をする。

最も大切な事は、敬称を用いて全聴衆を抱き込むことである。だが、一般的な一つの敬称を用いて、又は特殊な敬称を用いて、全聴衆に語りかけるといった行過ぎた、礼儀をわきまえない敬称の用い方をして不快な感情を呼びさますといった事が決してないようにすべきである。

敬称もまた、演説のあらゆる内的な要素や外的環境に左右されるものであるという事を忘れてはならない。学園でなされる学生による講演会に出席している重要な科学者には、特に敬意を表さなければならない。しかし、政治集会で同じ学生の演説を聴いている同じ科学者には、一般的な敬称である“*Civitanoj*”でもって、聴衆と同列に扱ってもかまわない。

敬称の用い過ぎは、聴衆の間に亀裂を創り出すといった悪い影響を与えるだけでなく、聴衆に不快感を与える事にもなるという事を覚えておかなければならない。だから、本当にそれが必要としないのであれば、たくさんの敬称を用いない事である。特に演説が親密な間柄でなされるとか、余り嚴肅なものではなかったり、数分間で終るような演説であれば、多くの敬称を省略する。

当を得た敬称は、丁重さの表れだけではない。それは聴衆を結びつけ、均質化を助け、雄弁家に聴衆を近づけるといった働きをする。敬称が多少なりとも慣例や伝統によって定められているといった幾つかの演説タイプ（大使演説、教会演説、軍事演説、法廷演説）を除く演説では、雄弁家が敬称の選択や組合せについての幅広い可能性を持っている。一般的に言つて、感動を誘うデモンストラティブな演説では、親密な間柄（友人、兄弟、朋友）を示す敬称を用いるようにし、デリベラティブな性格を有する演説、特に講義や講演に於いては、威厳のある敬称を用いるようにする事が大切である。

導入の内容自身は本題へと向う聴衆の心の準備をつくり出す。ここでは事柄の重要性を幾つかの言葉でもって明らかにしておく。それと同時に演説の目的や理由を示し、話しの動機を明らかにしておく。事の次第によっては、演説会の開催に尽力された組織委員の方々や出席した

聴衆の方々へ感謝の意を表すことも大切である。特に話しの内容が通俗的なものではなく、かなり重要なものであるとすれば、聴衆に謹聴や思いやりを直接求める事も出来る。

導入に告知を、即ち短かくて、はつきりした演説計画を結びつけることもよくある。雄弁家は本論で述べようとする諸種の問題点の序列についてのあらましをここで知らしておく。告知は特に、法廷での演説や大きな講演、講義に於いて非常に大きな役割を果す。これからなされようとする演説の全内容を目の前に見てとった聴衆は、それぞれの論旨の展開に十分な余裕をもって、心静かに従っていく事が出来る。その他の演説にとって告知は、無駄なものであり、場合によっては邪魔者以外の何ものでもない。弔辞の導入部で、最初に死者の生前の美德について述べ、その後、科学者としての業績に触れ、最後に私的生活での高潔さについて話しをするといった雄弁家は、真の雄弁家ではない。体系を総ての演説は内にはつきりと持っていないければならない。総ての演説がそうであるとは限らないけれども、それを聴衆に知らせなければならぬ。

多くの場合、雑誌や招待状で公けにされた、演説の論点を明らかにする短かい報知が、導入の告知にうまく取って代っている。説教では、導入がしばしば福音書の朗読から成り立っている。

導入の長さは全演説の長さに比して、釣合のとれたものでなければならぬ。演説の半分を占めるような導入は導入ではない。導入は通常、演説の六分の一から一〇分の一までの幅を有している。演説が長いものであればある程、全体に比して導入は短かいものとなる。四分間の挨拶は、一分間の導入を持つこともあるが、四時間に渡るブレードでは、一時間の導入をなすことなど不可能である。

演説の幾つかのタイプでは、導入が敬称だけであるとか、一つか二つの文章で終るといった非常に短いものであることもある。雰囲気や演説の目的に完全に調和していたり、聴衆の心の準備を特に必要としない場合には、本論に直ちに進むことが出来る。こうしたものに、軍隊での演説、教会での演説、乾杯演説、称賛演説、基調演説、その他の式辞挨拶がある。

異質な聴衆の前でとか、ちぐはぐな会場でといったいつもと違った雰囲気の下で演説をなす場合、導入を適当に長くしなければならない。それは雄弁家の音声や表現方法、雄弁家自身に聴衆をなじませる事を可能にさせ、更に彼自身、自分の地位を確固たるものとする事が出来る。聴衆の性格を見守りながら、よりしつかりとした結びつきを創り出し、真の聴衆へと彼等を変えていくと共に、自分の演説をその時の状況に合せていく事に成功する。出来ることなら雄弁家は、自己と聴衆の間に必要な接触が生れて来るより前には、演説の本論に踏み込むべき

ではない。この事が導入の主たる目的の一つである。

本論(II)は、とても様々な形態をとることが出来る。それはたった一つかそれ以上のパーツから成り立っている。パーツの総てはそれぞれ一つかそれ以上のポイントを取っており、総てのポイントとはピリオドやセンテンスといった形で表された一つかそれ以上の文章から成り立っている。これ等の総ては見わけがつかない程、深く結びついている。

本論は古典的パターンに従えば、提示、説得、論破といった三つのパーツから成り立っており、それをここではA、B、C、という文字で表わしている。提示のパーツは1、2、3、……という数字で表されており、そこでは複数の事実を紹介している。複数の事実、論証や反論は、同程度に重要であり、お互いに独立しており、これ等のパーツ（提示、説得、論破）の総てに、それぞれのポイント（事実、論証、反論）がのっかり、順次織りなされている。これ等は同程度に重要であり、お互いに十分独立性を有している。パーツの中にあるこれ等の総ては、はっきりした結論（x、y、z）を導き出しており、これ等の総ての結論から最終的な結論（K）が得られる。

こうした本論のパターンは次のようになる。

$$A \left\{ \begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{smallmatrix} \right\} x \rightarrow B \left\{ \begin{smallmatrix} 2 \\ 3 \\ 4 \end{smallmatrix} \right\} y \rightarrow C \left\{ \begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{smallmatrix} \right\} z \equiv x + y + z = K$$

もし事実や論証、反論が順次、論理的に連なっているとすれば、パターンは次のようになる。

$$A (1 \rightarrow 2 \rightarrow 3) \rightarrow x \rightarrow B (1 \rightarrow 2 \rightarrow 3 \rightarrow 4) \rightarrow y \rightarrow C (1 \rightarrow 2 \rightarrow 3) \rightarrow z \equiv x + y + z = K$$

パーツの中の一つだけに、それぞれのポイントが順次連なっており、他のパーツはそれ等が同列にあり、独立性を有するものであるとすれば、パターンはそれに見合った形をとり次のようになる。

$$A \left\{ \begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{smallmatrix} \right\} x \rightarrow B (1 \rightarrow 2 \rightarrow 3) \rightarrow y \quad C \left\{ \begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{smallmatrix} \right\} z \equiv x + y + z = K$$

それぞれのポイントの総て、あるいはそれ等の中の幾つかだけが複数の文章（a、b、c、……）から構成されている。こうした場合のパターンは独特な変化をなしている。

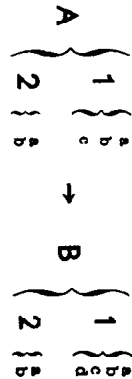
$$A \rightarrow a \rightarrow b \rightarrow \left\{ \begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \end{smallmatrix} \right\} x \rightarrow B (1 \rightarrow 2 \rightarrow 3) \rightarrow y \rightarrow C \left\{ \begin{smallmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{smallmatrix} \right\} z \rightarrow 2 \left\{ \begin{smallmatrix} a \\ b \\ c \end{smallmatrix} \right\} \rightarrow x \equiv x + y + z = K$$

右に示したパターンは——もちろん、これと違った他のパターンをとる事も出来るが——主に法廷演説や政治演説に関するものである。他の演説はこれ等に従わないのが普通である。演説のタイプや具体的な内容に左右されて、パターンは様々な変化をなす。非常に単純な講演、例えば或る訪問国で得た印象談、といったものは、四つのパーツ（国、人間、社会生活、文化）から成り立つ本論を持っている。パーツの総ては複数のポイント、例えば、社会生活・政党、企業連合、協同組合、ジャーナリズム、文化・芸術、教育といったものから成り立っている。総てのパーツから一般的な結論が得られる。

そしてパターンは次のようになる。



こうした講演は、また違った他の形式でなすことも可能である。例えば、1/天然資源、(a/鉱山、b/森林、c/肥沃な大地) 2/工業 (a/重工業、b/軽工業) といったポイントを有する物質文化をAとし、1/芸術 (a/文学、b/絵画芸術、c/演劇、d/音楽) 2/教育 (a/義務教育、b/高等教育) といったポイントを有する精神文化をBとすれば、この演説のパターンは次のようになる。



本論のあらゆるパターンを細かく全部紹介する事は、ほとんど不可能である。それ等の総ては、テーマの数や雄弁家の数に匹敵するほど膨大なものである。だが一般的な法則といったものは存在する。具体的な内容や目的に左右される総ての本論は、意識的に織りなされたものでなければならぬ。演説はいかなる種類のおしゃべりでもない。それはばらばらに集合させられたり、お互いに混り合された思いつきの思考から出来上るといったものではない。演説は多くの石から芸術的に造り上げられた官殿である。それはあちこちに散らばっている石の集合体ではない。

本論の建築構造は、雄弁家の知的能力や芸術的才能の表れである。パーツ、ポイント、センテンスといったものに本論をうまく分割したり、それ等の間に優れた均衡をつくり出したり、それ等を同時にうまく結合さすといった事が優れた本論をつくり出す質的条件である。

帰結（Ⅲ）は、演説の結論をなす部分である。結論は本論の中でなす事も出来る。時にはあらゆるポイントのすぐ後であったり、いつもはそれぞれのあらゆるパートを述べた後に、結論をもって来る。これ等の結論は次のポイントや次のパートの跳躍台である。最終的な結論は、これと違った意味をもっている。それは次の新しい結論へと至る過程としてではなく、本論で述べた思考の展開を決定的な形で聴衆の心に焼きつけるといった目的をもって、論旨の総てを要約するものである。

本論の最後に於いても結論をなすことが出来る。それは場合によっては新しい本論の展開を誘発することにもなる。これ等の場合は、それがもちろん、最終的な結論としてなされるのではなく、本論の結びとしてなされているのである。

帰結は演説の最も感動的な部分である。前のパートで雄弁家が専ら知性にのみ向って話しをするとか、知性に重きをおいて話しをしたとしても、ここでは何にもまして感情を重視した話し方をしたり、感情に向って話しをする。本論で自己の論理を展開して来た彼は、自己の思想を有利に導びくために、決定的な一撃を加えようと最後の挑戦をなす。

帰結の内的な力は形の上に反映されている。雄弁家の音声は、強さ、高さ、音色の観点から

見て本質的に異って来る。彼の身振りはとても大きな動作を伴うものになるか、全くその姿を隠してしまうかのどちらかである。彼の姿勢や最も高い音調でなされる言葉は、演説が最終的な段階に來ている事を示している。

音楽作品で人々が最後の樂章を前もって感ずる事が出来るように、優れた演説に於いても、最後の文章を前もって感じとる事が出来る。交響曲を聴いている聴衆の心の中に、最後の樂章によつてかきたてられた、かろうじて持ち堪えている並優れた高貴な感情の高まりが生れて来るように、終結を告げる磨き抜かれた文章でもって、心をかきたてられた弁論聴衆は、はりさけんばかりの興奮状態にある。こうした芸術的享樂や知的享受がもたらす満足感が、最後の樂章の後とか最後の文章の後に、神経の急速な緩和を生み出し、歓呼や自然に湧き出する拍手かつさいの中で、心の緊張をほぐしていく。

導入の時のように歸結もまた、入念に、遂語的に仕上げられた言葉を用意しておかなければならない。周囲の状況によつて—最も適切なものを選んだり、幾つかを織りなして使ったり、それ等を織り混せて新しい歸結を即興的に作り出したりする事が出来るように、歸結の複数の變形を用意しておく必要がある。

帰結は通常、二つのパーツから成り立っている。中心的な結論を結果として生み出す前の結論の短い要約は、本論と帰結の間の橋渡しをする。外見上より見てこの中心的結論は、本論に属しているというより、むしろ帰結の方に属している。だが、時にはそれが本論のもう一つの展開の前にあることがある。この場合、もちろん、それは帰結に属しているのではない。

帰結の第二のパーツは、本論で述べた思想を受け入れさせようとする――直接的、あるいは間接的な――感動的呼びかけである。一番最後の文章は最も力強いものであり、それがなされる音調は演説が終った事をはっきりと示している。最も悪い方法は、終りを示す言葉でもって演説を締めくくるやり方である。「これで演説を終わります」とか「傾聴ありがとうございました」又は、これと同等の言葉を用いることは、場合によっては必要なこともあるが、感心すべき事ではない。話しの結び方を知らない人達だけが、演説に終止符を打とうとしてこうした素朴な手段を活用する。

雄弁家が事前に準備しておいた帰結を諦めなければならないといった事がある。会場で予期せぬ出来事が起ったとか、会場の雰囲気新しい考えをもたらしとか、演説の展開が新しい帰結を求めているといった場合には、用意しておいたものよりも優れた帰結を必要とする。こうした場合、雄弁家は帰結のために新しい考えをなし、事前に用意しておいた帰結を諦めてし

まうか、あるいは二つの考えを秤にかけて、後になるほどより強くなるように、場合によっては両方とも活用するといった事をすばやく決めなければならない。

事前に考えておいた本論を述べ終るよりも前に、演説を締め括る事が必要である場合がある。様々な理由から雄弁家が導入の部を拡大せざるを得なかったり、幾つかのポイントを詳細に論じたり、予期していなかった説明を加えたり、聴衆の警句に答えなければならない事がある。これ等はその分だけ演説を長くしてしまうことになるから、多くの優れた考えや事前に用意しておいた力強い論証を放棄して、雄弁家は早めに演説を切り上げなければならない。こうした断念は勇気が必要とする。それは雄弁家の構成要素の一つでもある。これ以上話しを続けたならば、演説自体が余りにも長くなりすぎて、全体を危険にさらすことにもなりかねないと雄弁家が見て取ったとすれば、すぐにも演説を切りあげなければならない。

この場合、すでに述べた本論に、用意しておいた帰結をくつつける事も出来るが、演説の中で実際に表現された思想に最もびつたりとした新しい帰結を即興的に作り出すことが出来れば更に良い効果が得られる。

早過ぎる帰結の一例をあげ、それについて述べておきたい。白熱した演説は、思いがけない

拍手かつさいをもたらずほど聴衆を熱狂させる。それが本論の始めであつたり、中腹で呼び起されたとすれば、雄弁家は自己の考えの継続的展開に対して大きな支持を得たことになる。しかし、聴衆が帰結の部で雷鳴の如き拍手かつさいをなしたのであれば、雄弁家は即座に、自分が用意しておいたものよりも更に優れた帰結をなせるかどうか思案しなければならない。優れた雄弁家はこの場合、事前に用意しておいた帰結を、期待すべき効果をあげ得ないものとして見てとるから、それを放棄する。

音楽作品が幾つかの終和音を有しており、それ等の総てが原則的には終樂節をなしているのだけれども、実際には新鮮で、印象的な協和音を創り出す予備音を意味しているように、帰結は普通、幾つかの漸進的文章から成り立っている。最も重要な事は漸層法をなすことである。次に続く文章は、前の文章よりも常に力強いものであり、最も印象的な文章が必ず最後になるようにする。それは賛同を呼び起すものでなければならぬ。前の文章が賛同を呼び起すものであつたとすれば、更に優れた言葉でもってなされねばならない。

帰結の長さは全演説の長さに呼応している。帰結は導入よりも多少短かめであるのが普通である。それはたった一つの力強い文章から成り立っている事さである。特に、途中で切り上げたり、時間的余裕のない場合の帰結は非常に短かいものである。

ブルータスの演説(117)は導入(I)、本論(II)、帰結(III)の三つに分割することが出来る。

導入は敬称(A)、傾聴への呼びかけ(B)、という二つのパーツから成り立っている。それは告知を欠いており、次のようになっている。

(A)、ローマ市民諸君、わが同胞、わが愛する友人諸君に告げる。

(B)私の話しを聴き、その言わんとする所を汲み取ってもらいたい。さあ、耳を澄まして静かにしていき、私が何より名誉を重んじる男である事を信じ、かつまた私の人格に対する日頃の信頼を思い起して私の言葉を信じてもらいたい。諸君の英知に照してみ、私を裁く分には何の遠慮もいらぬ。その良き裁き手となるために、諸君の審美眼を大いに働かせざるが良からう。

本論は一貫性を有しているものの、それは三つのポイントを包含している。(1)、シーザーに対するブルータスの個人的な関係、(2)、祖国へのブルータスの関係、(3)、シーザーに対するブルータスの個人的友情を犠牲にしてまでも、共和国に利益をもたらそうとしてやったという殺害行為の正当化。

帰結は二つのパーツから成り立っている。最初のパーツでブルータスは、今こそ総てのロー

マ市民が共和国の中で、自由と幸せを手に行っているのだといって、前で述べた演説を要約している。第二のパートで、ますます意気盛んなブルータスは、祖国がそれを求めるのであれば、いついかなる時といえども自分自身に刃をつきつける事もやぶさかではないと宣言している。

(A)、おお、マークアントニオが喪主となって、シーザーの亡骸がやって来た。彼はシーザーの死に与りこそしなかったけれども、その恩恵をうけ、国政担当の椅子を与えられる事になるであろう。——いや、諸君も同様、誰一人としてそうでないものはいないのだ。(B)、さて、私はここを発ち去るけれども、最後に一言っておきたい。——この私はローマのために最愛の友を殺してしまった。もしも将来、祖国がそれを求めるのであれば、いついかなる時といえども、われと我が胸に、その同じ刃を突きつけるであろう。

従って、この演説のパターンは次のようになる。

(I) 導入

(II) 外論

(III) 結論

$$A \rightarrow B \rightarrow \overset{A}{\underset{2\ 1\ 3}{\rightarrow}} \rightarrow x \rightarrow A \rightarrow B$$

導入は帰結よりも多少長めであり、一方、本論はシーザーへの愛、それより更に深い祖国への愛、シーザーの死といったお互いに切り離せないほど強く結びついた三つのポイントから成

り立っている。第二のポイントは最も大切なものである。それは殺害を正当化するものである。だから、ブルータスはこの事に最も大きな注意力を注いでいる。彼は第一のポイントの総ての文章の中で、その事を深くからみ合せている。

アントニオの演説(118)もまた――彼自身は巧妙にも追悼演説だと名付けているが、本質的には政治演説である。――導入、本論、そして帰結から成り立っている。

導入(I)は、敬称(A)や傾聴への呼びかけ(B)の外にも、死者を葬むるという目的(C)をも含んでいる。

本論は五つの簡潔なパーツから成り立っている。

(A)、殺害行為にいたった高潔な懷しをほめ讃えながらも、ブルータスへの精一杯の皮肉を込めた部分、それは三つのポイントから成り立っている。(1)、ローマの富裕、(2)シーザーの慎しみ深さや(3)心のやさしさは、彼が野心家ではなかったという証明をなすのに大きな役割を果している。

(B)、ブルータスへの皮肉を更に強めて、遺言状のある事をほのめかしながら、群集をますますかきたてていく部分。その目的はシーザーが民衆の心やさしき友であったという事

を示す所にある。

(C)、ブルータスとその共謀者達の反逆行為を示す部分。それは次の三つのポイントから成り立っている。(1)シーザーの体を主謀者達が刺したという場所の提示、(2)ブルータスのシーザーへの愛とシーザーに最後の止めを刺した無慈悲の一撃の間にあるコントラスト(3)シーザーの生涯と共にあつた民衆の生活、結論(x)は、今や私がそして諸君が、ともどもに打ち倒されたのだという言葉でもって、シーザーの死は民衆にとつて強い痛手である事を主張している。この異状に興奮した場面の後に、当然続くのが、

(D)三つのポイントを持った反乱への呼びかけである。(1)反逆者達に対する強い義憤をかきたてるために、彼等がとつた行為に正当な理由のない事を示している。(2)ブルータスの才知にたけた弁論に比して、自分自身は一介の野人にすぎないと言っている。(私はもとより弁舌の士ではない、その点ブルータスの比ではない。)(3)反逆への間接的な呼びかけ(私がもしブルータスであつたら、そしてブルータスがアントニオであつたら)、この結論が(反乱への呼びかけ)、目的を遂げたと見てとつた彼は、最後の部へと進んでいる。

(E)遺言状の朗読をもつて、彼がすでに得た効果を更に確固たるものに行っている部分。

帰結は次のように、とても短い文章から成り立っている。「シーザーのようなかかる人物がい

て整理統合され、必要条件が満されてはいるが、それはその後の演説部分、Eによつてもまた力強く支えられている。帰結は全演説を簡潔に要約していると同時に、群集を暴徒化している。

アントニオの演説に於ける導入は、帰結よりもかなり長いものとなっている。それは始めに、彼が自分にとつて不利な聴衆を前にしているからであり、本論に入るまでに長い準備をなさねばならなかった事からも当然の事である。帰結の部では、もう聴衆は彼の側にあつたし、彼は十分に聴衆を支配してしまつていた。だから、長い帰結をなす必要はなく、ただあげ得た効果に触れるだけでよかつたのである。

本論を構成する五つの短かいパーツは、形態上均整のとれたものであり、次の五つの概念の論理的羅列に答えるものである。

シーザーは野心家ではない——彼は民衆の心やさしき友である——彼の死は民衆にとつて大きな痛手を意味する——従つて民衆は反逆者に対して立ち上らなければならない——シーザーの遺言状は、民衆への彼の愛の証しを示す新しい証言者である。

演説のすぐれた分割に慣れるためには、名のある雄弁家の演説を分析してみることである。特にキケロネスやデモステネスの演説は内容の観点からも、また形態上の観点からも真に宝石

に価値するものである。優れた演説を聴いてもまた、その内容や形態を分析する事が出来る。

- (117)、付録、プルータスの演説を参照の事
(118)、付録、アントニオの演説を参照の事

三、プレパレイションとエロキューション

これまで雄弁家、聴衆、そして演説自身の総てについて述べて来たが、ここではプレパレイションの技術や実際の演説、エロキューションについて少し述べておきたい。

総ての雄弁家にとって価値ある重要な法則は、「準備もなしに話しをしてはならない」と言うことである。この法則を——どんなに偉大な雄弁家と言えども、あらゆる演説をなすに当って——最も意味のない演説をなすに当っても、必ず順守しなければならない。

演説の下準備は實際の演説をなすに當つて、自分は何を話したいのかという事を、前もって詳しく知る事を意味する。数日かけて、又は数週間も前から下準備をなすこともあるが、時には数分間、又は数秒しか無いといったこともある。だが、常にそれを準備しなければならない。それは聴衆に対する礼儀でもあり、義務でもあり、雄弁家自身の自愛でもある。

準備もしていない所に、演説をしてもらいたいという誘いが来て、雄弁家がどうしてもそれを避けることが出来ないとか、そうした不意の願いを断る事が出来なかつたとすれば、その場に合つた考えを見い出すための多少の時間がもてるように工夫をこらす必要がある。それを見い出す前に話しをしてはならない。数多くの実践を積み重ねた最も優れた雄弁家のみが、例外的に下準備もなしに話しを始めることが許される。しかし、彼等もまた一席をたち上る間にと、演壇へと向うゆつくりした歩みの中で、あるいは導入をなしている間に（こうした場合、多少型にはまつた言い方をする）本論や帰結を思考している。

通常、雄弁家は自分の書齋の中で演説の下準備をする。下準備は第一に演説資料の収集、第二にその資料の整理といった二つの異なる作業から成り立っている。

雄弁家は先ず始めにテーマを選択し、演説の場面を思考する。自己の任務によく通じている

のであれば、それをなす場合の事に全力を傾注する。あらゆる面から問題を掘り下げる事が必要であり、古い知識を払拭し、新しい知識に入れ換える必要がある。雄弁家が事実や証明、論証をまとめあげる場合、テーマに関係する文学を調べあげたり、場合によつては専門家や経験者に相談したり、文献を捜し求め、それを細かく調べあげると共に、それを整理し、体系的にまとめあげなければならぬ。こうした作業の間、演説の中で活用出来るとおもわれる総ての重要な事柄については、短いメモを採っておく。名前や日付、著書の題名、すでに得た知識の短かい要約、使いたい引用文の書き出し、これ等についての細かな見出し、——これ等の総ては、演説の下準備に際して雄弁家を大いに助けることになる。

このようにして、豊富な資料を集めた雄弁家は、自己の作業の第二段階、即ち演説計画の作成へと進む。必要とされるパートにそれを分割していくというようにして、即座に本論を仕上げていく。総てのパートに対して、これから話そうとするポイントやセンテンスをあらかじめ見通しておき、これ等の後に導入や帰結をきめ細かく仕上げていく。すでに述べておいたように、導入や帰結は幾つかのバリエーションを作成しておく和良好的。導入や帰結はほとんど遂語的に仕上げておく。特に重要な演説の導入や帰結は、細心の注意を払って仕上げられなければならない。そして、それを暗唱してしまわなければならない。それは実際の演説に際して、前もって用意しておいた通りに話しをしなければならないという事を意味しているわけではない。

それは雄弁家自身の自信をつくり出す大きな支えとなるものである。例え、雄弁家が優れた考えを見い出せなかったとしても、あらゆる場合に、当惑から自分を抜け出さしてくれる既に用意したものがあるといふ安心感を抱く事が出来るから、自分の演説の導入や帰結を暗記してしまっている彼は、必要な場合に、他の導入や帰結をためらう事なくなせるのである。

本論の各パートやポイント・センテンスは詳細に練り上げるといふ事はしないで、時にはたった一つの語彙をもつてというようにして、考えだけをメモしておく。この覚書はこれを用いて演説をなすという目的を持つているのではなく、述べようとする考えとか、述べようとする話しの順序について、ただ雄弁家の記憶を呼びもどすといった役目を果すものである。「語彙や文章を覚えておくのではなく、思想だけを覚えておくようにせよ。」という古い法則がある。この事は総ての文章や総てのピリオッドを細部に渡るまで作っておき、それ等を暗記してしまうというのではなく、言い表そうとする考えだけを覚えておくという事を意味している。これ等の考えは、後に聴衆を前にした実際の演説の中で、それに最もふさわしい言葉の衣で被われる事になる。

雄弁家によって活用されるメモは、演説がその周りをぐるぐる廻るルージャファデーノ（糸車）である。実際の演説の中で、諸々の理由から、話しの内容がテーマからかなり離れてしま

うといった事が起つても、彼の記憶は忘れ去られた話しの筋道へとすぐにも引き戻す働きをしてくれる。偶然にも、彼の記憶が突然、彼を裏切るような事があつたとしても、秘かに、しかも素早くメモに目をやる事によつて道を見い出す事が出来る。だから、メモは演説資料の体系化にとつて必要なばかりではなく、それは実際の演説の中での有益な助勢者でもある。

演説の下準備で順守すべき事は、出来るだけ多くの資料をそろえ、出来るだけ深くそれを調べあげる事である。こうしてそろえた資料の中から最も優れた部分のみを、具体的な演説パターンの中に組み込ませたり、計画した演説の中から最も重要な部分のみを述べたりする事が、実際の演説をなす瞬間には最も優れたものとして映るのである。最大限に多くの資料を調べあげ、最少限の企画をなし、最も少くしゃべるようにする。しかし、この限られた言葉は、企画したり、調べあげた総ての中のエクスであり、核となるものでなければならぬ。扱った膨大な資料の中から、具体的な演説計画の必要性を満たすために、最も優れたものを選び出す事は容易である。だが、逆の道は難しいというだけでなく、それは不可能でさえある。

実際の演説をなすよりも前に、雄弁家は幾度も自分のメモに目を通しておかなければならぬ。各々のパーツやポイントを繰り返してみ、自分がそれ等の順序を細かく覚えていくかどうか確認してみる。演説を始める前にもう一度、自分のメモに目を通し、導入の少くとも最初

の文章だけでも暗唱してみてもから話しを始めなければならない。

第十四章

結 論

全世界を通して数方の人達が、公けの席で今日も話しをしている。数百万の人達がそれ等の話しを聴いており——それ等を批評している。多くの話し手の中には偉大な才能の持主がいる。そしてその中の幾人かは眞の偉大な雄弁家である。

偉大な雄弁家を聴衆は自ずと見分けている。しかし、何故そういった雄弁家がもてはやされるのか、何故彼は聴衆を引きつけ、聴衆の心をつかんで離さなかつたり熱狂させ得るのか、他の雄弁家は何故同じ効果を得る事が出来ないのだろうかという事を殆んど聴衆自身、詳しく知らない。聴衆は通常、内容や形態を解析する事を知らない。聴衆は演説やその内部構成に於ける調和を調べようとはしないし、音声の抑揚も、それぞれの身振りが持つ意義も、会場の氣質も、優れた演説のもつ数多くの要素も求明しようとしなない。聴衆は一括してそれを感じとっており、全体としてそれを批評している。表面的な印象でもって聴衆は演説を優れたとか、素晴らしいとか、心を搔き立てるとか、深みがあると見て取るし、一方、他の演説は劣った無意味な

ものとして考えてしまう。同じ表面的な印象でもって、聴衆は雄弁家を偉大であるとか、力強いと評価し、他の雄弁家を見て退屈な話し手だと判定してしまう。

実際、優れているとか、劣っているといった一般的な印象の裏には、こうした演説のもつ多くの要素とか、雄弁家や聴衆自身の数多くの要素が隠されている。偉大な演説を創り出すためには、これ等の総ての要素とか総てのデテイルが注意深く、精妙に細工されているとか、愛情を込めて磨き抜かれているといった事だけでは十分ではない。それ等を結合させ、芸術的味わいを持つ、統一性のある全体を創り出す事が大切である。こうして始めて、演説は真にみごとな作品となり、真の芸術となる。こうした時にのみ、優れた内容は、同時に大理石の立像ともなり、調和した多くの色彩で描かれた絵画であり、優れた響きを持つ音楽ともなる。この創造に自主的に参加している聴衆は、思考の深さを賛美するだけでなく、形態の芸術性をも味わっている。内容は形態によって実際に浮き彫り化されて行き、より強力なものとなっていくし、形態は内容を通して表現されていく。内容と形態はお互いに支えあったり、お互いに支えられながら一体となっていく。

これこそが―才能や努力の結集された芸術作品―真の芸術である。

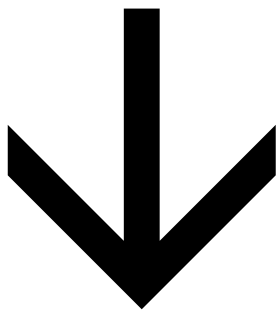
才能は生れもつて有する自然からの授りものである。それは教える事も、学び取る事も出来ない。それは存在したり、存在しなかったりする。しかし、才能を伸す事は可能である。それをなすのが努力や実践である。

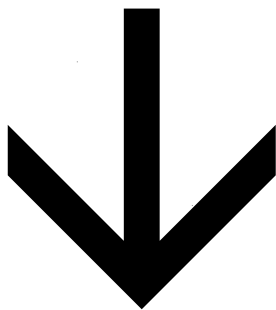
努力は聴衆に向つて話しをする総ての人達に対して或る程度までは普遍的なものであり、共通したものである。幾つかの雄弁学上の原則は、演説の総てのカテゴリーに対して、聴衆の総てのカテゴリーに対して、雄弁家の総てのタイプに対して正当なものである。その他の原則は特殊なものであり、雄弁法の特定の分野にのみかわるものである。しかし、両方とも、法的な規則や厳格な規則について論じているのではなく、幅広い原則について説かれている。これらの原則は——一般的なものであったり、専門的なものであったりするのだが、重要なものであり、且つ学習可能なものである。聴衆に向つて話しをしたいというのであれば、如何なる人達といえども、それを無視する事は出来ない。

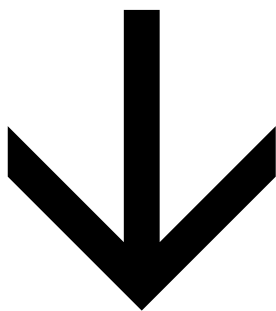
総ての雄弁家の任務は、現実の状況にうまく合せる事であり、演説の具体的な目的に、自分の個性にそれ等をうまく適合させる事である。雄弁家が自己の個性に合せて、一般的な原則を採り入れる技量もまた彼の才能の表れである。どのような雄弁学も、それには力を貸してはくれない。それは定式文や模範文例の収集物ではなく、デリケートな芸術についての理論である。

これ等の一般的な原則の探求や解析、確立をなして始めて、その任務が終結する。しかし、これで雄弁家の任務が完了したのではない。これから雄弁家の個人的な真の努力が始まるのである。厳格な教示というよりも、弾力性のある助言や勧告の性格を強く有する今まで述べて来た雄弁学上の原則の上に立って、雄弁家は自分固有の性格や気質に合った規則を見い出さなければならぬ。雄弁学の知的な活用や理知的な応用が必ずしも有益なものではなく、実り豊かなものではなかったとすれば、才能のない下劣な模倣は演説を死滅させてしまう。

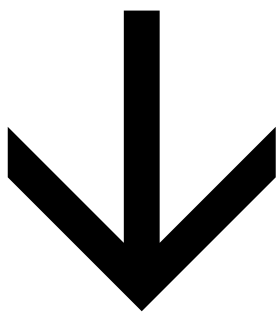
雄弁学は芸術の域へと弁論を高める。それは芸術的に織りなされた、それだけ説得力のある思考が、立体的な広がりや深遠な視野を切り開いていく道を指し示している。しかし、思考の目的は常に高潔ではない。それは時にはエゴスティクな、愚劣極まるものを包み隠している事がある。陰惨な目的のために悪用された雄弁学は、それが高潔な思想の普及にとって有益であり、なくてはならぬものであるのと同程度に、非難さるべきものである。雄弁家達の手の中にあって―発展へのこのアバンギャルド―それは民族間の愛、寛容、真理、平和、そしてヒューマニティのための闘いに於ける最高の武器である。この武器を活用して、ヒューマニティの実現のために闘わなければならない。







付 録



PAROLADO DE BRUTUS*

(El "Julio Cezaro" de William Shakespeare, III-a akto,
2-a sceno)

Brutus :

Romanoj, civitanoj kaj amikoj !

Aŭdu min pro mia afero kaj silentiĝu, por ke vi aŭdu ! KREDU al mi pro mia honoro kaj respektu mian honoron, por ke vi kredu ! Juĝu min per via saĝo kaj vigligu vian sagacon, por ke vi pli bone juĝu !

Se en tiu ĉi kunveno sin trovas iu kor-amiko de Cezaro, al tiu mi diras, ke la amo de Brutus al Cezaro estis ne malpli granda ol la lia. Se, do, tiu amiko demandas, kial leviĝis Brutus kontraŭ Cezaron, jen estas mia respondo: Ne tial, ĉar mi malpli amas Cezaron, sed tial, ĉar mi pli amas Romon. Ĉu vi preferus, ke Cezaro vivu kaj vi ĉiuj mortu sklavoj, aŭ ke Cezaro mortu, por ke vi ĉiuj vivu kiel liberaj homoj ?

Car Cezaro min amis, mi lin priploras; ĉar li estis feliĉa, mi pro tio ĝojas; ĉar li estis brava, mi lin honoras, sed ĉar li estis

Komentario :

La parolado de Brutus estas abstrakta apologio de altprincipa homo. Klasika oratorajo kun kadencaj antitezoj, noblaj alvokoj, alta stilo.

La mankoj kaj vundaj punktoj estas pluraj. Brutus erare supozas, ke la amaso komprenos liajn abstraktajn, principajn idealojn. Fakte ĝi entuziasmiĝas nur pri la patoso. En la parolado mankas detala pruvo pri la kulpo de Cezaro. Tial la mortigo ne estas sufiĉe pravigita.

Brutus faras pluan eraron, kiam li fori-

(*) La paroladoj de Brutus kaj Antonio estas prezentitaj ĉi tie proze, en formo adaptita al la postuloj de retoriko kaj al la eksplikoj, kiujn mi donis en diversaj lokoj de tiu ĉi verko, prenante partetojn el la du paroladoj kiel ekzemplojn. Mi vaste utiligis la brilan tradukon de ambaŭ paroladoj, publikigitaj en la ĵus aperinta Angla Antologio, (eldonita de Universala Esperanto-Asocio, Rotterdam, 1957), kiun faris Reto Rossetti.

ambicia, mi lin mortigis. Estas larmoj por lia amo, ĝojo por lia feliĉo, honoro por lia braveco kaj morto por lia ambicio !

Kiu el vi estas tiel servuta, ke li volus esti sklavo ? Se iu, li parolu, ĉar lin mi ofendis. Kiu el vi estas tiel kruda, ke li ne volus esti Romano ? Se iu, li parolu, ĉar lin mi ofendis. Kiu el vi estas tiel malnobla, ke li ne amas sian patrujon ? Se iu, li parolu, ĉar lin mi ofendis. Mi paŭzas por la respondo.

(Krioj : Neniu, Brutus, neniu !)

Sekve, neniun mi ofendis. Mi faris al Cezaro nur tion, kion al Brutus vi rajtas fari. La afero pri lia morto estas solene enskribita ĉe la Kapitolo: sen malgrandigo de lia gloro, kiun li inde meritis, kaj sen troigo de lia kulpo, pro kiu li suferis morton !

(Eniras Antonio kaj aliaj kun la korpo de Cezaro en nefermita ĉerko).

Jen venas lia korpo, funebrata de Marko Antonio, kiu, kvankam li ne partoprenis lian mortigon, havos tamen profiton de lia morto: rolon en la respubliko — kaj tion saman ja ĉiu el vi havos.

Nun mi foriras, sed sciuj: kiel mi mortigis mian plej karan amikon por la bono de Romo, tiel mi havas ankaŭ por mi mem tiun saman glavon, kiam plaĉos al mia patrujo postuli mian morton.

(Ĉiuj: Vivu, Brutus, vivu! Krioj: Farigu li Cezaro! Per li la bonaj ecoj de Cezaro reĝos!)

ras kaj lasas al Antonio liberan agadkampon. Li estas tiel serene fida pri sia pravo, ke la eblo de kia ajn refuto fare de Antonio tute ne okupas lian menson.

Post kiam Brutus finis sian paroladon, aŭdiĝis el inter la amaso krioj, postulantaj, ke li farigu Cezaro. Evidenta pruvo, ke la amaso ne komprenis liajn demokratiajn, respublikismajn ideojn.

Antaŭ ol foriri, Brutus petas la amason resti kaj aŭskulti Antonion. Li opinias, ke la parolpermeso donita al Antonio pruvos al la amaso la justecon de la konspirintoj.

La forman analizon de la parolado vidu sur p. 236 de tiu ĉi libro.

ブルータスの演説

(ウィリアム・シェクスピア、第3幕、節二景から)

ブルータス：

ローマ市民諸君、わ同胞、わが愛する友人諸君に告げる。

私の話しを聴き、その言わんとする所を汲み取ってもらいたい。さあ、耳を澄まして静かにしてくれ。私が何より名誉を重んじる男である事を信じ、かつまた私の人格に対する日頃の信頼を思い起して私の言葉を信じてもらいたい。諸君の英知に照してみても私を裁く分には何の遠慮もいらぬ、その良き裁き手となるために、諸君の審美眼を大いに働かせるがよからう。

この集いの中にシーザーの親しき友がいるならば、私はその人に向って言おう、シーザーに対するブルータスの愛は、決してその人に劣るものではないと。それなら、何故にシーザーをブルータスは倒したのかと反問するであろう。それに対する私の答えはこうである：それはシーザーを愛していなかったからではない、ローマを彼以上に愛していたからである。諸君はシーザー1人生きて、諸君の総てが奴隷の身に甘んじるか、それとも、シーザーを倒して、万人ことごとくが自由の身として生きる事を望むのであろうか。

私を愛してくれたシーザーを想えば、涙を隠し得ない。幸せに包まれたシーザーの半生を想う時、私の心ははずむ。勇敢だったシーザーを想い、私は彼を讃美して止まない。だが、野心に身を委(ゆだ)ねたシーザーを見た時、私は彼を刺したのである。彼の愛には涙を、幸運には喜びを、勇氣には尊敬を、だが野心には死あるのみである。

諸君の中に誰か、自から奴隷の生涯を求めるがごとき陋劣(ろうれつ)な人間がいるだろうか。いるなら名(な)のり出してもらいたい。その人にこそ、私は罪を犯したのだ。君たち諸君の中に自分の視国(しこく)を愛さぬほぞ不遜(ふそん)な者がいるだろうか。いれば名(な)のり出してもらいたい。その人にこそ、私は罪を犯したのだ。諸君の返事をしばらく待とう。

呼び声：そんな奴はいない。ブルータス、1人として
いないぞ。

それなら、誰れにも私は罪を犯していないのだ。私がシーザーになしたその事を、諸君はブルータスになせるであろう。彼の死に関する経緯は議事堂に記録しておこう。それは彼のかつての功績を傷つけるものでもなければ、その死をまぬがれ得なかった事情について、いささかでもその罪を強いるものでもない。

アントニオが登場する。あとからシーザーの遺体が運ばれて来る、棺は蓋が開けられたままである。

おお、アントニオが喪主となって、シーザーの亡骸(なきがら)がやって来た。彼はシーザーの死に与(あずか)りこそしなかったけれども、その恩恵を受け、国政担当の椅子を与えられることになるであろう—いや、諸君も同様、誰1人としてそうでないものはいないのだ。

さて、私はここを立ち去るけれども、最後に一言いっておきたい：この私はローマのために最愛の友を殺してしまった。もしも将来、祖国がそれを求めるのであれば、いついかなる時といえども、われと我が胸にその同じ刃を突きつけるであろう。

一同：死なないでくれ、ブルータス、いつまでも生きてくれ。

呼び者：おれ達のシーザーになってもらおう。

：そうすれば、シーザーの良いところだけが王冠をいただくことになる。

II

PAROLADO DE ANTONIO

(El "Julio Cezaro" de William Shakespeare, III-a akto,
2-a sceno)

(*La amaso bruas malkontente*).

Antonio :

Amikoj !.... Romanoj !.... Samlandanoj !....

Alklinu la orelojn ! Mi ja venas por entombigi Cezaron, ne por glori lin. La malbonaj faroj de la homoj ofte postvivas ilin, dum la bonfaroj foriras en la teron kun iliaj ostoj. Tiel estu kun Cezaro ! La nobla Brutus diris : Cezaro estis ambicia. Se jes, nu, tio estis peza kulpo kaj peze ja Cezaro tion pagis. Nun, laŭ la permeso de Brutus kaj de la ceteraj — ĉar Brutus estas viro althonora kaj ĉiuj ceteraj ankaŭ tre honoraj — mi parolas funebre pri Cezaro.

Mi trovis lin amiko lojala kaj justa, sed Brutus diris, ke li estis ambicia — kaj Brutus estas viro althonora. Al Romo li kondukis multajn kaptitojn, kiuj tributis al la kaso komuna. Ĉu Cezaro per tio montris econ ambician ?

Kiam lamentis la malriĉa plebo, Cezaro kunsente ploris. Ambicio devus esti el ŝtofo pli fortika.... Sed Brutus diris, ke li estis ambicia — kaj Brutus estas viro althonora !

Vi ĉiuj vidis, ke dum Luperkalo tri fojojn mi proponis al li kronon. Tri fojojn li rifuzis ĝin.

Komentario :

Antonio komencas hezite. La amaso estas malamike agordita. Antonio palpas ĝian pulson por trovi la ĝustan vojon. Unua aludeto pri la virto de Cezaro.

Zorgema laŭdo al Brutus kaj al aliaj konspirintoj. En tiu ĉi loko ĝi havas la celon havigi la simpation de la amaso, kiu aplaŭdegis Brutus. La frazo, plurfoje ripetita, fariĝas ĉiam pli kaj pli ironia.

Pruvado, ke Cezaro ne estis ambicia. Unua apelo al emocio de la amaso.

Ĉu tio atestas ambicion de Cezaro?
Sed Brutus diris, ke li estis ambicia —
kaj certe Brutus estas althonora!

Ne por refuti Brutus mi parolas, sed mi
devas diri kion mi scias.

Vi iam amis lin, kun bona kaŭzo. Pro
kia kaŭzo, do, vi lin ne priploras nun?
Prudento! Vi al brutaj bestoj fuĝis; juĝ-
kapablon la homoj perdis! Indulgu min:
Mia koro nun kuŝas en la ĉerko kun
Cezaro! Mi devas paŭzi, por ke ĝi revenu!

*(Li ekploras. Komentarioj de la
civitanoj: Ŝajnas, ke li tamen
iom pravas! Se tion vi pripen-
sas, sur Cezaron granda mal-
justo falis! Mi timas, ke pli
granda plago sekvas! Cezaro,
ja, la kronon malakceptis, kaj
sekve li ne povis esti ambicia!
Pri Antonio: Ha, povra! Liaj
okuloj fajre ruĝas pro plorado!
En Romo ne troviĝas pli nobla
homo ol Antonio!)*

Hieraŭ, unusola vorto de Cezaro estus
povinta kontraŭstari la mondon. Nun li
kuŝas tie, kaj neniuj homoj, eĉ ne la plej
humila, venas por lin omaĝi!

Se mi volus, civitanoj, inciti al vi la
korojn kaj la cerbojn al ribelo, mi ofendus
Brutus kaj Kasion kiuj, vi scias, estas
honoruloj. Ilin, do, mi ne ofendos; prefere
mi ofendos la mortinton, min kaj vin, por
ne ofendi tiajn honorulojn....

Sed jen pergameno kun sigelo de
Cezaro. En lia kabineto mi ĝin trovis. Se
la popolo aŭdus tiun lian testamenton,
kiun — pardonu — mi ne volas legi, ĉiuj
kisas la vundojn de Cezaro kaj trempus

Dua apelo, nun
pli forta, al emo-
cio. Kuraĝa vort-
ludo pri la nomo
de Brutus.

Antonio lasas iom
da tempo, por ke
la amaso povu
digesti liajn argu-
mentojn.

Unua sugesto al
ribelo!

Antonio montras
sian plej fortan
atuton: la testa-
menton de Cezaro.
Li tuj aludas, ke
la popolo profitos
de ĝi. Sed antaŭ ol
diri tion klare, li
ankoraŭ sonigas la

siajn tukojn en lia sankta sango, eĉ petegus hareton pro memoro, kaj, je sia morto, testamentus ĝin kiel riĉan heredaĵon al la posteuloj !

*(Aŭdigas voĉoj : Legu la akton!
Legu la testamenton ! Ni ĝin
aŭdu !)*

Trankviliĝu, amikoj ! Mi ne rajtas ĝin laŭtleĝi. Vi ne devas ekscii kiel vin Cezaro amis. Vi ne estas ŝtipoj aŭ surdaĵ ŝtonoj. Homoj vi estas ! Kaj se vi aŭdus la testamenton de Cezaro, tuj ĝi vin flamiĝus, farus vin rabiaj. Prefere vi ne sciu, ke vi estas la heredantoj de Cezaro, ĉar se tion vi ekscius, kio sekvus ?

(Krioj : Legu la testamenton !)

Ho ne postulu, estu paciencaj ! Mi tro impetis aludante pri ĝi. Mi timas, ke mi jam ofendis la honorulojn, kiuj en Cezaron puŝis siajn ponardojn. Jes, tion mi ja timas !

(Krioj : Ĉu honoruloj ? Perfiduloj ili estas ! La akton, la testamenton !)

Kio ? Ĉu vi do devigas min legi la testamenton ? Stariĝu, do, ringe ĉirkaŭ la kadavro de Cezaro, por ke mi montru al vi tiun, kiu faris la testamenton. Ĉu mi descendu ? Ĉu vi ĝin permesas ?

(Voĉoj : Descendu ! Venu malsupren ! For de la ĉerko, for de la kadavro ! Lokon por Antonio, lokon por la plej nobla Antonio ! .. Antonio descendas.)

kordon de la sentimento. Iom hezite, ne sciante ankoraŭ kiel la popolo akceptos la unuan provbalonon pri ribelo, li parolas en -us formo. Incitante ankoraŭ la scivolon de la amaso, li malkaŝas, ke la amaso heredos el la testamento.

La vorto "honorulo" fariĝas drasta, kaj la amaso reagas favore. Antonio elmanovris, ke unue la amaso eldiru "perfidulo".

Antonio promesas legi la testamenton. Fakte li tion ankoraŭ ne faros. Li nur eluzos la permeson malsupreniri de la tribuno por montri la kadavron kaj tiel ankoraŭ pli impresi la emociojn.

Pretigu larmi, se vi larmojn havas. Vi konas tiun ĉi mantelon. Mi memoras, kiam Cezaro unue ĝin surmetis: en sia tendo, dum somervespero, post sia venko super la Nerveoj. Jen kie tranĉis glavo de Kasio; tie Kasko ŝiris per insida bato; trapikis tie ĉi Brutus, la amata. Kaj kiam li elŝiris la fiŝtalon, jen kiel la sango de Cezaro sekvis kvazaŭ ĝi volus konstati ĉu vere Brutus batis tiel akre: Ĉar Brutus, kiel vi scias, por Cezaro estis anĝelo! Ho dioj, kiel lin Cezaro amis! El ĉiuj tranĉoj, ĝi estis la plej amara, ĉar kiam Cezaro vidis lin bati, maldankemo — pli forta ol la perfidaj armiloj — tutvenkis lin. Lia granda koro krevis tiam kaj, la vizaĝon volvinte en la mantelo, ĉe la bazo de Pompeo-statuo, kiu sangverŝis dume, jen Cezaro la granda falis!

Ho kia falo, miaj samlandanoj! Falegis tiam mi kaj vi, ni ĉiuj, dum la sanga perfido baŭmis venke.

Ha, nun vi ploras, nun kompato tranĉas viajn korojn: Sanktaj estas tiuj larmoj. Karaj animoj, ĉu vi ploras nur pro la vundoj en la vesto de Cezaro?

(Li malkovras la kadavron.)

Rigardu do! Jen li mem buĉe breĉita de la perfidistoj!

(Krioj kaj voĉoj: Ho, kortuŝa vido! Ho, la nobla Cezaro! Kanajloj, perfidistoj! Ni venĝu lin! Venĝon! For! Bruligu! Fajron! Morton al perfidistoj! Silenton por la nobla Antonio! Ni lin aŭskultos! Ni lin sekvos! Kun li ni mortos!)

Antonio elvokas kompaton por Cezaro kaj koleron kontraŭ la murdintojn.

Li ruze mencias la gloran venkon de Cezaro super la Nerveoj — venkon, pri kiu la Romanoj aparte fieras.

Emocio kaj patoso.

Antonio uzas por la unua fojo la vorton "perfida".

Duan fojon li uzas la vorton "perfida".

Post la supra forta kresĉendo, Antonio malkaŝe nomas la konspirintojn "perfidistoj".

Amikoj karaj, dolĉaj, paŭzu iom en via ŝtorma, ekribela tajdo! Honoruloj faris ĉi tiun faron! Pro ĉia kaŭzo privata ili tiel agis, ve, mi ne scias: ili estas saĝaj, honoraj viroj, kaj ili respondos al vi sendube per klarigoj kaj rezonoj. Mi ne venis por ŝteli viajn korojn. Mi oratoro ne estas, kiel Brutus, sed, kiel vi min konas, simpla homo, kiu amas sian amikon. Kaj tion tre bone scias tiuj, kiuj permesis al mi paroli ĉi tie publike. Mi, ja, ne havas spriton aŭ kvalitojn, vortojn aŭ gestojn, nek mi havas la parolpovon eksciti la korojn! Mi nur paroladas ripetante tion, kion vi mem bone scias. Mi montras la karajn vundojn de Cezaro — ĉi dolĉajn, mutajn buŝojn — kaj petas ilin paroli anstataŭ mi. Sed se mi estus Brutus, kaj li, male, Antonio, jen estus Antonio, kiu sciis provoki la animojn kaj enmeti en ĉiun vundon de Cezaro langon, kiu instigus eĉ la romajn ŝtonojn leviĝi kaj ribeli!

(Ĉiuj: Ni ribelos, ni bruligos la domon de Brutus!)

Ho ve, amikoj, kion vi volus fari? Kiel Cezaro meritis vian amon? Vi ĝin ne scias, do mi diros al vi. La testamenton vi jam forgesis!

(Ĉiuj: Ni restu, do, aŭdi la testamenton!)

Jen ĝi, sub la sigelo de Cezaro. Al ĉiu roma civitano, al ĉiu homo li donas po sepdek kvin draĥmoj.

(Voĉoj: Ho, la plej nobla Cezaro! Ni venĝos lian morton!)

Aŭskultu min pacience!

Al vi li lasas, krome, la aleojn, siajn

Sajnigante, ke li pledas por la konspirintoj. li vekas ankoraŭ pli fortan indignon kontraŭ ilin per sia konscie lama defendo. "Honoruloj", kiuj murdas pro "kaŭzo privata" — sovaĝa mokado pri la konspirintoj.

Tre efika paroladparto. Antonio direktas la pensojn de la aŭskultantoj aparte al Brutus, kiun li prezentas kiel grandan oratoron scipovantan per rezonado konvinki la amason, dum li mem prezentas sin naive-sincera parolanto.

Aperta sugesto pri ribelo, sed sugesto farita tre lerte: se Antonio havus la oratoran kapablon de Brutus, tiam li instigus eĉ la romajn ŝtonojn ribeli!

Antonio atingis la ĉefan celon de sia parolado sen uzo de la testamento. Nun li eluzas sian plej fortan atuton. Li legas al la amaso la testamenton kaj tiel plifortigas ĝian decidon agi kontraŭ la konspi-

privatajn laŭbojn kaj la ĝardenojn ĝis la bordo de Tibero. Ĉiuj ĉi bienoj estas viaj, je via komuna dispono por promenadi kaj plezuri !

Kia Cezaro ! Kiam venos alia tia ? !

(Krioj : Neniam, neniam ! Venu, venu tuj ! Ni sankte kremacios lian korpon ! Per torĉoj ni bruligos la domojn de ĉiuj perfidistoj ! Alportu fajron ! Altrenu benkojn ! Benkojn, fenestrojn, pordojn, kion ajn !).

rintojn. Antonio konscias, ke nura emociigo povas baldaŭ vaporigi. Tial li donas konkretan motivon, kiu tuŝas la personan intereson.

La venko de Antonio estas kompleta. La amaso agas plene laŭ liaj deziroj.

La analizo de la parolado el forma vidpunkto estas donita sur la p. 237 k.s. de tiu ĉi libro.

アントニオの演説

(ウィリアム・シェクスピア、第3幕、第2景から)

市民たちは口々に騒いでいる。

アントニオ：

友よ…… ローマ市民諸君…… 我が同胞、耳を貸してもらいたい。私が今ここに來たのは、シーザーを葬るためであって、讃えるためではない。人の悪事はその死後まで残り、善事はしばしば骨とともに土中に埋れる。シーザーもそうあらしめようではないか。高潔の士ブルータスは言った：シーザーは野心を懷いていたと。もしそうだとすれば、それこそ悲しむべき欠点だと言う他はない。そしてシーザーはその酬(むく)いを受けたのだ。私はここに、ブルータスおよびその他の承認を得て——それもブルータスが高潔の士であり、その他の人々とて同じく、すべて高潔の士なればこそ——今、こうしてシーザーの追悼の言葉を述べさせてもらえるのである。

シーザーは我が友であり、つねに誠実、かつ公正であった。だが、ブルータスは言った、シーザーは野心を懷いていたと——しかし、ブルータスは高潔の士である。生前、シーザーはローマに多くの捕虜を連れ帰ったことがあった。そして、その身代金は総て国庫に収めてしまった。かかるシーザーの態度に野心らしきものが少しでも窮(うかが)われるであろうか。

まずしき者が飢えに泣くのを見て、シーザーもまた涙した。野心はもっと冷酷なものではないだろうか…… だがブルータスは言った。シーザーは野心を懷いていたと——しかし、ブルータスは高潔の士である。

諸君、みんなも知っていよう、過ぐるペリカン祭の日の事だ、私は3たびシーザーに王冠を捧げた。しかしシーザーはそれを3たび卻(しりぞ)けた。

果して、これが野心であろうか。だが、ブルータスは言った、シーザーは野心を懷いていたと——しかし、ブルータスはもと

より高潔の士である。

私は何もブルータスの言葉を否定せんがために言っているのではない。ただ私の知っている事を述べんとしているだけである。

諸君もかつてはシーザーを愛していた。もちろん、それだけの理由があつての事だ、では、現在いかなる理由によって、シーザーを悼む心を押えようとするのか。ああ、今や分別も野獣のもとに走り、人々は理性を失ってしまったのであろうか。諸君、許してくれ、私の心はあの柩(ひつぎ)のなか、シーザーと共にあるのだ、それが戻って来るまでは先が続けられぬ。

彼は泣き伏せる。

市民の声：どうやらアントニオの言う事も一理ありそうだ。事の次第をよく考えてみると、シーザーは途方もない濡衣を着せられたことになりそうだ。するとこの後にもつと悪い奴が出て来るかもしれないぞ。アントニオの言った事を聴いたか、シーザーは王冠に触れようとしなかったそうじゃないか、それなら野心など無かったという事になる。だとすれば、誰れかが、それだけの贖(あがな)いをしなければなるまいぜ。かわいそうに、見ろ、眼を真赤に泣きはらいしている。

まさに昨日までは、シーザーの一言よく世界に抗しうるに足るものがあつた。それが今はこうしてみじめな姿で横たわり、いかなる下賤な匹夫といえども、敬意を表しようとしない。

だが、諸君、もしもこの私に、諸君の心を掻き立てて暴動に誘(いざな)おうなどという下心があるとすれば、それこそブルータスを欺(あざむ)き、キャシアスを欺くことになろう。みなも知つての通り、兩人とも高潔の士である。2人を欺く気など私には毛頭ない、それくらいなら、むしろ死者を欺き、また私自身を、さらに諸君を欺くことすら辞せぬであらう。たとえそ

うしても、かの2人の高潔の士に誣告(ぶこく)を与えたくはない……………。

ここにシーザーの印のある一葉の書面がある。シーザーの部屋にあったものだ、ほかでもない。遺言状だ。もしこの遺言状の内容を聴いてもらえるなら——いや、なにもここで読みあげようと言うのではないが——ただそうすれば、諸君はシーザーの傷口に駆け寄り、接吻(くちづけ)して、めいめい裂(き)れをその聖なる血に浸し、さらに髪の毛一筋さえ形身に乞い求め、おのが臨終には、あえてその事を遺言に記し、家の宝として子孫に伝えんとするであろう。

市民の声：遺言状を読んでくれ、アントニオ、それを聴こう。

落ちついてくれ、友人達よ、これを読むわけにはいかぬ、諸君のためによくはあるまい、いかにシーザーが諸君を愛していたか、それを諸君が知ろうものなら。諸君は木石ならぬ、人間だ。人間であるからにはシーザーの遺言を聴けば、ために激昂もし、狂いもしかぬであろう。知らぬに越したことはないのだ。自分達がシーザーの遺産相続人に定められているなどということは。なぜなら、もし知ったならば、おお、いったいどんな事になるであろう。

叫び声：遺言状を読んでくれ。

落ちついてくれ、しばらく待ってもらえないだろうか、私はつい口をすべらせてしまった。私はあの高潔な人士達を欺くことにはなりはせぬだろうか。白刃をもってシーザーを刺したあの連中を、私はひとえにその事を恐れるのだ。

叫び声：謀反人ではないか。何が高潔の士だ、遺言だ、遺言状だ。

では、どうしても遺言状を読めと言うのか。ならば、シーザーの亡骸(なきがら)のまわりに輪を造ってもらいたい。この遺言状を書いた男をはっきりと諸君にみてもらいたいのだ。壇を

降りたいが、許してもらえらるだろうか。

市民の声：降りてくれ、下に降りてくれ、
板によってはいかん、亡骸から離れろ、アント
トニオに道を開けろ、高潔の士、アントニオ
に道を開けろ…………。

もしも諸君に涙があるなら、今こそ、それを流す時だ、諸君はこのマントルに見覚えがあろう。私は忘れもしない、シーザーがはじめてそれを着た日のことが、：夏の夕、戦場の天幕のなかだった。その日、シーザーはネルヴィイ族を打ち破ったのだ。見ろ、ここをキャシアスの短剣が刺し貫いたのだ、見るがいい。この酷(むごい)い傷口こそ憎むべきカスカの手のあとだ。そして、これが、あれほどシーザーに愛されていたブルータスの刃のあとだ。奴がその呪われた剣を引き抜いた時、シーザーの鮮血がまるで戸口を押しあけたかのような勢いで、今の無法な一撃の主がほんとうにブルータスであったのかと、それを確かめるかのように、剣のあとを追ってほとばしったに違いないのだ。諸君も知っての通り、ブルータスはシーザーにとって天使であった。いかなる刃よりも、その一撃は無慈悲極まるものではなかったであろうか、さすがのシーザーも己れを刺さんとするブルータスの姿を見て——いかなる裏切り者の腕よりもはるかに非常のその忘恩に——まったく打ち碎かれてしまったのだ。気魄(きはく)に満ちた心臓もついに己れを支えきれずに、顔をマントルに被いながら、ところもあらうにあのポンペイの脚下に、それが吹き出す血潮に身を浸すかのように、シーザーの巨軀は崩れ落ちたのだ。

諸君、ああ何たる破滅なのであろうか。今や、私がそして諸君が我々の総てが打ち倒されたのだ。しかし、一方では血に汚れた反逆が、われ等の頭上にわが世の春を謳(うた)っているのだ。

ああ、みんな泣いているな、諸君も惻隱の情を禁じ得ぬのであろう。私にはよくわかる。この涙は聖なる恵みの露というべきかもしれぬ。心やさしきものたち、その涙はただシーザーの衣の傷痕を見ただけで流されるというのだろうか。

マントルを引き剥ぐ。

これを見るがよい、これこそシーザーその人だ、暗殺者どもの手で斬りさいなまれたこの姿を。

かなしみの

叫び声：ああ、見るも痛ましい。おお、高邁の士、シーザー、反逆者め、悪党どもが、ああ、世にも無慙な姿だ。

叫び声：みんなで仇を討つのだ。復讐だ、仇を打て
いって奴等を捜し出せ、奴等の家に火をつけろ、焼き打ちだ、殺してしまえ、叩き殺すのだ、1人たりとも生かすな。

市民の声：静かにしろ、アントニオが話しを始める。話しを聴け、おれ達のアントニオの話しを、

友よ、心やさしき友よ、私を煽動(せんだう)の徒にしないでくれ、諸君を反乱の渦に巻き込もうなどとは露ほども思っていないのだ。事を起したものは、みな高潔の士である。私が怨(うら)みを懐くはずがない。どうしてそうまでしなければならなかったのか、不幸にして私は知らない：が、とにかく彼等はいずれも分別をわきまえた高潔の士である。必ずや諸君の前に理由を明らかにするであろう。私がここに來たのは諸君の心を盗んがために來たのではない。私はもとより弁舌の士にはあらず、その点、ブルータスの比ではない。誰れの目にも明らかな通り、一介の野人に過ぎぬ、ただ友を愛するのみである。それを知っているからこそ、ここにこうしてシーザーのために語ることが公然と許してくれたのである。私には才智もなければ、言葉もない。身ぶりよろしく人を惹(ひ)きつける術(すべ)も知らないし、喋(しゃべり)方も不器用なら、説得力にも欠けている。この私がどうして他人(ひと)の血を湧(わ)すことが出来るであろうか。私はただ諸君が知っている事を告げ、ただありのままに話すだけである。私はあの愛するシーザーの傷口を、この痛ましい物言わぬ傷口を諸君に示して、それにみずから私の代りに語りかけさせようというにすぎぬ。もしも私がブルータスであつたら、そしてブルータスがアントニオであつたら、おそらく諸君の心を湧(わ)きたたせ、このシーザーの傷口の1つ1つに、

ローマーの石すら立って乱を起すほど、興奮の渦を巻き起したに違いない。

市民一同：そうだ、乱を起せ、ブルータスの家に火をつけよう。

おお、諸君、どうしたのだ、それでは事の何たるかを知らずに事を挙げようとしているようなものだ。なぜシーザーにそれほどまでの諸君の愛を受ける価値があるというのか、諸君はまだ知らない。それを話しておこう。諸君は遺言状のことを忘れてる。

市民一同：そうだ遺言状だ、遺言を聴こう。

これが遺言状だ、シーザーの印が押してある。ローマ市民総てに、洩れなく分配せよとある。全市民1人1人に、75ドラクマずつ贈れと。

市民の声：何という高潔の士であろう。実に見上げたものだ、シーザーは、彼の死に仇を打つのだ。

静かに聴いてもらいたい。

他にもなお、シーザーは自分の庭のことごとくを諸君に遺しているのだ、生前、よく身を休めたお気に入りの木蔭も、新しく造った果樹園も、ティベール河のこちら岸全部をだ。いや、諸君のためばかりではない。諸君の子々孫々にまで永久に。慰安のための公共の地として、誰れでも気の向くままにそこを散歩し、心をやすめる場所が与えられている。そうした人だったのである、シーザーは、かかる人物が、いつまた現われるであろうか。

叫び声：2度と現れるものか、2度と、さあ行こう。行くのだ、亡骸を神の庭で焼き、その火を反逆者どもの家に投げこむのだ。火を持って来い、ベンチを叩きこわすのだ、腰掛けだろうが、窓だろうが何でもよい、片ばしからぶちこわしてしまえ。

PAROLADO DE LA AŬTORO (*)

(Pri la Internacia Lingvo kiel esprimo kaj antaŭeniganto de universalismaj tendencoj)

Sinjoro prezidanto! Sinjoro reprezentanto de la Ministro pri edukado! Geamikoj!

Denove ni kolektiĝis! En tiu ĉi admirinda lando de helo kaj libereco; en tiu ĉi belega urbo de grandaj spiritaĵoj kaj brilaj kulturaj tradicioj; en tiu ĉi mondfama Sorbono — fajrujo de universala scienco kaj forĝejo de plej noblaj pensoj, kiuj dum jarcentoj nutris la progreson — en tiu medio ni ankoraŭfoje kunvenis el ĉiuj partoj de la terglobo: el okcidento kaj oriento, el nordo kaj sudo, el urboj kaj vilaĝoj, el palacoj kaj kabanoj, el lernejoj, el uzinoj kaj kamparo!

A

Multnombraj estas la naciaj kaj internaciaj, oficialaj kaj neoficialaj, kongresoj, konferencoj kaj aliaj renkontiĝoj, kiuj ĉiutage okazas en diversaj urboj. Jen tie sciencistoj interŝanĝas pensojn, jen aliloke diplomatoj pridiskutas kaj solvas la sorton de la popoloj, jen diversaj fakuloj priparolas siajn problemojn. Kunvenadas personoj, havantaj la saman okupon, la saman religian koncepton, la saman politikan konvinkon. Ĉiam temas nur pri difinita kategorio de homoj.

Nia kongreso havas tute apartan karakteron. Ĝi konsistas el homoj, apartenantaj al ĉiuj eblaj rasoj, nacioj, lingvoj, religioj, politikaj kaj filozofiaj direktoj. En ĝi estas reprezentitaj ĉiuj socitavoloj, ĉiuj profesioj kaj okupoj. Tial nia kongreso — diference de ĉiuj aliaj — estas vere miniatura mondo, mondo en kiu ĝis certa grado reflektiĝas la ekstera realaĵo.

(*) La parolado estis eldirita en la Malferma Kunsido de la 35-a. Universala Kongreso de Esperanto, en Sorbono (Parizo), la 6-an de Aŭgusto 1950. Ĝi estis surbendigita per magnetofono, kio ebligis fidelan reproduktion.

Nur ĝis certa grado ! Ĉar, malgraŭ la multflanka diverseco, malgraŭ ĉiuj diferencoj kaj naciaj kaj sociaj kaj ideaj, tiu ĉi nia eta mondo estas unuece kunligita ne nur per komuna lingvo, sed ankaŭ per la sama idealo !

Iam, antaŭ multaj jaroj, en mondo ŝajne paca kaj trankvila, la aŭtoro de la Internacia Lingvo, la genia doktoro Zamenhof, eldiris la ideon, ke tie, en Bulonjo sur Maro, en la historia jaro 1905, kiam la unuan fojon estis ebligita senpera interkompreniĝo dank'al neŭtrala tuthoma lingvo, kunvenis ne Franco kun Ruso, nek Anglo kun Polo, sed homo kun homo. Vortoj belaj — esprimo de penso profunda !

Hodiaŭ, post du teruraj mondmilitoj, en kiuj milionoj elsangis sur ĉiuj batalkampoj de la kvin kontinentoj, dum aliaj milionoj estis pendumitaj, pafmortigitaj, sufokitaj, vipataj, vundataj kaj turmentataj nur tial, ĉar ili havis alian haŭtkoloron, alian nacian devenon, nur tial, ĉar ili konfesis alian religion, aŭ parolis alian lingvon; hodiaŭ, post kiam sennombraj materiaj kaj spiritaĵoj valoroj estis detruitaj, dum la plej elementaj homaj rajtoj kaj fundamentaj liberecoj piedpremitaj, kiam la plej mallumaj, krimaj pasioj manifestiĝis en timige teruraj formoj; hodiaŭ, kiam ĉio ĉi revekis naciismojn kaj ŝovinismojn, kiam malamo blindigas racion, kiam super niaj kapoj ŝvebas fantomo de nova, ankoraŭ pli nehumana milito; hodiaŭ, geamikoj, esprimi la saman ideon povus ŝajni tro kuraĝe aŭ eĉ freneze ! Ĉar freneza estas tiu, kiu en epoko de ĝenerala frenezeco, ne konformiĝas al ĝi ! Tamen, eĉ riskante esti proklamitaj frenezaj, ni trankvile, sed des pli firme, energie kaj laŭte asertas : Jes, ni ĉi tie, ni — la reprezentantoj de la tutmonda Esperanto-movado — malgraŭ ĉio kaj spite al ĉio, estas kaj sentas nin unue kaj antaŭ ĉio homoj !

B

Cu vere estas tiel, aŭ, eble, tiu nia aserto estas naive-mensoga, senenhava frazo, kontraŭa al la plej evidenta realaĵo, kiun nur ni — blindigitaj de la flama ardo por granda celo,

enlulitaj en sorĉan dormon pro la milde-dolĉaj sonoj de supernacia komunikilo — utopiisme volas nek vidi nek aŭdi ?

Cu estas eble, ke areto da personoj pensu, sentu kaj agu universale home en mondo distranĉita kaj krucumita, en mondo disŝirata de sennombraj antagonismoj, en mondo sangon sanganta el miloj da vundoj ?

Aŭ, eble, ĉi tie okazas ia miraklo ?

Nek unu, nek la alia !

Ni ne estas iaj ekstersociaj estuloj, iaj revantaj fantaziuloj, kiuj naĝante ie en nuboj forgesas la teron, nek ni estas iaj strutoj, kiuj enŝovinte la kapon en la sablon, opinias ke ĉio estas en ordo ! Ni bone vidas la realaĵon, sed ni ankaŭ komprenas, ke en la hodiaŭo ĉiuj ekonomiaj, sociaj, politikaj kaj ideaj kontraŭaĵoj havas du ĝeneralajn trajtojn kaj manifestas du esence kontraŭajn tendencojn sur ĉiuj kampoj: unuflanke troviĝas la tendenco al universalismo kaj aliflanke la tendenco al egoisma regionismo.

La konstanta progresado de universalismo, spite al artefaritaj baroj kaj malhelpoj, estas senduba fakto. Sur la ekonomia kampo ĝi esprimiĝas per ĉiam pli forta interdependeco de la diversaj mondopartoj. Sur politika kampo ĝi montriĝas en la klopodoj formi superŝtatajn internaciajn organismojn, kia estis la Societo de Nacioj kaj kia estas hodiaŭ la Organizaĵo de Unuiĝintaj Nacioj. Sur kampo idea, la scienco kaj arto, kiuj ĝis antaŭ nelonge estis apartenaĵo de fermitaj rondoj, celas direktiĝi ĉiam pli al la tuta homaro. Eĉ la lastaj grandaj militoj — tiuj plej krimaj atakoj kontraŭ la homecon, tiuj monstroj, detruantaj la tuthomaran solidarecon — estas, tamen, samtempe pruvoj pri la universaleco de la mondo. La fakto mem, ke la militoj devis ĝeneraliĝi, ke ili ne povis resti limigitaj nur al kelkaj terpartoj, montras klare, ke la mondo — vole-nevole — havas radikajn komunajn interesojn : sangado de unu parteto sangigas la tutan homaron, prospero en unu parteto prosperigas la tuton !

Kontraŭ tiun ĉi normalan marŝadon de la homaro al unueco, leviĝas la malnovaj kaj maljuniĝintaj, sed ankoraŭ tre fortaj, venenige mordantaj potencoj de mallumo kaj malprogreso.

Sur kampo ekonomia: la lastaj provoj de memsufiĉa aŭtarkio; sur kampo politika: naciismo kaj diktatoreco; sur kampo ideala: ekskluziveco de la nacia kulturo kaj penadoj altrudi ĝin kaj sian propran nacian lingvon al la aliaj!

Giganta estas tiu lukto inter la putriĝantaj restaĵoj de la pasinteco kaj la brilantaj perspektivoj de la estonteco. Lukto en kiu estas mobilizitaj ĉiuj fizikaj kaj moralaj fortoj, kaj kies atestantoj kaj partoprenantoj estas ankaŭ ni!

Malfacile kaj peze la universalismo traboras al si la vojon tra marĉoj, nebuloj kaj tempestoj, inter fajro kaj glacio, sub insidoj kaj obstakloj al la ore sunumitaj pintoj de ekonomia bonstato, al la lazuraj serenoj de socia justeco kaj libereco! Sed nehaltigeble, venke ĝi marŝas antaŭen.

Estis Kant kiu diris, ke ekzistas postulatoj de la racio kaj postulatoj de la historio. Estu al mi permesite iom ŝanĝi la personon de Kant kaj diri: la universalismo estas postulato racia, ĉar ĝi estas postulato de la historia evoluo de la homaro, kiu — kondiĉite de la teknika progresado — iras de diverseco kaj plureco al konkordo kaj unueco.

La homaro fariĝas konscia pri si mem! Ĉiam pli kaj pli!

C

Kia estas la pozicio de la Esperantismo en tiu situacio?

La ideo pri Internacia Lingvo estas esprimo de la universalismaj tendencoj. La realigo de tiu ideo en formo de nia Esperanto estas la plej konkreta, preskaŭ fizike palpebla manifestiĝo de tiu celado al tuthomeco. Sed, samtempe, ĝi estas ankaŭ la plej forta apogilo, la plej potenca antaŭeniganto de tiu sama universalismo, kiu ĝin kreis.

La lingvo — tute egale kiu, la lingvo ĝenerale — estas socia fenomeno, kiu troviĝas en funkcia rilato kun la bazo, el kiu ĝi elkreskis. La lingvo ebligas ne nur la pensadon kaj la reciprokkan komunikadon de ideoj, sed ĝi ankaŭ kreas certan senton de komuneco inter la personoj, kiuj ĝin uzas. Naskita de la socio, ĝi mem cementigas la socion, ŝirmante ĝin de disfalo.

Tute same: la Internacia Lingvo ne estas sole teknika

rimedo de pensado, nek nura peranto de pensointerŝanĝoj en internaciaj kadroj. Ĝi havas ankaŭ profundan idean signifon. Same kiel la naciaj lingvoj ludis kaj ludas unu el la ĉefaj roloj en la formiĝo de la nacioj, same tiel la Internacia Lingvo — neŭtrala, supernacia interkomprenilo — formas kaj stimulas la tuthoman, universalan solidarecon.

La uzado mem de la samaj vortoj proksimigas la homojn. Eĉ se Esperanto limiĝus nur al tio, ĝia rolo estus granda. Sed la Internacia Lingvo, ebligante rektajn, senperajn kontaktojn tra la tuta mondo, klare evidentigas la esencan samecon de la homa naturo.

Multnombraj sciencaj verkoj estas skribitaj pri tiu temo. Diversaj religioj proklamis la principon kiel unu el fundamentoj de la respektiva religia koncepto. La filozofio pridiskutis la demandon ĉiufanke. Multe kaj ofte oni parolas pri ĝi. Tamen nur ni, la uzantoj de la Internacia Lingvo, ne nur parolas pri tuthomara solidareco, ne nur mense ĝin komprenas, sed ankaŭ sentas ĝin. Ni konkrete sentas, ke ĉiuj homoj — sen ia ajn konsidero al la diferencoj rasaj, naciaj, lingvaj aŭ religiaj — estas kaj devas esti egalaj en sia kvalito de homoj. Tial ni ankaŭ sentas, ke devas malaperi ĉiu ajn formo de subpremado aŭ de superregado de unu popolo super la alia, ke devas malaperi ĉiuj privilegioj, bazitaj sur rasa, nacia, lingva aŭ religia apartenoj. Mallonge, ni profunde sentas la veran universalismon, kies konsistaj partoj estas egaleco de ĉiuj homoj, spirita libereco, socia justeco kaj interpopola paco.

Tiun ĉi vere revolucion ŝanĝiĝon en la pensomaniero kaj sentado, kiujn kreas la Internacia Lingvo; tiun ĉi transformiĝon de mallarge nacia konceptado al universale homa konceptado, kaŭzitan de la Internacia Lingvo, komprenis same bone, aŭ eĉ pli bone, la malamikoj de universalismo, ol ĝiaj adeptoj, ol, kelkfoje, eĉ la esperantistoj mem!

Ne estas hazardo, geamikoj, ke ĉiuj tiranecaj kaj despotecaj reĝimoj levis sin kontraŭ Esperanton, malpermesis la lingvon, persekutis la esperantistojn! Se Esperanto estus ia infanludilo, se pere de ĝi oni ne povus interkompreniĝi, se ĝi havus

nenian idean signifon, kredu al mi, ke ili grandskale propagandus ĝin. Sed ĉar la Internacia Lingvo havas grandegan spiritan forton, ĉar ĝi troviĝas ĉepinte de universalismo kaj tuthomeco, ĝi estis kaj estas atakata de ĉiaspecaj ŝovinistoj. Tiuj atakoj ne devas nin timigi nek senkuraĝigi. Kontraŭe, ni fieru pri ili! Ni fieru, se tiraneco nin kontraŭstaras, ĉar tiraneco ĉiam kontraŭstaras noblecon kaj veran progreson. Tiuj atakoj konvinku nin ankoraŭ pli firme pri la praveco, vereco kaj grandeco de nia afero. Ni konsciu, ke la spirito estas nevenkebla krom se ĝi mem rezignas pri defendo kaj rezisto! La ideon oni povas nek enkatenigi, nek aresti, nek mortigi! *Guste tial jam okazis*, kaj ankoraŭ okazos, ke vastaj imperioj malaperis, ke iam tremigaj diktatoroj kaj aŭtokratoj falis, sed nia Esperanto restis, vivas kaj prosperas, altrudiĝante ĉiam pli impete al la vekiga konscienco de la homaro.

Kun la nepra venkado de universalismo venkas ankaŭ Esperanto. Kun venkado de Esperanto la vera, sincera universalismo akiras novajn poziciojn. Pri tio ni ĉiuj estu profunde konsciaj!

D

La universaleco de la Lingvo trovis adekvatan organizan formon en nia Universala Esperanto-Asocio, en ĝiaj kongresoj, kunvenoj kaj diversaj aranĝoj.

U.E.A. estas neŭtrala. Ĝi troviĝas ekster kaj super la politikaj luktoj, sed en ĝiaj fundamentoj troviĝas la principo de la respekto al la homaj rajtoj kaj liberecoj. Tio signifas, ke ĝi — celante disvastigi la Internacian Lingvon kune kun ĝia nedisigebla apartenaĵo: la spirita proksimiĝo de la homoj — ebligas al ĉiuj siaj membroj konservi siajn proprajn mondrigardojn kaj konvinkojn, libere esprimi siajn opiniojn. La neŭtraleco ne signifas, do, senideecon aŭ uniformigon de la penso! Male, ĝi estas konvena grundo por kresko kaj florado interne de la movado de ĉiaspecaj pensoj kaj ideoj — krom tiuj, kiuj evidente kontraŭas al la esenco mem de la Internacia Lingvo kaj de ĝia ideo signifo.

Tial ni — inspiritaj de tiu komuna idealo, armitaj per komuna komunikilo — formas unuecan tuton malgraŭ la diverseco de ideoj, konvinkoj, mondrigardoj kaj opinioj. Tial ni estas komprenemaj kaj toleremaj rilate al ĉio, krom rilate al apertaj atakoj kontraŭ la liberecon kaj toleremon. Ĉar, vere, toleremo toleras ĉion krom maltoleremo !

Guste tial nia Universala Esperanto-Asocio estas la sola hodiaŭ ekzistanta internacia neŝtata organizaĵo, kiu havas efektivajn membrojn en ĉiuj partoj de la mondo; organizaĵo, kiu ebligas, ke ĉe la sama tablo egalece kaj amikece diskutu la reprezentantoj de ĉiuj nacioj, de ĉiuj rasoj, lingvoj kaj religioj ! Inter la esperantistoj la respekto de la homaj rajtoj kaj fundamentaj liberecoj ne estas bela propaganda frazo, sed realaĵo, fundamenta gvidprincipo de la tuta agado, esence, je vivo kaj morto, ligita al la ideo mem de la Internacia Lingvo.

La neŭtraleco, plue, signifas, ke en eksteraj rilatoj ni ligas nin al neniuj politika koncepto, al neniuj alia movado, al neniuj fremda ideologio. Kiel esperantistoj ni estas memstaraj kaj sendependaj kaj ni iras nian propran vojon. Tio, kompreneble, ne signifas, ke ni estas indiferentaj rilate al la okazaĵoj en la mondo. Ni tre bone scias, ke la Internacia Lingvo povas grandskale prosperi nur en kondiĉoj de libereco kaj de amikecaj rilatoj inter la popoloj. Aliflanke ni ankaŭ scias, ke unu el la plej fortaj motoroj por la progresigo de tiu nobla idealo estas ĝuste la Internacia Lingvo.

Tial ni entuziasme salutas la liberecon kaj la interpopolan fratecon !

Tial ni kondamne levas nian voĉon kontraŭ la sklavecon kaj la militon !

Tial ni protestas pro la malpermeso de la Internacia Lingvo, tute egale de kiu flanko ĝi venas !

* *

*

La 35-a Universala Kongreso de Esperanto okazas en epoko tre streĉita, preskaŭ uragana. Pezaj, grizaj nuboj pendas super ni. Malordo regas la aferojn, konfuzo regas la ideojn.

En tiaj cirkonstancoj ankoraŭ pli elsaltas la graveco de nia Kongreso. Ĝi estas vera ekbrilo en mallumo, diamanto en nigra marĉo, radio de optimismo en la ĝenerala pesimismo !

Ankoraŭfoje ni montru al la mondo la perfektecon de nia lingvo ! Ni pruvu al ni mem kaj al ĉiuj, kiuj volas vidi kaj aŭdi, kioma estas la idea, paciga forto de la Internacia Lingvo, kioma estas ĝia kultura valoro !

La 35-a Universala Kongreso estu granda, impona manifestacio ne nur por la neŭtrala tuthoma lingvo, sed ankaŭ por la homeco !

Al ni ĉiuj ĝi donu freŝan energion, por ke ni povu ankoraŭ pli unuece, ankoraŭ pli konvinke, ankoraŭ pli oferece daŭrigi la vojon al la fina celo, en la intereso de interkompreniĝo ne nur buŝa, sed ankaŭ kaj precipe mensa, kora, spirita de ĉiuj bonintencaj, vere progresemaĵ homoj !



近代雄弁学 (下)

定価 九五〇円

昭和52年9月1日 第1刷発行

著者 イヴォ・ラペンナー博士
翻訳者 小島輝久

発行所 有限会社国際語現代研究所

神奈川県横浜市磯子区

洋子台五十六・十三・一〇四

郵便番号 二三五

印刷所 有限会社みろく堂美術印刷

※落丁本・乱丁本はおとりかえします。